『題詠俳諧明治千五百題』について
－同時代の類題句集との比較による考察－

筑波大学
図書館情報メディア研究科
2019 年 3 月
田中鞠衣

目次

1. はじめに 1
1. 1. 類題句集を研究対象に取り上げる意義 1
1. 2. 類題句集に関する先行研究 1
1. 3. 『題詠俳諧明治千五百題』を研究対象として取り上げる意義 5
1. 4. 研究手法 13
2. 『題詠俳諧明治千五百題』に関する調査 14
2. 1. 編者 14
2. 1. 1. 編者とその弟子、北洲 15
2. 2. 成立経緯 17
2. 3. 書名 22
2. 4. 書誌・諸本調査 27
2. 5. 本文に掲載された題及び各題の句数 32
2. 6. 人名録の書式 33
2. 7. 人名録に掲載された俳人数 34
2. 8. 各俳人の句数 36
2. 9. 各地域の句数 37
2. 10. 発行書林に掲載された書店数 38
2. 11. まとめ 41
3. 『俳諧明治七百題』に関する調査 42
3. 1. 編者・校正者 42
3. 2. 成立経緯 42
3. 3. 書誌情報 44
3. 4. 本文に掲載された題及び各題の句数 45
3. 5. 人名録の書式 46
3. 6. 人名録に掲載された俳人数 46
3. 7. 各俳人の句数 47
3. 8. 各地域の句数 47

3.9. まとめ 48
4.『題詠俳諧明治千五百題』と『俳諧明治七百題』との比較 49
4.1. 本文に掲載された題に関する比較 49
4.2. 人名録の書式に関する比較 77
4.3. 人名録の俳人数に関する比較 78
4.4. 各俳人の句数に関する比較 79
4.5. まとめ 84
5. おわりに 85
文献リスト 87

1. はじめに

本研究は、明治期に刊行された俳書の全体像解明の一段階として、明治 15 年(1882)に刊行された類題句集『題詠俳諧明治千五百題』の特徴について明らかにする。

1. 1. 類題句集を研究対象に取り上げる意義

類題句集は、俳諧に関する知識の一般化に大きな役割を果たした。類題句集とは、『俳文学大辞典』によると[1]、「習作の便宜や類句の検索のため、古今の発句を集成し、題によって分類した集」とされるものである。後述するように、江戸時代において「五百題」のように切りの良い定数が書名に含まれる類題句集は、天明 7 年(1787)から多く刊行されようになった。それに引き続き明治期においても数多くの同様な類題句集が刊行された。

類題句集は「俳諧」を編纂したものであるため、文学研究の対象となると考えられるが、「編纂物」であるため、文学研究において評価は低く、これまであまり注目されてこなかった。そのため、どのような特徴を持った出版物が刊行されているのかについても明らかにされていない点が多い。

しかし、類題句集は明治期に刊行された俳書の中でも特に多く出版されたと言われている[2]。また、中には句が掲載された俳人の国名や住所等が記載された人名録が付されているものもあり、それらから類題句集が当時広く普及したことが推測できる。加えて、当時生み出された言葉が題として詠み込まれているものもあり、言葉の流行を促した可能性がある。以上の点から、類題句集は当時としては需要が高く、広く普及し、影響力を持っていたメディアと捉えることができ、メディア研究の対象として資料を考察することは意義があると考える。

1. 2. 類題句集に関する先行研究

はじめに先行研究を整理する。

①越後敬子「明治期旧派類題句集概観」(1998 年)

この研究では、国立国会図書館が所蔵する明治期に刊行された俳書の内、書名から類題句集と判断できる 106 点について、(1)書名、(2)編著者、(3)冊数、(4)版本か活字本かの区別、(5)発行年、(6)今人の句を纏めたものなのか、古人の句を纏めたものなのか、今人古人両方の句を纏めたものなのかの区別、(7)発行所、(8)備考の 8 項目に分類し、表に纏めている。この表を参照することにより、明治時代にどのような類題句集が刊行されたのか、その大方を把握することができる。

また、106 点の内、明治維新以後に編まれた 82 点に対し、越後氏は(1)どのような意図のもと、作成されたのか、(2)改暦による季題の扱い方、(3)文明開化によりもたらされた新題の扱い方という観点から調査を行っている。(1)については、対象資料の中で序や凡例において、編集目的が明らかにされているものを調査対象に取り上げ、その記載内容について調査し、今現在句作するにあたり、どのような句を詠むべきかを初心者に知らしめることに重きを置くものが多いということを明らかにした。

(2)については、明治 5 年(1872)に太陰暦から太陽暦へと改暦されたことにより、それまで夏に区分されていた 4 月の季語が春に、秋に区分されていた 7 月の季語が夏に、冬に区分されていた 10 月の季

---

[1] 尾形仂[ほか]．俳文学大辞典．角川書店，1995，p．974.

[2] 越後敬子．“明治期旧派類題句集概観“．明治開化期と文学．国文学研究資料館編．臨川書店，1998，p．147.

語が秋に区分されるようになった。類題句集では、四季毎に季題が分類され、各題の下にその題を詠み込んだ句が掲載される形式を採る。そのような形式を採るからこそ、句集を編纂するに当たって、上記の変化は密接に関わってくる。当時の俳人たちは、この変化に対応できたのか、その点について明らかにするため、対象資料の中で序や凡例において改暦による季の扱いに言及しているものに関して調査が行われた。その結果、序や凡例からは俳諧師たちが新暦の採用に積極的であったことがうかがえたものの、実際に本文における季題の分類のされ方を確認すると、旧季節のまま季題が扱われている場合が多いということを明らかにした。

(3)については、対象資料の中から書名に「開化」の語をつけたり、「開化の部」を設けたりしているもの、それ以外で四季の部に開化新題を含むものを対象に取り上げ、調査した結果、刊行されたものの多くが文明開化の世相を反映することには消極的であったことを明らかにした。

②越後敬子「明治の類題句集－旧派と新派を比較して－」(1998 年)

この研究では、正岡子規に代表される新派と、新派登場以前に活動していた旧派の俳人が作成した類題句集について、(1)どのように句を募集したのか、(2)改暦による季の扱い方、(3)文明開化によりもたらされた新題の扱い方という観点から、比較が行われている。

(1)について調査するに当たり、新派に関しては、国立国会図書館が所蔵する 30 点と、『子規全集』第 16 巻(1975 年、講談社)に載る類題形式の俳句選集 3 点が、旧派に関しては、「俳諧明倫雑誌」に掲載された俳書の広告が対象資料として取り上げられている。調査の結果、新派の対象資料の殆どに共通して、それぞれの句集の序や凡例、または編纂過程が明らかとなる資料に、選出された句の出典が記されていることが分かった。ここから、新派は類題句集編纂の際に募句を行わず、俳句雑誌・総合雑誌の募集俳句欄に投吟し、一度選出された句を再選して四季類題別に配列する方法を採っていたことを明らかにした。これに対し、旧派は類題句集を編纂する予定のあることを前もって、「チラシ」や雑誌の広告欄等で呼びかけ、入花[3]を徴収し、必ず句が入集することを約束して募句を行っていたことを明らかにした。

続いて(2)について調査するに当たり、新派に関しては上記調査で用いられた 33 点が、旧派に関しては、先行研究①として先に取り上げた「明治期旧派類題句集概観」で得られたデータが比較対象として使用されている。調査の結果、新派の類題句集の序や凡例において、季の扱いについて触れているものは 1 点のみであり、新派俳人は、旧派俳人と比較して改暦による季のズレに拘泥していないことを明らかにした。

また(3)に関しても、(2)で用いられた資料と同様のものを対象に調査が行われた。結果として、新派はカタカナの題、学校制度の近代化による題、徴兵制度による題等、旧派には見られなかったものを多く詠み込んでいたことを明らかにした。

③河合章男「明治期の俳書・俳誌の研究」第 3 章　明治俳書刊行の推移(2006 年)

この研究では、明治期に出版された刊行年の明らかな類題集 198 件について、書名や装丁の観点から調査が行われている。同論文には、書名に「類題」の語を含む類題集 55 件のリストが記載されている。この中で、明治 23 年(1890)に刊行された類題集までは全て和装であり、明治 25 年(1892)から洋装が、その後、和装と洋装が入り交じるが、明治 37 年(1904)に刊行された類題集から全て洋装となる、

[3] 投句料を指す。

という装丁上の変化が確認されている。

河合氏の論文には、「五百題」のように題数を書名に含むものについて、題数毎の作品数が掲載されている。筆者がその総件数を集計したところ、128 件であった。また、河合氏の論文で調査された類題集総計 198 件の中には、「題」の語を含まない類題集も含まれている。その件数について論文中では明記されていないが、筆者が総計 198 件から「類題」の語を含む類題集 55 件と題数を書名に含む 128 件を差し引いたところ、15 件であることが分かった。以上より総計 198 件の中では、書名に題数を含むものが最も多いことが分かった。また、河合氏の論文に掲載されている件数のデータから、書名に題数を含むものの中では多いものから順に「五百題」53 件、「千題」15 件、「六百題」14 件、「八百題」12 件(以下略)と続いていき、「五百題」と銘打つものが最も多いことが分かった。河合氏の調査データから、当時としては題数を書名に入れることが好まれたのではないかと推測されるが、なぜ五百題と銘打つものが最も多くなっているのか、この点については考察の余地がある。

以上、先行研究①～③は、調査対象を多く集め、当時刊行された類題句集に見られる傾向を分析しているのに対し、以下に取り上げる先行研究では、個々の類題句集に焦点を当て、1 点 1 点の特徴について調査・考察している。

④越後敬子「『俳諧開化集』－教林盟社と改暦」(2003 年)

この研究では、明治 14 年(1881)に刊行された『俳諧開化集』を調査対象に取り上げ、(1)校訂者、(2)編者、(3)人名録に掲載された俳人数、地方別の俳人数、(4)掲載題数・句数の観点から調査されている。調査の結果、『俳諧開化集』は、教林盟社[4]社中を中心に、そのほか当時の有名俳諧師たちの文明開化に関する句を一同に集めた句集であることが明らかになった。

⑤河合章男「明治期の俳書・俳誌の研究」第 4 章　明治期に刊行された和装の句集(2006 年)

この研究では、明治 12 年(1879)に刊行された『古今俳諧明治五百題』と、明治 22 年(1889)に刊行された『明治俳諧金玉集』という 2 点の類題句集が取り上げられている。『古今俳諧明治五百題』については、(1)書誌情報、(2)成立経緯に関して調査されており、「開化の部」の翻刻もなされている。調査の結果、『古今俳諧明治五百題』は、開化の概念や事物の題詠にいち早く取り組んだ句集であること、当時の類題集の企画、募句、編集、刊行に至る経緯を具体的に知ることができる資料であることが明らかになった。

『俳諧金玉集』については、(1)序・跋、(2)「乾の部」の掲載題数・句数、(3)「坤の部」の内容調査、(4)人名簿に掲載された俳人総数、地域別の俳人数に関して調査されている。調査の結果、『俳諧金玉集』は、「乾の部」が発句の類題集となっており、月別に編纂されていること、「坤の部」には、様々な形式の俳文芸が掲載されていること、また名簿には、地域毎に俳号、住所、本名が纏められており、参加者は全国に及んでいることが明らかになった。

⑥鈴木円香・綿抜豊昭「『古今俳諧明治五百題』ついて」(2009 年)

この研究では、先行研究⑤として紹介した「明治期の俳書・俳誌の研究」においても取り上げられ

[4] 俳諧教導職制度のもと、明治 7 年(1874)4 月に設立。初代社長は月の本為山で、橘田春湖、鳥越等栽、小野素水、松平呉仙らが加盟。(尾形仂[ほか]．俳文学大辞典．角川書店，1995，p．224．参照)

ている『古今俳諧明治五百題』について、(1)編者、(2)書誌情報、(3)諸本に見られる異同、(4)なぜ書名を「古今俳諧明治五百題」としたのか、(5)本文はどのような部立から成るか、各部立の題数、各題の句数、全題数、全句数、(6)人名録に掲載されている全俳人数、各地域の俳人数、(7)発行書林に掲載されている全書店数、各地域の書店数といった観点から調査を行っている。諸本調査では、同書は第四刷まで刷られており、それだけ需要が高かった可能性があることが分かった。また、季題を見ると、太陽暦に則って四季毎に分類され、文明開化によりもたらされた新題も取り入れられており、積極的に新しい時代に即応しようとしたこと、人名録では、他の俳書では俳号のみで本名が不明な人の本名と住所を知ることができ、尚且つ初刷から第四刷に至るまで増補改訂がなされており、より正確な情報が掲載されていることが明らかになった。また、発行書林に関する調査によって、同書が全国の書店で取り扱われていたことが分かった。

⑦吉澤駿裕「『明治新五百題』について」(2014 年)

この研究では、明治 14 年(1881)に『古今俳諧明治五百題』の続編として刊行された『明治新五百題』について、(1)成立事情、(2)編者、(3)撰者、(4)書誌情報、(5)所蔵機関、(6)本文はどのような部立から成るか、各部立の題数、各題の句数、全題数、全句数、(7)人名録に掲載された全俳人数、各地域の俳人数、(8)発行書林に掲載されている全書店数、各地域の書店数、(9)誤刻といった観点から調査が行われ、加えて『古今俳諧明治五百題』との比較がなされている。調査の結果、『明治新五百題』は、前作と同じ題目も多く設けられているが、同じ句は収録されていないこと、人名録は地域別に俳号が列挙されるにとどまること、開化之部は設けられていないことが明らかになった。また、人名録の調査により、収録俳人は関東や東北等東日本に多く分布していることが分かった。加えて発行書林の調査により、各地域とその店舗数が前作の『古今俳諧明治五百題』と一致することが明らかになった。また、誤刻の調査により、同書は需要が高かったことがうかがえるものの、その内容は決して巧緻な作りではないことが分かった。

⑧山下泰史「『明治新々五百題』について」(2014 年)

この研究では、明治 17 年(1884)に『古今俳諧明治五百題』の続々編として刊行された『明治新々五百題』について、(1)編者、(2)書誌情報、(3)所蔵機関、(4)本文はどのような部立から成るか、各部立の題数、各題の句数、全題数、全句数、(5)人名録に掲載されている全俳人数、各地域の俳人数、(6)発行書林に掲載されている全書店数、各地域の書店数といった観点から調査が行われている。調査の結果、『明治新々五百題』は、開化の部が設けられており、その収録句数は前々作より多くなっていることが分かった。このことから、明治期の人々が文化の移り変わりに適応していった様子をうかがうことができる。また、人名録には、俳号や住所、本名について詳細な情報が記載されていること、発行書林は全国の書店で発行されており、それだけ需要の高い句集であったことが明らかになった。

⑨横松令奈・綿抜豊昭「「明治新撰俳諧姿見集」について」(2010 年)

この研究では、明治 15 年(1882)に刊行された「明治新撰俳諧姿見集」について、(1)書誌情報、(2)成立事情、(3)本文はどのような部立から成るか、各部立の全題数、全句数といった観点から調査が行われ、人名録の翻刻もなされている。調査の結果、「明治新撰俳諧姿見集」は、人名録が付されており、当時の俳人の住所を知ることができること、下総野田地方の文化人である茂木房五郎の事蹟の資料と

して価値があることが明らかになった。

先行研究④～⑨に共通する主な調査項目を纏めると、(1)編者、(2)句集の成立事情、(3)体裁、表紙・見返し・刊記の記載事項、丁数等の書誌情報、(4)所蔵館の諸本における異同、(5)各部立の題数・句数、各題の句数等の本文の構成、(5)人名録に掲載されている俳人数、各地域の俳人数、(6)発行書林に掲載されている書店数、各地域の書店数、といった観点から調査が行われている。

また、先行研究④～⑨により明らかになった点としては、人名録の書式については、国別に俳号を並べたもの、地域別に俳号、住居、本名を並べたもの、俳号、住居、本名を俳号のいろは順に並べたもの、俳号、住居を俳号のいろは順に並べたもの等が存在すること、地域別の俳人数については、編者の出身地・居住地の俳人が多くなる傾向にあることが挙げられる。ただ、当時の俳人間のつながりや、俳諧の地域的な広がりを推測するためには、より多くの資料を調査する必要があると考える。

また、発行書林に関しては、先行研究⑥～⑧で言及されているが、各類題句集に共通する特徴として 250 の書店が掲載されており、その分布は全国各地に及んでいるものの、東日本の書店数が多く偏りが見られるということが明らかになった。ただ、これについては同じ人物により編集されたためにこのような傾向が見受けられる可能性が高く、異なる人物が編集した句集との比較が必要である。

本節では、明治期の類題句集に関する先行研究について整理してきた。越後氏の研究により、類題句集が当時どのくらい刊行されたのかについてはおおよそ明らかにされてきたと言える。しかし、明治期に刊行された個々の類題句集の特徴を分析した研究は未だ少なく、当時、俳人が全国にどのくらい存在したのか、当時の俳人がどのような季節観を持っていたのかといった、明治期における俳諧文化の全体像を論ずるための材料が十分に揃っているとは言えない。全体像についての議論は、1 つの資料を見て完結する訳ではない。だからこそ、より多くの資料を検証し、積み重ねていく必要がある。

1.3.『題詠俳諧明治千五百題』を研究対象として取り上げる意義

本節では、なぜ『題詠俳諧明治千五百題』を研究対象として取り上げるのか、その意義について整理する。先行研究①では江戸期の復刊本も含め 106 点について、書名、編著者、冊数、版本か活字本かの区別、発行年、今人の句を纏めたものなのか、古人の句を纏めたものなのか、今人古人両方の句を纏めたものなのか、江戸期の復刊本なのかの区別、発行所、備考の 8 項目に分類し、表に纏められている。本研究では、先行研究①で越後氏が調査を行った 106 点の内、古今、古人、今人の句を集めたものの中で、人名録、発行書林が付されているものを調査した。先行研究①に掲載されている表の書名、編著者、発行年、古今、版本か活字本かのデータに、人名録・発行書林の有無、書式を追加したものが次頁の【表 1】である。なお、先行研究①に掲載されている表では、『題詠俳諧明治千五百題』の発行年が「明治 14 年 10 月」となっているが、本研究で調査を行った際には見返し・奥付に「明治 15 年 8 月」と記載されていたため、【表 1】では見返し・奥付に掲載されている発行年を記載した。 また、先行研究①に掲載された表に取り上げられている類題句集以外に新たな句集を確認し、表を増補することはできなかった。その点については、今後の課題としたい。

【表 1】

No	書名	編著者	発行年	古今	版活	人名録	人名録書式	発行書林	発行書林書式
1	今人千題発句集	桜井梅室編	明治 1 年	ー	版				
2	類題図画明治発句集　春	語石庵精知編	明治 9 年 9 月	古今	版	×		×	
3	新撰明治六百題	三森幹雄撰	明治 12 年 1 月	今	版	○	国毎に俳号	○	国名、代表者名
4	俳諧七百題	小蓑庵碓嶺撰	明治 12 年 7 月	ー	版				
5	俳諧発句五百題	小蓑庵碓嶺撰	明治 12 年 8 月	ー	版				
6	明治五百題	小築庵春湖撰 三森幹雄撰 東旭斎編	明治 12 年 9 月	古今	版	○	いろは順に俳号、その下に住居、本名	○	国名、代表者名
7	発句俳諧九百題	椿海湖堂編	明治 12 年 11 月	今	版	×		×	
8	明治類題図画発句集	語石庵精知編	明治 12 年 11 月	古今	版	×		○	国名、代表者名
9	明治大家発句集	中山英蔵編	明治 12 年 12 月	今	版	×		×	
10	俳諧発句八百題	潮堂佳一編	明治 13 年 2 月	ー	版				
11	発句八百題	小蓑庵碓嶺遺稿	明治 13 年 3 月	ー	版				
12	古今名吟集	月窓庵露光編	明治 13 年 9 月	古今	版	×		○	東京、代表者名
13	発句明治集	内海良大編	明治 13 年 10 月	今	版	○	国毎に俳号、その下に庵名もしくは本名	×	
14	俳諧千五百題	小蓑庵碓嶺撰 潮堂佳一編	明治 14 年 2 月	ー	版				

15	名家類題発句集	宮川利助編	明治14年4月	?	版				
16	明治類題集	如斯亭可転撰	明治14年5月	今	版	×		×	
17	近世発句明治千題集	春園雀歩遺稿竹二庵全九増輯山本与助編	明治14年6月	今	版	○	国毎に俳号	×	
18	俳諧明治新五百題	小築庵春湖撰三森幹雄撰東旭斎編	明治14年6月	今	版	○	国毎に俳号	○	国名、代表者名
19	明治五百題	梅月庵清湖編	明治15年1月	古今	版	×		○	国名、代表者名
20	俳諧開化集	西谷富水編	明治15年6月	今	版	○	住居、本名	○	国名、代表者名
21	俳諧姿見集	小築庵春湖撰夜雪庵金羅撰月の本素水撰大垣園東岡編	明治15年6月	古今	版	○	いろは順に住居、俳号	×	
22	俳諧明治千五百題	松田聴松編	明治15年8月	今	版	○	いろは順に俳号、その下に住居、本名	○	国名、代表者名
23	俳諧明治七百題	大梅居澄江編	明治15年10月	今	版	○	国毎に俳号	×	
24	発句五百題	其角堂永機編雪中庵梅年編	明治15年11月	今	版	×		○	国名、代表者名

25	発句五百題集	藤庵太年編	明治16年3月	今	版	○	国毎に俳号 古人は最後に纏めて掲載	×	
26	明治類題集	橘香園主人編	明治16年4月	今	版	×		×	
27	俳諧古今六百題	渓斎阿嚢撰	明治16年5月	―	版				
28	明治類題集	兵藤荘三郎撰 冨春斎松里編 松園古勢編 閑里園平波編	明治16年6月	今	版	×		○	国名、代表者名
29	発句九百題	過日庵祖郷撰	明治16年6月	―	版				
30	発句千二百題	小蓑庵碓嶺撰	明治16年6月	―	版				
31	明治袖珍五百題	山本与助編	明治16年12月	今	版	×		○	国名、代表者名
32	俳諧明治六百題	八巣謝徳編	明治17年4月	今	版	×		○	国名、代表者名
33	俳諧絵入八百題	其角堂永機編 雪中庵梅年編	明治17年4月	今	版	×		×	
34	俳諧大陽六百題	栗庵宇山編	明治17年6月	今	版	×		○	国名、代表者名
35	発句万代集	栗庵宇山編	明治17年6月	―	版				
36	掌中発句五百題	長木栄治郎編	明治17年6月	―	版				
37	掌中新五百題	長木栄治郎編	明治17年6月	―	版				
38	俳諧明治新々五百題	東旭斎編	明治17年7月	今	版	○	いろは順に俳号、その下に住居、本名	○	国名、代表者名
39	明治発句題砂	語石庵	明治17	今	版	×		×	

	子集	精知編	年7月						
40	俳諧明治万題集	月の本為山編	明治18年2月	今	版	×		○	住居、代表者名
41	俳諧常陸千題	雅言堂瀧江編	明治18年2月	今	版	○	村名毎に俳号	×	
42	四季発句集一～四号	降雪庵銀界編	明治18年10月	今	活	×		×	
43	明治発句図画秋津集拾遺	語石庵精知編	明治19年1月	今	版	×		×	
44	明治発句続題砂子集	語石庵精知編	明治19年2月	今	版	×		×	
45	明治五百題	一事百古編	明治19年3月	古今	版	×		×	
46	俳諧摘要掌中発句五百題	春秋庵白雄撰 田喜庵護物撰 蕪庵蟹守撰 加藤正七編	明治19年3月	―	版				
47	俳諧発句続々題砂子集	語石庵精知編	明治20年2月	今	版	×		×	
48	発句千題集	叢中庵二蝶遺稿	明治20年5月	古	活	×		×	
49	俳諧五百題	過日庵祖郷撰	明治20年12月	―	版				
50	俳諧増補新六百題	栗庵宇山編	明治21年10月	今	版	×		○	国名、代表者名
51	発句五百題	酔月庵永児編	明治22年6月	古今	活	×		×	
52	新撰明治五百題	槇五鳳編	明治22年10月	今	版	×		○	国名、代表者名
53	明治俳諧金玉集	真風舎桑月編	明治22年11月	今	版	×		×	
54	明治玉簾集	春秋園瀧川編	明治22年12月	今	版	○	俳号のみ	×	

55	明治類題発句集	泮水園芹舎編	明治23年1月	今	版	×		×	
56	俳諧明治六百題	一事庵史栞編	明治23年3月	今	版	×		×	
57	古今五百題	春秋庵有柳編	明治23年6月	古今	版	○	国毎に俳号	×	
58	俳諧明治五百題	語石庵精知編	明治23年11月	今	版	×		×	
59	俳諧明治新五百題	語石庵精知編	明治23年11月	今	版	×		×	
60	俳諧明治八百題	花房庵芳洲編	明治23年11月	今	版	×		×	
61	新選年浪発句集	半日庵芳律撰 大館兼太朗編	明治23年12月	今	版	×		○	住所、代表者名
62	俳諧発句八百題	潮堂佳一編	明治24年1月	―	版				
63	俳諧発句六百題	一事庵史栞編	明治24年6月	古	版	×		×	
64	俳諧発句五百題	一事庵史栞編	明治24年6月	古	版	×		×	
65	俳諧発句七百題	一事庵史栞編	明治24年6月	古	版	×		×	
66	新五百題	春秋園武田編	明治24年10月	今	版	○	54の改題本俳号のみ	×	
67	古人五百題発句集	松露庵烏明編	明治24年11月	―	活				
68	類題金玉集	竹二庵鶴畝撰	明治25年6月	今	活	×		×	
69	俳諧一万集	中村芳松編	明治25年6月	―	活				
70	新撰発句集	葎露庵春泉編	明治25年8月	―	版				
71	俳諧新撰明治五百題	一事庵史栞編	明治25年11月	今	活	×		○	国名、代表者名
72	発句風月集	青柳亭琴糸撰	明治25年11月	―	活				

73	俳諧新撰明治六百題	一事庵史栞編	明治25年12月	今	活	×		○	国名、代表者名
74	古人五百題発句集	松露庵烏明編	明治25年12月	―	活				
75	俳諧新撰明治七百題	一事庵史栞編	明治26年1月	今	活	×		○	国名、代表者名
76	新題林発句錦嚢　一・二	自在仙編	明治26年1月	今	活	○	国名、本名	×	
77	俳句五百題	飯尾一風編	明治26年3月	今	活	×		×	
78	明治感吟集	東雲舎花晴編	明治26年5月	今	版	×		×	
79	明治千五百題集	降雨庵木甫編	明治26年6月	今	活	○	郡名、本名	×	
80	発句三千題	錦花庵玄生著	明治26年7月	今	活	×		×	
81	明治類題発句集	桂花庵桂花編	明治26年10月	今	版	×		×	
82	発句秋草集	青柳亭琴糸撰	明治26年10月	―	活				
83	俳諧発句万葉集	紫明庵蓮水編	明治27年2月	古	活	×		×	
84	俳諧発句五千題	一事庵史栞編	明治27年3月	今	活	×		×	
85	発句五百題	松露庵烏明編	明治27年3月	―	活				
86	名家発句集	一事庵史栞編	明治27年4月	今	活	×		×	
87	発句名吟集	一事庵史栞編	明治27年4月	今	活	×		×	
88	新撰俳諧二千題	俳禅居寛月編	明治28年1月	今	活	×		○	国名、代表者名
89	類題発句陽道集　続編	池島桐樹編	明治29年12月	今	活	×		○	住所、代表者名
90	発句五千題	錦花庵玄生編	明治30年1月	今	活	×		×	
91	俳諧五千題	日月園射節編	明治30年5月	古今	活	×		×	

92	俳諧名家一万題	桃李庵南濤編	明治31年2月	古	活	×		○	県名、代表者名
93	名家発句集	俳禅居寛月編	明治31年6月	今	活	×		×	
94	発句古人五百題	東籬園梅耕編	明治31年6月	ー	活				
95	発句秀逸集	木花庵五風編	明治31年9月	古今	活	×		×	
96	類題発句明治選	野松庵古蕉編	明治31年10月	今	活	○	国毎に俳号	×	
97	類題発句常盤集	青郊園雅笑編	明治35年6月	今	活	×		×	
98	俳諧一千題発句集	佐久間源治編	明治36年2月	今	版	×		×	
99	俳諧手挑燈頭書明治五百題集	春風亭春撰 伊藤新策編	明治36年4月	今	版	×		×	
100	明治発句題林	知守庵為谷編	明治36年12月	今	版	○	国毎に俳号	×	
101	明治千題集	香川李叟著	明治38年2月	今	活	×		×	
102	類題発句明治撰	野松庵古蕉撰 旭雲堂波石編 桂香庵松月編	明治40年11月	今	活	○	国毎に俳号	×	
103	俳句精選	一事庵史栞編	明治41年9月	今	活	×		×	
104	俳諧発句題林集	よろづ屋車蓋編	明治43年3月	ー	活				
105	明治俳句集	双樹庵丶舟編	明治43年5月	今	活	×		×	
106	明治千題集	勝見弥作編	明治45年2月	今	活	×		×	

※「ー」は江戸期復刊本のため、調査から除外

【表 1】から、人名録が付されたものは古今では 3 点、古人では 0 点、今人では 17 点、発行書林が付されたものは、古今では 4 点、古人では 1 点、今人では 19 点確認された。また人名録、発行書林両方が付されたものは、古今では 1 点、古人では 0 点、今人では 5 点のみということになり、人名録、発行書林両方が付されているものは当時としては珍しいものであったことがうかがえる。

また、人名録の書式については、国毎に俳号が並べられる形式を採るものが多く、住居や本名まで詳細に掲載されているものは少ないということが分かった。発行書林については、国名、代表者名が並べられる書式が多いということが分かった。

【表 1】の中で、人名録、発行書林両方が付されているが先行研究において取り上げられていない句集については、No.3 の『新撰明治六百題』、No.22 の『題詠俳諧明治千五百題』の 2 点が挙げられる。この 2 点の人名録の書式について比較すると、『新撰明治六百題』では、国毎に俳号が並べられているのに対し、『題詠俳諧明治千五百題』では、いろは順に俳号、その下に住居、本名が並べられており、『題詠俳諧明治千五百題』の方が、詳細な書式であることが分かった。ここから、『題詠俳諧明治千五百題』は俳諧が当時どのくらい普及していたかについて考察する上で、有益な資料と言える。

また、『題詠俳諧明治千五百題』が刊行される以前に出版された明治期の類題句集の特徴について【表 1】を参考に整理すると、全て木版刷りであり、書名題数に着目すると五百題、八百題、千題等と銘打つものが多いことが分かった。『題詠俳諧明治千五百題』で銘打たれた千五百題という題数は、明治期に刊行された今人の句集の中ではそれまでに用いられてこなかった一番大きいものである。編者は他の類題句集との差別化を図るために、書名題数に着目し、それまで用いられたことがなかった大きい題数を使用したのではないかということが推測される。他の類題句集との差別化を図ることにより、珍しい、新しいと感じる人が本書を手に取る可能性があり、これは本を売るための戦略ともいえ、『題詠俳諧明治千五百題』の編者は、販売戦略を考慮しつつ、編集を行っていた可能性がある。このことから、本書が当時の出版文化を考察する上でも、価値ある資料になる可能性がある。

以上のことから、『題詠俳諧明治千五百題』は当時の俳諧文化の広がりを考察する上で、有益な資料になる可能性が高く、当時の出版文化を考察する上でも、価値ある資料になり得ると言える。このため、本研究では『題詠俳諧明治千五百題』を考察対象として取り上げる。底本には、綿抜研究室の所蔵本を使用する。

なお、本書は森曲豆氏により既に紹介されているものの[5]、学術研究論文でなく書名も誤っている。また、諸本調査も実施されていない。そのため、今回改めて調査により数値的な確認をし、詳細なデータを出す。

1.4. 研究手法

研究の調査項目としては、先行研究のデータと比較できるよう、(1)編者、(2)編集経緯、(3)書誌情報、(4)諸本調査、(5)構成、(6)人名録、(7)発行書林について調査する。(1)編者については、辞典等を元に、生没年、出身、事蹟、交流関係について纏める。(2)編集経緯については、序文や、当時刊行された俳誌の広告を手がかりに、どのような経緯で編集されることになったのか纏める。(3)書誌情報については、体裁、表紙・見返し・刊記の記載事項、丁数等を調査する。(4)諸本調査については、所蔵館の諸本における異同について調査する。(5)構成については、各部立の題数・句数、各題の句数、各俳人の句数、各地域の句数を調査する。(6)人名録については、掲載俳人数、各地域の俳人数を調査

[5] 森曲豆．詠題　明治千五百題　－俳句革新前夜の趨勢－．かびれ．1956，vol．26，p．8-12.

する。(7)発行書林については、掲載書店数、各地域の書店数を調査する。

また、他の類題句集との比較を行い、本書が持つ独自の特徴について調査する。比較対象として、先行研究で明らかにされたデータを取り上げる他に、『題詠俳諧明治千五百題』が刊行された明治 15 年に出版された『俳諧明治七百題』を取り上げたいと考える。これを編集した秦澄江は、『題詠俳諧明治千五百題』の編者と同じ常陸国龍ヶ崎の出身であり、編者とともに俳諧雑誌「俳諧新報」の刊行に携わった人物である。出身地が同じであり、東京に移住し、同じ雑誌の創刊に携わり、同じ年に類題句集を刊行しているという共通点の多い 2 人が刊行した類題句集には、どのような共通点や異なる点が見られるのか調査することで、『題詠俳諧明治千五百題』が有する独自の特徴を明らかにしたいと考える。なお、『俳諧明治七百題』の底本は、国立国会図書館所蔵本を使用する。

2. 『題詠俳諧明治千五百題』に関する調査

本章では、『題詠俳諧明治千五百題』に関する調査結果について纏める。

2.1. 編者

編者の松田聴松に関しては、『夢路之記』[6]、『大日本人名辞書』[7]、『新選俳諧年表』[8]、『竜ヶ崎市史』[9]、『竜ヶ崎郷土史』[10]、『明治大正俳句史年表大事典』[11]、『近代俳句のあけぼの』[12]、『茨城俳句史(1)　＜史料篇＞』[13]、『俳文学大辞典』[14]等に記述がある。それらによると、聴松は幕末から明治中期にかけて活動した俳諧師であり、通称を丈一郎、別号を亭々堂、般若義塾と称した。維新後は常陸から東京に移住し、明治 12 年(1879)に「正風社」を興し、俳諧雑誌「俳諧新報」を創刊主宰した。

聴松の誕生年に関しては、『竜ヶ崎市史』に天保 3 年(1832)と記載されている。また、同資料によると、聴松は土岐氏の重臣で帰農した松田治郎左衛の後[15]であり、父は大庄屋松田丈右衛門光遠、母は佐原の伊能忠敬の六女琴で、伊能忠敬の孫である。嘉永 2 年(1849)相続したが、幕末の経済変動に没落、上京し深川霊岸町に偶居した。なお、竜ヶ崎土岐氏は永禄末期頃、土岐胤倫が竜ヶ崎城に配置されたのに始まるとされる[16]。

聴松の没年に関しては、文献によって記述が異なり、『明治大正俳句史年表大事典』、『新選俳諧年表』、『大日本人名辞書』では、明治 21 年(1888)8 月 22 日と記述されているのに対し、『夢路之記』、『茨城俳句史(1)　＜史料篇＞』、『近代俳句のあけぼの』、『竜ヶ崎市史』では、29 日と記述されている。また、享年についても『夢路之記』、『明治大正俳句史年表大事典』では 63 歳であるのに対し、『新選俳諧年表』、『茨城俳句史(1)　＜史料篇＞』、『近代俳句のあけぼの』、『大日本人名辞書』では 64 歳とな

---

6 島本仲道．夢路之記．無可亭，1891，22 丁．
7 東京経済雑誌社．大日本人名辞書．東京経済雑誌社，1921，p．2074．
8 平林鳳二，大西一外．新選俳諧年表．書画珍本雑誌社，1923，p．296．
9 若歌森善郎．竜ケ崎市史．竜ケ崎郷土史研究会，1959，p．153-156．
10 鈴木秀雄．竜ケ崎郷土史．竜ケ崎市，1970，p．139-140．
11 大塚毅．明治大正俳句史年表大事典．世界文庫，1971，p．109．
12 市川一男．近代俳句のあけぼの　第二部　幕末明治の俳人とその作品．三元社，1975，p．220．
13 茨城俳句の会．茨城俳句史(1)　＜史料篇＞．茨城俳句の会，1985，p．3．
14 尾形仂[ほか]．俳文学大辞典．角川書店，1995，p．564．
15 『竜ヶ崎郷土史』によると、「松田丈一郎は竜ヶ崎土岐氏の重臣で、帰農した松田治郎左衛門の後裔」となっており、『竜ヶ崎市史』では脱字があったと考えられる。
16 龍ヶ崎市史編さん委員会．龍ケ崎市史　中世史料編．龍ケ崎市教育委員会，1993，p．17．

っている。これについては、後者が数え年で記載していると考えられる。

2.1.1.編者とその弟子、北洲

前掲『大日本人名辞書』によると、聴松は「常陸龍が崎の人秦澄江と竹馬の友たり島本北洲(仲道)も此門に出づ」とある。澄江については「3.1.編者・校正者」で述べるとし、北洲に関しては、『明治大正俳句史年表大事典』[17]、『日本近代人名辞書』[18]、『明治大正人物事典　Ⅰ　政治・軍事・産業篇』[19]に記載がある。それらによると、北洲は天保4年(1833)4月18日に土佐藩士の次男として生まれた。土佐勤王党の一員となり、文久3年(1863)勤王党の獄で終身禁固に処せられるが、慶応3年(1867)に許され、松山藩征討に出陣する。明治3年(1870)に兵部権少、五条県大参事を経て、司法省に入る。明治5年(1872)には、司法大丞、大検事、警保頭を兼任し、司法制度の改正、新律綱領の制定に尽力する。しかし、明治6年(1873)に征韓論が破れると下野。その後、立志社の創立に参画し、その法律研究所所長を務めた。また、代言所北洲社を設立し、今日における弁護士制度を創始した。明治14年(1881)には、自由党の結成とともにその顧問に就任し、遊説活動に従事するが、明治20年(1887)の保安条例により、3 年間帝都外に退去を命じられる。明治 22 年(1889)、大赦により帰京。明治 26 年(1893)1月2日に享年61歳で没する。

聴松が北洲と交流を持つようになった具体的な時期については明らかにされていない。しかし、「俳三昧」[20]によると、北洲が俳道にいそしむようになったのは、「西南役に関する嫌疑によりての投獄後に於ける頃より」とある。西南役に関する嫌疑とは、明治10年(1877)に北洲が朝廷の使節として薩南に下り、西郷隆盛を説得しようとしたが、省みられず嫌疑をかけられ、投獄させられた出来事を指す[21]。聴松が北洲の師匠となるのは、この出来事以後を指すものと考えられる。どのような経緯で出会い、弟子として迎え入れるに至ったかについては、今回の調査でも明らかにできなかった。

また、北洲は明治20年(1887)の保安条例により大磯、山梨に退去し、明治22年(1889)に帰京するまでの日々を前掲『夢路之記』に纏めている。それに聴松とのやりとりが記述されているため、以下に関連箇所を抜き出す。

まず、4 丁表から裏にかけて、以下の記述がなされている。帝都を隔てる三里以外の地に退去することになった北洲が、東京を発つ場面でのことである。

深川の聴松老人遠くおくりて吾をなくさめ、密に矢立とり出して餞の一句をおくらる。贈答の間、人しれぬ風興を覚ふ。～(途中略)～

　さし引の潮を寄居鰕の世帯かな

　この冴のあるを手がらや月の梅　　聴松老人

また、8 丁表から裏にかけ、大磯へ退去中のところへ友人から手紙が送られ、その中で聴松のことについて触れられている箇所がある。

---

17 大塚毅．明治大正俳句史年表大事典．世界文庫，1971，p．141-142．
18 臼井勝美[ほか]．日本近現代人名辞典．吉川弘文館，2001，p．519．
19 日外アソシエーツ株式会社．明治大正人物事典　Ⅰ　政治・軍事・産業篇．紀伊國屋書店，2011，p．317．
20 有山麓園．島本北洲翁の俳道観．俳三昧．1924，vol．2，no．10，p．2．
21 有山麓園．島本北洲翁　其の略歴と俳句．俳三昧．1924，vol．2，no．4，p．3．

老友高逸朗の郵書いたる。余か精心のまめやかなるを喜ひ、こたひの災を幸として俳諧の眞興を得へきを称ふ。墨痕點々、交情の芳しき紙面に溢ふる。且いふ、深川の亭々堂老人、余か山梨の境深く入りて、往かひ便りの難き、あるひは現世の談笑ふたゝひすへからさるかと、心細く思ふものから、師は病ひをつとめて、杖を小陶綾の磯邊に曳きわれを送ると共に、行春を餞せんと思ひたてり。その志さしをさつし笠草鞋の用意とゝのふも、暫く行をとゝめて、その厚きにそへよかしとそ申こしける。

13 丁表から 14 丁表にかけては、山梨に滞在中のところへ、聴松が訪ねてきた場面が記述されている。

頃日うち続き客人の幸あるも嬉しく、今日も朝またきより友雀の軒端に賑ふは、誰人か来ませむやと、心のそりぬるに、亭々堂老人こそ、其つけにたかはさりし。笠ぬき脊負荷をろして、別れしのちの寂栞かたりつゝけ、梅か香の冴ゆる月かけに、井のそこの温みを覚へし時候も、はや遠く過さりて、今しまたゆく春を逐ふて、師と二度の別れをなす事のほいなさよ。兎に角にあちきなき世は、あわしき菜根かむてこそ、わたりもせめ。折節山梨の里より、むかひの人おこせぬるときけは、いさゝか気もせかるれと、保安條例のきひしきにあらされは、師とあわしき風興なして、別れのひとふしとなさん。そのゝちの秀逸きかせ玉へと、うなかしけれは、

玉川になかるゝ朧月夜かな　　聴松
不忍や水よりさそふ花明り　　同
餘る花散るや若葉と見し木より　同

こよひは浪もたいらかに、月の朧気磯山にひき、木陰の卯の花ほのくめきて、まはらにきゆる雪かと見ゆるもをかしく、老師窓のかたうち見やり、おもむろに余か吟懐をそゝのかし、此興をこそつゝりて、一まきとなさめともようさるゝにそ。

狸も眉ぬらせ卯の花うす月夜
なつまた浅き山の夕冷　　聴松

二日をかさねて、歌仙一行とはなしぬ。此折節鴫起庵に西行忌のいとなみありとて師と共に招かれぬ。こはとしくいとなみぬる会式なれと、あまりもふけの無興に似たれはとて、余のすゝめを用ひられ、文台の略式を用ゆる事とはなりぬ。貴き聖りの霊に供ふへき句作さへ思ひつかす、花の一枝さゝけん時も、はや過ぬれは、新しき思ひよりこそよからめと、短冊にものして、

夏もはや単の花のさく葎

亭々堂老師は、わか蝦居虫のやとりにかゝまり玉へること、もはや五六日を経ぬれは、横須賀の社中に風交の約もそむき難しとて、杖を南に曳かれぬ。我と今し別んは、麦飯くうたる腹の甲斐なき心地すれは、此秋こそわか落つきをきゝて、雲霧をくゝり、山梨のかり家にゆるりと、足のはしともにありの実くうて、有無虚実のなか物語りこそ、味はよからめと、戯れて出てられけるか、後に思へはこれそ一期の別れにてありし。

最後に 22 丁表から裏にかけて、山梨での滞在中に聴松の訃報を知ったときのことについて言及されている。

亭々堂老人の訃音、俄にいたりぬ。豫て師と小陶陵の別れに誓ひしこともあれは、けふしも音信やあらんかと、待ちに待たるかひもあらて、既に今生の別れとなりしことの悲しさよ。われ此災にあふことなかりせは、病の枕辺にもたちまとふて、枯尾花の訣れもなしつへきものを、さるにてもうらみおほき世やと、潔き水を器にさゝけ一茎の葡萄を盆にもりて、都の霊魂を呼はひぬ。

驚くやひらく手紙も秋の聲

ふとうにもあまる涙か月の露

同師を吊ふとて、

木隠れや笠のかけひく秋の水

露にさきたつ夕されの冷　　逸郎

月の出の匂ひ移りに雲ちりて　　愛海

亭々堂聴松は俗称を松田丈一郎といふ青森縣の士族なり。維新の後深川大工街に住ゐし、正門俳諧の実に遊ひ、篤実句作とかなへり。腸胃を病んて八月廿九日卒す、寛瑞知仁居士と謚す、行年六十三歳。

辞世　　故人聴松

きりの葉やこゝろのさきへいつくより

22 丁裏には「青森縣の士族なり」という記述があるが、該当する人物を確認することはできなかった。以上の記述から、不遇な弟子の身を気にかける聴松の心情が察せられる。また、北洲もこのように師とのやりとりを詳らかに取り上げ、書きつけていることから、師匠を慕い敬っていたことが察せられる。

2.2. 成立経緯

『題詠俳諧明治千五百題』が編集された経緯については、「序」において触れられている。序は、阿波の俳人である宮崎拾蕊によって執筆されたものである。拾蕊については、付録の人名録に「拾蕊阿波国那賀郡椿泊浦玩古庵宮崎氏」と記載がある。前掲『新選俳諧年表』においては、この「玩古庵」の名で掲載されている[22]。それによると、没年月日は、明治 25 年(1892)9 月 13 日、享年 83 歳、通称を脩中といい、和漢の学に精通していたとされる。「序」には、

亭々堂主人有悗于是而嚮者結正風社於東京府下遍湲求海内俳士之句及文章毎月刊之御頒布於四方其意美在指正耳今改纂輯俳句若干名曰今人俳諧題咏御捕前之餘者也

との記載がある。上記記載から、亭々堂の主人、すなわち編者の聴松は、東京に正風社を興し、国内の俳人の句や文章を広く求め、毎月刊行し、諸地方に配布していた。この「毎月刊行されたもの」が聴松により創刊主宰された「俳諧新報」と思われる。そして、美しく正しくある句のみを今改めて編集し、『今人俳諧題咏』と名付けた。『題詠俳諧明治千五百題』は『今人俳諧題咏』の残り、つまり、『今人俳諧題咏』に掲載されず残ったもの、との解釈ができる。

この解釈が正しければ、『題詠俳諧明治千五百題』と『今人俳諧題咏』の募集経緯は同じであり、『今人俳諧題咏』の募集経緯を明らかにすることで、『題詠俳諧明治千五百題』の募集経緯も明らかにできる。よって、『今人俳諧題咏』について調査した。まず、『今人俳諧題咏』について国立国会図書館サ

22 平林鳳二，大西一外．新選俳諧年表．書画珍本雑誌社，1923，p．301．

ーチ、CiNii Books で検索してみたところ、該当資料は確認できなかった。次に聴松が編集した俳誌「俳諧新報」に関連記述がないか調査した。底本として、第 1 号から第 30 号までは日本近代文学館所蔵本を、第 31 号から第 46 号までは天理大学附属天理図書館所蔵本を使用した。

その調査結果について述べる前に、「俳諧新報」について触れる。「俳諧新報」とは、活版印刷により刊行された俳諧雑誌である。明治 12 年(1879)1 月 27 日に第 1 号が刊行されたが、編者の聴松が東北に遊学することを理由とし、第 46 号(明治 15 年 11 月)で休刊となる。休刊という扱いであるが、その後刊行が再開されなかったことから、この号が事実上の最終号となる。第 12 号(明治 12 年 7 月 25 日)までは月 2 回刊行されていたが、第 13 号(明治 12 年 8 月 15 日)以降、月 1 回刊行に切り替わる。創刊時は東京濱町二丁目十一番地に正風社を興し、そこから刊行していたが、火災に見舞われたため、第 18 号(明治 13 年 2 月)から東京深川霊巌町七十三番地に拠点を移し、刊行するようになった。編輯長は聴松、印刷長は秦長四郎(俳号は澄江)が担当した。俳諧を通して社会教導教化することを目的に発足し、誌面上には当時の有名宗匠が教員として名を列ねた。それらの有名宗匠をはじめ、全国各地の俳人から投稿を求め、和漢俳諧、両吟、類題の部、渾題の部、詠史の部等様々な俳文芸を掲載した。

この「俳諧新報」に『今人俳諧題咏』に関わる記述がないか調査したところ、第 18 号、第 19 号(明治 13 年 3 月)、第 20 号(明治 13 年 4 月)、第 21 号(明治 13 年 5 月)に以下の記載が確認された。なお、どの号も同じ文言である。

今人俳諧題詠集　四冊　近刻
　入式　一ニ句入捨　一行　金五錢ノ割
　　十句入　　同三十錢
　　十句以上加入十句ニ付同廿五錢
コハ世ニ有フレタル類題集ニ異リ神釋名所懐舊詠史
賀章追悼等ノ端書アルモノヲ集メ始学ノ人其場其席ニ
臨ミテ前文ヲ作ルノ類例ニ供セントス一行廿五字ト
見做シ大凡二三行ヲ限トス集フリハ初ニ前文ノ句ヲ
アケ後ニ類題ヲ加連ス
右ハ今般火災旁紛亂ニ付本年四月限集切延期仕候事
　　編集局　正風社
　　発兌人　江島喜兵衛
委シクハ別紙配紙二テ御承知可被下候

上記記載から、この時点では『今人俳諧題咏』は未刊行であったこと、投句料を徴収していたこと、句を多く投稿した人に対しては、一句当たりの料金を安くしていたことが分かる。類題集の性格としては、巷で出回っている類題集とは異なり、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼等の端書があるものが集められ、前文を作る際の類例として、俳諧初心者に活用してもらうことを目的としていたことが分かる。その他の特徴としては、1 行を 25 字までとし、前文を含め 2、3 行までとしている。編集時には前文の句を先に掲載し、その後に類題を掲載するとしている。また、正風社が火災に見舞われたため、明治 13 年(1880)4 月まで締切を延期することが述べられている。なお、明治 13 年 5 月刊行の第 21 号にも同じ広告が掲載されており、4 月の締切を過ぎても投稿を受け付けていたことが分か

る。詳細は別紙に記載されているとあるが、別紙の所在を確認できず、何が記載されていたかは不明である。

『題詠俳諧明治千五百題』にも、上記のような特徴が見受けられるか確認したところ、例えば「歳旦・春の部[23]」36 丁裏に「某氏の新婚を賀して」との賀章関係の前文が記載された後に句が掲載されていた。他にも、「歳旦・春の部」51 丁表に「亡父三十三回忌」、「歳旦・春の部」53 丁表に「嵐山にて」等の前文が確認された。このように、『題詠俳諧明治千五百題』は神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼関係の前文が記載された後に、句が掲載される形式を採っており、『今人俳諧題咏』の募集広告から読み取れる特徴と一致している。ここから、序に対して解釈した「『題詠俳諧明治千五百題』は、『今人俳諧題咏』に掲載されず残ったもの」は正しいと思われる。よって、『題詠俳諧明治千五百題』の募集経緯としても、『今人俳諧題咏』と同様に、世に出回っている類題句集とは性質を異にし、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼等の端書があるものを集め、前文作成時の類例として、俳諧初心者に活用してもらうことを意図して作成されたということができる。当時刊行された類題句集の一般的傾向として、初心者への作例伝授を意図するものが多く、編集予定を前もって「チラシ」や雑誌の広告欄等で告知し、投句料を徴収していたことが前掲した越後氏の論文(先行研究①、②)で明らかにされているが、『題詠俳諧明治千五百題』も同様の傾向にあることが分かった。ただ、『今人俳諧題咏』の募集告知にある「コハ世ニ有フレタル類題集ニ異リ」という文言から、他の類題句集と差別化を図ろうとする意識がうかがえ、編者は他の類題句集とは異なる新しいものを作ろうとして本書を作成した可能性が考えられる。

また、『今人俳諧題咏』は結局のところ刊行されたのか、引き続き「俳諧新報」を追って見ていったところ、第 22 号(明治 13 年 6 月)、第 23 号(明治 13 年 6 月)に同じ文言で以下の記載が見受けられた。

小社編輯題詠集自然遠隔地方往復ノ向モ
有之集切大ニ延引ニ及候処七月中旬ヲ限リ
浄書取掛リ無程結局仕候間猶遺漏ノ
君子ハ御出稿相成度右延日ノ御断迄敬陳候也
正風社各員再拝

上記の記載から、「小社編輯題詠集」は『今人俳諧題詠集』を指すと解釈でき、遠隔地方から送られてくる句を考慮し、締め切りを大いに延期していること、七月中旬を限りに清書に取り掛かり、程なく完成させる予定であることが分かる。当初の予定から大幅に遅れ、編集作業が難航していたことがうかがえる。このように、明治 13 年(1880)6 月の時点では未だ刊行されていないため、第 24 号(明治 13 年 8 月)以降に『今人俳諧題咏』の出版告知が掲載されているか調査したところ、確認できなかった。加えて、同時代の類題句集(国立国会図書館所蔵本 106 点)に広告が掲載されていないか調査したところ、『今人俳諧題咏』の出版広告は確認できなかった。その代わり、「俳諧新報」第 41 号(明治 15 年 6 月)に「題詠発句　明治千五百題所載人名　(いろは順)」として、国毎に俳号が掲載されており、

[23] 本文の冒頭には「歳旦之部」と記載されているが、そこから「題詠俳諧明治千五百題春之部終」と記載されている箇所に至るまで「春の部」という文言は見られない。また、その間の丁には小口に「春」と記載されている。このように本文の冒頭と末尾、小口の文言が一致していないため、本論文では新年や春の季題が収録されている箇所を「歳旦・春の部」と記載することにする。

その後に以下の文章が記載されている。

是ハ本集巻尾に人名録を附し國郡町村通稱共盡く記載す
然れ共一二句入捨の君又ハ初心少年輩の如き性氏を記せ
さるも多にあれハそハ後集を待て悉くさんとす
右題詠句集大に遅延相成候處今般刻成に付前約の諸君子
へハ無落遞送可仕候へ共若相漏候分ハ速に御報知被下度
且御同好の諸君へも御風聴の程伏て希望候也
定価　一部金五十錢

「題詠発句」となっているが、巻末に人名録が付されており、人名録には住居、通称が記載されていることから、『題詠俳諧明治千五百題』と同じ特徴を有していることが分かる。従って、この「題詠発句明治千五百題」は『題詠俳諧明治千五百題』と同一のものを指すと思われる。また上記記載から、一二句投稿した者、または初心少年輩のように性氏を記載していない者も多くいるため、それは後集に掲載しようとしていることが述べられており、一部五十銭で売られていたことも分かる。また上記には、「右題詠句集大に遅延相成候處今般刻成に付」という文言が見受けられるが、これ以前の号に『題詠俳諧明治千五百題』刊行の企画や募集告知等は確認できなかった。引き続き「俳諧新報」を見ていったところ、第 43 号(明治 15 年 8 月)、第 45 号(明治 15 年 11 月)に同じ文言で以下の通り出版告知が掲載されていた。

明治千五百題　人名附録　前篇　全二冊
定價金五十錢
右製本出来居候間陸続御購入ヲ乞且又本集上梓ニ付會計
都合モ有之候間俳諧新報前金御寄送無之諸君ハ部数ニ應
ジ御送致有之度此段御憐察ヲ乞

結局「俳諧新報」の誌面上には、『題詠俳諧明治千五百題』の募集に関する記述を確認することはできず、募集告知がないままに出版の告知がなされている。

以上の調査を纏めると、『今人俳諧題咏』の出版告知は確認されず、『題詠俳諧明治千五百題』は出版告知が確認されたものの、募集告知は確認できず、また特徴が『今人俳諧題咏』の募集告知で述べられていた特徴と一致することから、『題詠俳諧明治千五百題』は、『今人俳諧題咏』から書名を変更して刊行されたことが可能性として考えられる。

また、第 41 号で述べられていた「後集」とは何なのか、その点についても以下に記述する。まず「俳諧新報」に関連記述がないか調査したところ、第 43 号に以下の記載が確認された。

題詠　明治千五百題後集　全二冊
入式　一二句入捨　金四錢ヅヽ
十句加入　　同　三十錢
但前文長キハ一句ニ準ズ餘倣之

右ハ前篇ニ次テ神釋壽賀懐舊名所等ノ句ヲ類題シ前文ノ
句意ヲ助ルノ要ヲ示シ初学ノ人ノ階梯ニ供スル良編ナリ
委シクハ題紙ニテ御高覧可被下候

上記に「神釋壽賀懐舊名所等ノ句ヲ類題シ前文ノ句意ヲ助ルノ要ヲ示シ初学ノ人ノ階梯ニ供スル良編ナリ」とあることから、『明治千五百題後集』は『今人俳諧題咏』と同じ目的で編集しようとしていたことが分かる。

また、引き続き『明治千五百題後集』自体は刊行されたのか、「俳諧新報」を追ってみていくと、『明治千五百題後集』の募集は、第 45 号でも行われたことが以下の記載から分かる。「二月中延期」が朱色で記載されていることから、締切を一月としたが、二月に訂正したことがうかがえる。

題詠　明治千五百題後集　　全二冊
　　入式　一二句入捨　金四錢ヅヽ
　　十句加入　　同　三十錢
　　但前文長キハ一句ニ準ズ餘倣之
右ハ前篇ニ次テ神釋壽賀懐舊名所等ノ句ヲ類題シ前文ノ
句意ヲ助ルノ要ヲ示シ初学ノ人ノ階梯ニ供スル良編ナリ
但都合ニヨリ十六年一月迄〆切延期候事　二月中延期(朱色)

また、最終号である第 46 号(明治 15 年 11 月)には以下の記載がある。この時点でもまだ句の募集をしていたことが分かる。

小社編輯長松田聴松儀舊藩仙臺ヘ罷下候ニ付陸羽其他遊
杖致シ候間俳諧新報四十七号以下数月間休刊仕候因テ御
投吟ノ諸彦暫時御休覧ヲ乞尤歸杖ノ上ハ前同様発兌致候
付不相替御投稿可被下候且又明治集ノ儀ハ一月中集切整
頓致置候心組ニ付御投吟希上候各地文信及ビ通巻俳諧ノ
儀ハ旅行先ヨリ御文音可申ニ付本社ヘ宛御郵送有之度此
段辱知諸彦ニ申告仕候頓首
不在中代理
深川区猿江町十番地　　無漏　足立行
浅草区西三筋町山口診察所　　末精　山口弘

結局、「俳諧新報」の誌面上で出版の告知を確認することはできなかった。『今人俳諧題咏』と同様に、同時代の類題句集(国立国会図書館所蔵本 106 点)に広告が掲載されていないか調査したところ、『俳諧名家一万題』(明治 31 年、桃李庵南濤編、三松堂出版)に以下の記載が確認された。

吉田聴松先生編
●俳諧明治千五百題　全四冊　正價三十五錢

郵税六錢

上記の記載では「松田聴松」ではなく、「吉田聴松」となっている。養子に入る等して「吉田」と記載されているのか、単なる誤植なのか、その点については不明である。また、「全四冊」とあるが、部立毎に分けて出版されたものなのか、「俳諧新報」の広告にあったように前篇 2 冊・後集 2 冊合わせて出版されたものなのか、この広告だけでは判断できない。綿抜研究室が所蔵する『題詠俳諧明治千五百題』上巻は三松堂が発兌書肆となって刊行したものだが、この上巻 1 冊に「歳旦・春の部」、「夏の部」が纏めて収録されている。ここから判断すると、部立毎に分けて出版されたものではないと思われる。

また、前掲『明治大正俳句史年表大事典』p.543 には、明治 15 年の出版物が纏められているが、そこに以下の記載が見られる。

八月　明治千五百題全二巻　　松田聴松
八月　<u>俳諧明治五百題</u>全二巻　松田聴松

上記の『俳諧明治五百題』が後集に当たるとも考えられるが、『俳諧明治五百題』を国立国会図書館サーチ、CiNii Books で検索しても該当資料は確認できなかった。結局のところ、『明治千五百題後集』が刊行されたのか否かについては、特定できなかった。

以上の調査結果を纏めると、『題詠俳諧明治千五百題』は、もともと『今人俳諧題咏』という書名での刊行が企画されていたが、書名を『題詠俳諧明治千五百題』に変更し、出版されるに至った可能性が高いこと、『題詠俳諧明治千五百題』に掲載しきれなかった分を『明治千五百題後集』として刊行する予定であったが、結局その刊行には至らなかった可能性が高いことが明らかになった。また、聴松は他の類題句集との差別化を図るため、書名にこれまで使われたことのなかった大きな題数を使用した可能性があることについては序章でも述べた。その「他類題句集との差別化を図る」という意識が、句集の編集方針においてもうかがえることが明らかになった。

2.3. 書名

『題詠俳諧明治千五百題』は『今人俳諧題咏』から書名を変更して刊行されたと仮定した上で、本節ではなぜ『今人俳諧題咏』から『題詠俳諧明治千五百題』に書名は変更されたのか、なぜ「今人」という文言を消して、「明治」、「千五百題」という文言が追加されたのか、その点について考察する。

まず、なぜ「明治」という語が追加されたのかについて考察する。『題詠俳諧明治千五百題』が刊行される以前に出版された明治期の類題句集について、【表 1】の No.1 から No.21 を参照すると、「明治」という語を含むものは 10 点であり、全体のほぼ半数となっているのに対し、「今人」という語を含むものは 1 点のみであった。「年号を冠した類題句集を刊行することは俳壇の慣例になっていた」[24]と言われるが、聴松も「明治時代の俳人が詠んだ句集」という意味を込め、「今人」から「明治」という語に置き換えたことが推測される。

次に、なぜ「千五百題」という語が追加されたのか考察する。明治期に刊行された類題句集の書名には、「類題」という語を含むもの、「五百題」のように題数を含むもの、「題」という語を含まないも

[24] 市川一男．近代俳句のあけぼの　第一部　幕末明治俳壇史．三元社，1975，p. 69.

の等があること、その中でも題数を書名に含むものが最も多いこと、また、題数を書名に含むものの中でも「五百題」と銘打たれるものが最も多いことが、前掲した河合氏の論文(先行研究③)に掲載されているデータから分かる。

この特徴は、明治期特有のものなのか、江戸期にも見受けられるものなのか。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースで、「全項目」に俳諧、「書名」に題を入力し、「五百題」のように「(数字)題」が書名に含まれているものを検索した。検索結果には、「三題」や「五題」等題数の小さいものも含まれていたが、前掲した越後氏の論文(先行研究①)においては、「五百題」以上のものが類題句集として表に纏められていたため、本研究でもそれに倣い、「五百題」以上のものを検索結果から抽出し、以下の表に纏めた。

【表 2】書名に「五百題」以上の題数が含まれるもの(俳諧)

No	書名	編著者	刊行年
1	俳諧／故人五百題	松露庵烏明　編	天明 7(1787)
2	俳諧千題集	今日庵元夢	寛政元(1789)
3	今人五百題	つくも(長翠)　編	寛政 2(1790)
4	俳諧／発句五百題	春秋庵白雄　撰 白雄房昨烏　編	文化 4 序・跋(1807)
5	俳諧新五百題	田喜庵護物　編	文政 2 序(1819)
6	俳諧千題集	田喜庵護物　編	文政 11(1828)
7	俳諧故人続五百題	一具庵一具　撰	文政 12 自序(1829)
8	俳諧新々五百題	田喜庵護物　編	文政 13 自序(1830)
9	掌中新五百題	田喜庵護物	天保 4(1833)
10	今人千題発句集	梅室　編	天保 9(1838)
11	古今千五百題	會見	天保 10(1839)
12	今人五百題	東溟　編 為山　校	天保 12(1841)
13	発句／万題集	冬至庵庚年　編	天保 12(1841)
14	俳諧故人六百題	？	天保 14(1843)
15	続今人五百題発句集	渉壁為山　編	弘化 2(1845)
16	近世俳諧／十家五百題	過日庵祖郷　編	弘化 4(1847)
17	故人名家六百題	碩布　撰 無窮庵大魯　編	弘化 4(1847)
18	嘉永五百題発句集	愛川居菊朗	嘉永 2(1849)
19	古今万題鑑	永々斎以兄　等	嘉永 3 自序(1850)
20	近世六百題	以兄　編	嘉永 3(1850)
21	伊奈五百題	椿齢　編	嘉永 4(1851)
22	浪華五百題集	花屋庵鼎左　編	嘉永 4(1851)

23	俳諧五百題	祖郷　撰 卜早　校	嘉永 6(1853)
24	浪華五百題集／第二編	花屋庵鼎左　編	安政 2(1855)
25	古人五百題発句集	松歳	安政 3(1856)
26	安政発句六百題	氷壺　編	安政 4(1857)
27	安政五百題	墨芳　編	安政 5 序(1858)
28	名家千二百題集	椿海潮堂	万延元跋(1860)
29	元治五百題発句集	希水	文久元(1861)
30	文久新六百題	菊守園見外　編	文久 2 序(1862)
31	発句千題集	朝陽堂九起　編	文久 2 序(1862)
32	文久六百題	雙雀庵氷壺　編	文久 2(1862)
33	文久五百題	半青居新甫 閑樹園菊雄　編	文久 3(1863)
34	文久千三百題	三戒堂芳艸　編	文久 3(1863)
35	文久七百題発句集	鶯宿　編 挙一　校	?
36	俳諧慶応六百題	小蓑庵碓嶺　撰	?
37	秋田五百題	松見庵亀文　編	?
38	近世五百題発句集	笠庵鳥吟　編	?
39	掌中発句五百題	春秋庵白雄　著	?
40	千題発句集	梅室　著 暁鐘成　編	?
41	俳諧千題集	雪中庵雀志 夜雪庵金羅　撰	?
42	俳諧発句七百題	一事庵史栞　編	?
43	俳諧発句千題集	一事庵史栞　編	?
44	発句八百題	小蓑庵碓嶺　遺編 碓嶺居風斎　校合	?

上記表の中では、「五百題」が 22 点、「千題」、「六百題」が 7 点、「万題」、「七百題」が 2 点、「千五百題」、「千三百題」、「千二百題」、「八百題」が 1 点の順に点数が多くなっていた。ここから、江戸期においても「五百題」と銘打たれる類題句集が最も多く刊行されていたことが分かった。

それではなぜ「五百題」と銘打たれる類題句集は、江戸期において多く刊行されたのか。これについて明らかにするために、部立が関係しているのではないかという仮説を立て(春之部、夏之部、秋之部、冬之部という 4 つの部立と、恋之部や旅之部、詠史之部等から 1 つ、合計 5 つの部を立て、1 つの部立で百題ずつ詠めば合計が五百題になる)、上記表の中で国立国会図書館が所蔵しており、尚且つ巻頭に題の目次が掲載されているものを対象に、部立や各部立の題数について調査した。その結果が以下になる。

①俳諧／故人五百題(松露庵烏明　編、天明 7(1787))
※国立国会図書館では編者名が同じだが、刊行年が不明、書名が『古人五百題発句集』
春之部(歳旦、植物之部、生類之部、時候之部)：152 題
夏之部(生るい乃部、時候之部、植ものヽ部)：151 題
秋之部(時候之部、植ものヽ部、生類之部)：173 題
冬之部(降ものヽ部、時■之部、植物之部、生類之部、時節之部)：143 題
総計 619 題
②俳諧故人続五百題(一具庵一具　撰、文政 12 自序(1829))
春之部(歳旦、植物之部、生類の部、時候之部)：151 題
夏之部(生類の部、時候之部、植ものヽ部)：152 題
秋之部(時候の部、植物の部、生類の部)：173 題
冬之部(降物之部、時候の部、植物の部、生類之部、時節の部)：141 題
総計 617 題
③俳諧新々五百題(田喜庵護物　編、文政 13 自序(1830))
上巻(天象之一、地理之二、居所之三、器財之四、服食之五)：324 題
下巻(神祇之六、釈教無常之七、戀之八、人倫九之上、人倫九之下、禽獣魚鼈之十、
田圃草木之十一、雑之十二)：358 題
総計 682 題
④俳諧五百題(祖郷　撰、嘉永 6(1853))
※国立国会図書館では、書名、編者名が同一だが、刊行年が明治 20 年
春(歳旦之部、乾坤之部、植物之部、生類之部)：218 題
夏(乾坤之部、植物之部、生類之部)：175 題
秋(乾坤之部、植物之部、生類之部)：191 題
冬(乾坤之部、神釈之部、降物之部、植物之部、生類之部)：170 題
総計 754 題
⑤安政五百題(墨芳　編、安政 5 序(1858))
春之部(歳旦、植物、生類、時候)：156 題
夏之部(生類、時候、植物)：144 題
秋之部：192 題
冬之部：146 題
総計 638 題
⑥文久六百題(雙雀庵氷壺　編、文久 2(1862))
春之部(歳旦、乾坤、植物、生類、衣食、神釈、公事故事)：298 題
夏之部(乾坤、植物、生類、衣食、神釈、公事故事)：226 題
秋之部(乾坤、植物、生類、衣食、神釈、公事故事)：231 題
冬之部(乾坤、植物、生類、衣食、神釈、歳暮)：195 題
総計 950 題
⑦俳諧発句七百題(一事庵史栞　編)

※国立国会図書館では、書名、編者名が同一だが、刊行年が明治 24 年

歳旦幷春之部：132 題

夏之部：146 題

秋之部：147 題

冬之部：120 題

総計 545 題

⑧発句八百題(小蓑庵碓嶺　遺編)

※国立国会図書館では、書名、編者名が同一だが、刊行年が明治 13 年

春之部：235 題

夏之部：228 題

秋之部：240 題

冬之部：225 題

総計 928 題

⑨発句／万題集(冬至庵庚年　編、天保 12(1841))

春(春之上、春之中、春之下)：330 題

夏(夏之上、夏之中、夏之下)：312 題

秋(秋之上、秋之中、秋之下)：348 題

冬(冬之上、冬之中、冬之下)：232 題

総計 1222 題

調査の結果、書名の題数に関わらず、部立としては春、夏、秋、冬と 4 つの部で構成されているものが多く、部立の仕方が書名題数に影響を与えている訳ではないことが分かった。結局、なぜ「五百題」が多くなっているのか、その理由について明らかにすることはできなかった。

また、漢詩や和歌、狂歌等他の分野においても、書名に「五百題」が含まれるものが多いという特徴は見受けられるのか、その点についても調査を行った。まず、漢詩について日本古典籍総合目録データベースで、「全項目」に漢詩、「書名」に題と入力し、「五百題」のように「(数字)題」が書名に含まれているものを検索した。その結果、漢詩においては「十題」や「七題」、「九題」のように題数が小さいものは見受けられたものの、「五百題」以上のものは確認されなかった。

次に、和歌について日本古典籍総合目録データベースで、「全項目」に和歌、「書名」に題と入力し、「(数字)題」が書名に含まれているものを検索した。その結果、「十題」や「百題」と銘打っているものは多く確認されたものの、漢詩と同様、「五百題」以上のものは見受けられなかった。

次に、狂歌について、日本古典籍総合目録データベースで、「全項目」に狂歌、「書名」に題と入力し、「(数字)題」が書名に含まれているものを検索し、俳諧と同様、検索結果から「五百題」以上のものを抽出した。その結果、以下表のように「五百題」と銘打たれるものが 5 点確認された。なお、「五百題」より題数が大きいものは見受けられなかった。また、俳諧では「五百題」と銘打たれたものが 22 点であったのに対し、狂歌では 5 点となっており、点数には開きが見られた。

狂歌は俳諧歌とも呼ばれ、初期には連歌俳諧師等によって詠まれていた[25]。このように俳諧と密接な

[25] 有吉保．和歌文学辞典．桜木風社，1982，p．142．

関係にあることが、狂歌においても「五百題」という文言が書名に用いられた理由として考えられる。

【表 3】書名に「五百題」以上の題数が含まれるもの(狂歌)

No	書名	編著者	刊行年
1	狂歌五百題	奇々羅金鶏　編	文化 8(1811)
2	狂歌五百題集	鶴廼屋梅好　編	天保 3(1832)
3	狂歌新五百題	大江堂梅臣 秋水園落霞　編	弘化 2(1845)
4	五百題狂歌集	芍薬亭 楽聖庵　撰	?
5	五百題狂歌集／二字題之部	芍薬亭長根　等撰	?

以上の調査から、書名に「五百題」が含まれる類題句集が多いという特徴は、江戸期から見受けられるものであることが分かった。しかし、このように「五百題」という文言を書名に付けることが主流になっている中、なぜ『題詠俳諧明治千五百題』の編者は、「五百題」ではなく、「千五百題」という語を書名に付けたのか。明治期は俳書の刊行が盛んに行われ、越後敬子氏によるとその中でも特に多く出版されたのが類題句集と言われる[26]。そのように多くの類題句集が刊行される中で、自身が作成した類題句集を手に取ってもらうためには、他の句集とどこか異なった部分を作り、目立たせることが必要である。本の中でまず目に付く部分は表紙であり、表紙の書名が「五百題」と銘打たれるものが多い中、「千五百題」と銘打たれたものがあれば、読者にこの句集が他の句集と異なることを意識させ、手に取ってもらうきっかけになる。そのようなことを意図して、『題詠俳諧明治千五百題』の編者は「千五百題」と銘打ったのではないか、ということが可能性として考えられる。

また、『題詠俳諧明治千五百題』が刊行される以前に出版された類題句集について、【表 1】を参照すると、今人の句集の中では、明治 12 年 1 月刊行の『新選明治六百題』、明治 12 年 11 月刊行の『発句俳諧九百題』、明治 14 年(1881)6 月刊行の『近世発句明治千題集』と年を経過する毎に題数が大きくなる傾向が見受けられる。『題詠俳諧明治千五百題』の編者聴松は、この題数が大きくなる傾向に着目し、明治期に入り今人の句集の中ではこれまで使われたことのなかった一番大きな題数である「千五百題」を書名に付けたことも、可能性として考えられる。

2.4. 書誌・諸本調査

国立国会図書館サーチ、CiNii Books、カーリル、鳴弦文庫ホームページによると、『題詠俳諧明治千五百題』は、以下機関に所蔵されている。また、この他に綿抜研究室も所蔵している。

1. 国立国会図書館
2. 秋田県立図書館
3. 静岡大学附属図書館
4. 山梨県立文学館

[26] 越後敬子. “明治期旧派類題句集概観“. 明治開化期と文学. 国文学研究資料館編. 臨川書店, 1998, p. 147.

5. 鳴弦文庫
6. 立命館大学図書館
7. 天理大学附属天理図書館
8. 島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館
9. 北九州市立図書館

これらの所蔵本を調査したところ、秋田県立図書館、静岡大学附属図書館、山梨県立文学館、立命館大学図書館、島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館では上下巻をそれぞれ 1 冊ずつ、計 2 冊所蔵していることが確認された。また、天理大学附属天理図書館では上下巻 2 冊を 2 セット、計 4 冊所蔵していた。国立国会図書館、鳴弦文庫では上巻 1 冊、北九州市立図書館では下巻 1 冊の所蔵が確認された。国立国会図書館所蔵本はデジタルデータ化されており、立命館大学図書館所蔵本も国文学研究資料館の近代書誌・近代画像データベースにおいて、書誌情報や表紙、見返し、内題、奥付、人名録、発行書林の写真が掲載されている。本節の諸本比較では、そちらの掲載情報を参考にした。また、本調査における底本としては、綿抜研究室所蔵本を使用する。

『題詠俳諧明治千五百題』は、四目袋綴、布目表紙(縦約 15.0cm、横約 11.0cm)、上巻は 114 丁(序 1.5 丁、ウラ白 0.5 丁、本文「歳旦・春の部」60 丁、本文「夏の部」52 丁)、下巻は 106 丁(本文「秋の部」50 丁、本文「冬の部」34 丁、本文「追加」3 丁、付録「本集所載人名録いろは順」13 丁、付録「人名録追加いろは順」1 丁、奥付 0.5 丁、付録「発行書林」4.5 丁)となっている。序の丁数について、山梨県立文学館所蔵本では 1 丁となっており、本来より丁数が不足している。また、発行書林について、静岡大学附属図書館所蔵本では裏表紙見返しに発行書林 4 丁目が貼りついており、4 丁裏にあった店舗 28 店が欠け、222 店舗となっている。

立命館大学図書館、綿抜研究室の上巻は表紙左肩の題簽が剥落していたが、それ以外の館では、四周双辺の刷題簽で「明治千五百題松田丈一郎編輯乾(坤)」との記載があることが確認された。

内題については、諸本によって異同がなく、「題詠俳諧明治千五百題」となっており、「題詠」は角書である。内題次行著者名も異同がなく、「松田聴松編」と記載されている。

見返しについては、静岡大学附属図書館所蔵本は見返しがなく、それ以外で上巻を所蔵する機関の所蔵本には見返しが確認された。記載情報に関しては、以下の 3 通り存在することが分かった。天理大学附属天理図書館所蔵本については、上下巻 2 冊が 2 セット存在するため、①②と区別した。

(1) 国立国会図書館、鳴弦文庫、立命館大学図書館、島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館、天理大学附属天理図書館①②

松田丈一郎編輯
明治千五百題
発兌書肆　正文堂
　　玉海堂

(2) 秋田県立図書館、山梨県立文学館

松田丈一郎編輯

明治千五百題全二冊
明治十五年一月十一日　正文堂
版権免許同八月出版　　玉海堂　発兌

(3) 綿抜研究室

松田丈一郎編輯
明治千五百題全二冊
明治十五年一月十一日　三松堂
版権免許同八月出版　　玉海堂　発兌

また、奥付にも 2 通りの記載情報が存在することが確認された。

(1) 静岡大学附属図書館、島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館、天理大学附属天理図書館①

明治十四年一月十一日　版権免許
明治十五年八月　　出版
編輯人　茨城縣平民
松田丈一郎
東京深川区霊岸町七十三番地寄留
出版人　東京府平民
稲田源吉
日本橋区通四丁目五番地
発兌人　朝野利兵衛
下総国香取郡佐原村

(2) 秋田県立図書館、山梨県立文学館、立命館大学図書館、天理大学附属天理図書館②、北九州市立図書館、綿抜研究室

明治十四年一月十一日　版権免許
明治十五年八月　　出版
編輯人　茨城縣平民
松田丈一郎
東京深川区霊岸町七十三番地寄留
出版人　東京府平民
稲田源吉
日本橋区通四丁目五番地

上記を参照すると、見返しでは版権免許の取得年が「明治十五年」となっているのに対し、奥付で

は「明治十四年」となっている。これに関して、どちらの年が正しいのか特定することはできなかった。また、上記のように見返しや奥付の記載情報が複数存在するということから、この類題句集が繰り返し版を重ねて刊行されたこと、それだけ需要があったことが推測される。また、奥付の記載情報(2)のもので、立命館大学図書館、綿抜研究室、天理大学附属図書館②、北九州市立図書館所蔵本では、付録の「人名録追加いろは順」が「本集所載人名録いろは順」の前に掲載されていたが、山梨県立文学館、秋田県立図書館所蔵本では逆の順で掲載されていた。このことも繰り返し出版されたことの裏付けになると考えられる。

ここで、諸本の刊行順について推測する。出版人の稲田源吉は玉海堂の代表者、発兌人の朝野利兵衛は正文堂の代表者である。上下巻を同時に購入したと考えるならば、見返し(3)の時、奥付は(2)しかない。なぜならば、奥付(1)には、正文堂の代表者である朝野の名が記されているからである。逆に、見返し(1)、(2)の時、奥付は(1)、(2)どちらもあり得るということになる。

上記を考慮し、見返し・奥付の組み合わせ表を以下に掲載する。

見返し	奥付	所蔵館
(1)	(1)	島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館、 天理大学附属天理図書館①
(1)	(2)	立命館大学図書館、 天理大学附属天理図書館②
(2)	(1)	
(2)	(2)	秋田県立図書館、 山梨県立文学館
(3)	(2)	綿抜研究室

上記より見返し(2)・奥付(1)の組み合わせで所蔵している館がないことから、この組み合わせを除外して考えてみると、刊行順が以下の2通り考えられる。

1.

見返し	奥付
(1)	(1)
↓	↓
↓	(2)
↓	↓
(2)	↓
↓	↓
(3)	↓

2.

見返し	奥付
(3)	(2)
↓	↓
(2)	↓
↓	↓
(1)	↓
↓	↓
↓	(1)

ここで、見返し(1)と(3)、どちらが先に刊行されたかのかということが問題になる。正文堂に関しては、文政 11 年(1828)6 月 4 日、三代目朝野泰平のとき、書肆を営むようになる[27]。これに対し、三松堂は『東京書籍商組合史及組合員概歴』[28]によると、明治 18 年(1885)10 月創業となっている。初代は三河の生まれだが、親戚関係で芝区神明町の山中市兵衛の店務を 30 余年管理し、明治 18 年に独立して書籍業を営むようになった。以上のことから、正文堂の方が三松堂よりも創業年が先であり、見返し(1)の方が先に刊行されたことが分かる。

以上の考察から、上下巻とも所蔵しており、見返し・奥付の記載が確認された館のみ推測すると、刊行順は以下になる。

見返し	奥付	所蔵館
(1)	(1)	島根県立大学短期大学部松江キャンパス図書館、天理大学附属天理図書館①
↓	↓	
↓	(2)	立命館大学図書館、天理大学附属天理図書館②
↓	↓	
(2)	↓	秋田県立図書館、山梨県立文学館
↓	↓	
(3)	↓	綿抜研究室

[27] 朝野雅文．正文堂物語　第一巻　「北総州佐原と正文堂書舗」　朝野氏蔵版．聚海書林，1992，p. 183.

[28] 東京書籍商組合．東京書籍商組合史及組合員概歴．東京書籍商組合，1912，p. 176-177.

2.5. 本文に掲載された題及び各題の句数

『題詠俳諧明治千五百題』において、夏の季題は本文中に「夏の部」と記載されている箇所から「題詠俳諧明治千五百題夏の部終」と記載されている箇所に至るまで収録されており、その間の丁には小口にも「夏」と記載されている。秋、冬の季題も同様の形式のもと、収録されている。一方、新年や春の季題は、「歳旦之部」と記載されている箇所から「題詠俳諧明治千五百題春之部終」と記載されている箇所に至るまで収録されており、その間に「春の部」という文言は見られず、本文の冒頭と末尾の文言が夏秋冬のように一致していない。なお、その間の丁には小口に「春」と記載されている。また、「歳旦之部」と記載された後、しばらくは新年や冬の季題が続くが、丁を辿っていくと 16 丁目表には、初春の季語である「二月」が掲載され、16 丁目裏には、晩冬の季語である「節分」、「厄拂」、その後に初春の季語である「立春」が、17 丁目表には新年の季語である「初霞」が掲載されており、新年や冬、春の季題が混在して並べられている。ここまでは「歳旦之部」、ここからが「春の部」という明確な境が見られないのである。『題詠俳諧明治千五百題』では、改暦以前には秋に分類されていた「七月」が夏に、冬に分類されていた「十月」や「神無月」が秋に分類されており、新暦に従って分類されている季題も見受けられるものの、新年や春の季題に関しては、それぞれ「歳旦之部」、「春の部」と明確に季節を分けて分類しきれておらず、完全に新暦に従って季題を分類した句集とは言えない。

本節では、『題詠俳諧明治千五百題』本文の構成について述べるが、その際に新年・春の季題が収録されている箇所は「歳旦・春の部」と述べることにする。『題詠俳諧明治千五百題』では、「歳旦・春の部」、「夏の部」は上巻に、「秋の部」、「冬の部」、「追加」は下巻に収録されている。また、本文中には、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼関係の前文が記されている箇所が所々見受けられる。このように前文の後に句が掲載される形式は、『題詠俳諧明治千五百題』が有する独自の特徴である可能性が高いが、掲載された前文に関する調査、加えて本書のように前文が掲載された類題句集が他にもないのか、その点に関する調査は今後の課題としたい。以下、各部における掲載題数、掲載句数、多く詠み込まれている季題について記述する。

「歳旦・春の部」では、題数が 247 題、句数が 1199 句収録されている。最も多く詠まれている題は「梅」で 66 句掲載されており、その後、「花」の 56 句、「朗詠」の 36 句、「霞」の 33 句、「柳」の 31 句、「鶯」の 25 句と続く。

「夏の部」では、題数は 216 題、句数は 999 句収録されている。最も多く詠まれている題は「夏雑」で 62 句掲載されており、その後、「時鳥」の 43 句、「凉風」の 40 句、「若葉」の 25 句、「清水」の 21 句、「蛍」の 19 句と続く。

「秋の部」では、題数は 241 題、句数は 992 句収録されている。最も多く詠まれている題は「虫」で 30 句、その後、「露」、「秋風」、「月」の 22 句、「菊花」の 20 句、「雁」の 19 句、「萩花」の 18 句、「稲妻」の 16 句が続く。

「冬の部」では、題数は 154 題、句数は 695 句、最も多く詠まれている題は「雪」で 38 句掲載されている。その後、「時雨」の 30 句、「寒」の 17 句、「小春」、「千鳥」、「冬朗詠」の 15 句、「初時雨」の 14 句、「霜」、「枯野」の 12 句が続く。

以上の題数・句数を総計すると、『題詠俳諧明治千五百題』の掲載題数は 858 題、掲載句数は 3885 句であった。なお、「追加」の掲載題はそれぞれの部に含めて集計している。この集計結果から、実際の掲載題数と書名で銘打たれた題数との間には、大きなずれがあることが分かった。ただ、「2.2. 成立経緯」でも述べたが、「俳諧新報」第 43 号、第 45 号では「明治千五百題　人名附録　前篇　全二冊」

と記載されているように、「前篇」として出版の告知がなされており、第 41 号には、「一二句入捨の君又ハ初心少年輩の如き性氏を記せさるも多にあれハそハ後集を待て悉くさんとす」との記載があることから、「後集」の刊行が予定されていた。実際の掲載題数と書名で銘打たれた題数との間に大きなずれがあるのは、後集に掲載される題数を見込んだからなのではないかということが考えられる。

2.6. 人名録の書式

『題詠俳諧明治千五百題』には、付録として「本集所載人名録いろは順」、「人名録追加いろは順」が掲載されている。この人名録には、俳号がいろは順に並べられ、それぞれの俳号の下に俳人の住居や本名が記載されている。明治期に刊行された類題句集を見ると、その多くが旧国名や都道府県名毎に俳号が並べられる形式を採っており、『題詠俳諧明治千五百題』のように俳号がいろは順に並べられ、住所や本名等の詳細な情報も併せて記載されている書式は珍しい。

本名を見ていくと「～母」、「～男」、「～女」、「～孫」等と記載されているものが度々見受けられる。以下にいくつか示す。

・奇峰　常陸竜个崎町　小泉安兵衛
・絲風女　常陸河内郡龍个崎町　小泉奇峰母

・松星　磐城国中村宇多川町　佐藤與兵衛
・松露　磐城国中村宇多川町　佐藤松星男

・得水　伊勢山田外宮　山原千秋
・磐の　伊勢国山田岡本町　山原得水女

・拾蕊　阿波國那賀郡椿泊浦　玩古庵宮崎氏
・拾英　阿波國那賀郡椿泊浦　宮崎拾蕊孫

これらの俳人は、それぞれ血縁関係にあると推測される。また、「～社中」、「～舎」等と記載されている俳人も度々見受けられる。以下にいくつか示す。

・圭齋　信州飯田十六番町　橘圭齋
・蕉月　信州飯田町　橘圭齋社中

・涼雨　相州大住郡寺田縄村　竹陰舎涼雨
※竹陰は『題詠俳諧明治千五百題』人名録にも記載されており、東京在住の俳人

・壽道　相州大磯宿　鴫立庵
・鶯谷　相州大磯宿　鴫立庵社中

・盛虬　陸中鹿角郡花輪町　髙瀬宗兵衛

・一閑　　羽後国鹿角郡花輪町　　髙瀬盛虬社中
・草山　　陸中鹿角郡花輪町　　髙瀬盛虬社中

これらの俳人は、師弟の関係にあることが推測される。このように、付録の人名録から当時の俳人たちのつながりを垣間見ることができるという点で、『題詠俳諧明治千五百題』は価値のある資料と言える。

2.7. 人名録に掲載された俳人数

『題詠俳諧明治千五百題』付録の人名録には、全 526 人の俳人が掲載されている。前節で述べた通り『題詠俳諧明治千五百題』人名録には、旧国名、都道府県名が混在して記載されているが、国別、都道府県別に俳人数を集計すると、以下の様になる。武蔵と武州、讃岐と讃州、駿河と駿州、甲斐と甲州、尾張と尾州、志摩と志州はそれぞれ同じ国を指すため、俳人数を纏めて集計した。カタカナ表記が使われている下フサ、伊ヨ、伊セもそれぞれ下総、伊豫、伊勢の俳人数と纏めて集計した。また、遊学中の人や住所不明の人等 27 人を「その他」として集計した。

【各地域の俳人数】
・78 人：東京
・39 人：常陸
・34 人：下総(下フサ)
・26 人：阿波
・24 人：武蔵(武州)
・20 人：信州
・18 人：伊豫(伊ヨ)
・17 人：三河
・14 人：讃岐(讃州)、磐城、豊前
・13 人：遠州
・12 人：相模(相州)
・11 人：備前、伊勢(伊セ)、羽後、駿河(駿州)
・9 人：越後
・7 人：陸前、甲斐(甲州)、尾張(尾州)、越中
・5 人：陸中、志摩(志州)、因州、下毛、肥後
・4 人：筑前、肥前、陸奥、伯耆
・3 人：豊後、上野、上総、下野、大坂、伊豆、備後
・2 人：後志、備中、上毛、播州、出雲、横濱、下京、土州
・1 人：近江、大和、北海道、長門、佐渡、丹後、西京、美濃、安藝、秋田、淡路、羽前、静岡、美作、岩代、能登、越前
・27 人：その他
　・在後志小樽港：2 人
　・今在羽後：1 人

・在下総海上郡網戸村：1 人
・在相州横須賀：1 人
・在西京：1 人
・在福岡：1 人
・在熊本鎮臺：1 人
・在韓對馬ノ人：1 人
・在咸鏡道元山津領事館：1 人
・下総埴生郡成田人今在上総：1 人
・佐渡國人今在東京：1 人
・下総取手駅今在東京：1 人
・漫遊今在静岡：1 人
・備後人今在遠州藤川村：1 人
・東京人方今漫遊中：1 人
・信濃人漫遊中：1 人
・西京人漫遊中：1 人
・土佐ノ人漫遊中：2 人
・漫遊生：1 人
・住所不明：6 人

上記を参照すると、関東圏の俳人が多くなっているものの、ほぼ全国に俳人が分布している。自身の句が掲載された俳人が本句集を購入したとするならば、人名録に掲載された俳人が全国に分布している『題詠俳諧明治千五百題』は、全国規模で普及した可能性がある。

また、全体の中で 2 番目に俳人数が多くなっている常陸は、編者聴松の出身地とされる。この常陸の俳人について、人名録に記載されている住居を参照し、より細かく郡毎に俳人数を集計したものが以下になる。

【常陸の俳人】
・河内郡：25 人
竜个崎町：9 人
大徳村：6 人
稲荷村：2 人
柴崎村：2 人
下須田村：1 人
伊佐津：1 人
入地村：1 人
狸穴村：1 人
中島村：1 人
村名不明：1 人
・多賀郡：7 人

平潟：5 人
大津浜：2 人
・新治郡：2 人
土浦町：1 人
土浦真鍋町：1 人
・笠間：2 人
五騎町：2 人
・筑波郡：1 人
矢田部町：1 人
・東茨城郡：1 人
上飯沼村：1 人
・真壁郡：1 人
吉間村中町：1 人

上記を参照すると、編者の出身地とされる龍ヶ崎町の俳人数が最も多くなっていることが分かる。また、龍ヶ崎町が属する河内郡の俳人数も、他郡の俳人数と比較して多くなっている。編者が句の募集にあたり、自身の出身地、及び出身地周辺の俳人に対して、募句の告知を念入りに行った結果、編者の地元やその周辺の俳人数が多くなったことが推測される。

2.8. 各俳人の句数

『題詠俳諧明治千五百題』本文中に句が掲載された俳人の俳号を、人名録記載の俳号と紐づけ、各俳人の句数を集計した。集計結果については、本稿末の付録に表示した。多く句が掲載された俳人について、上位 20 番目までを抜き出すと以下になる。

【各俳人の句数】
・107 句：吟風(羽後)
・55 句：澄江(東京)
・53 句：仁里(下総埴生郡成田人今在上総)
・46 句：聴松
・44 句：竹左(阿波)、半窓(伊予)
・37 句：壽道(相州)
・35 句：而嘯(常陸)
・32 句：露月(越後)、みとり
・31 句：梅宿(長門)
・30 句：春湖(東京)
・29 句：沙明(備前)、拾蕊(阿波)、素山(秋田)
・27 句：芹舎(下京)
・23 句：可夕(下総)、魯堂(東京)、雨江(東京)
・22 句：旭旦(常陸)、菖溪(阿波)、梅理(下総)、仙夫(越中)、稲處(西京)

上記を参照すると、関東地方、次いで四国地方の俳人が多いのが目立つが、上位 20 番目までの俳人を取ってみても、分布が広範囲に及んでいることが分かる。

上記には、当時の有名宗匠である春湖や芹舎、『題詠俳諧明治千五百題』の編者聴松とともに「俳諧新報」の刊行に携わった澄江、『題詠俳諧明治千五百題』の序文を執筆した拾蕊の名前が見受けられる。また、他の俳人と比較して多くの句が採録されている羽後の吟風は、明治期の秋田を代表する宗匠であるが、編者の聴松と親しい間柄にあったか、もしくは聴松が主宰した正風社と深い関係性があったのではないかと推測される。

2.9. 各地域の句数

前節で集計した各俳人の句数を人名録記載の住居で地域別に分類し、集計した。本文中では国名が記載されていなかったり、 一貫していなかったりするため、人名録記載の旧国名・都道府県名を採用した。人名録の住居が未記載の者、そもそも人名録に掲載されていない者、俳号が解読できなかった者は「不明」として集計した。

【各地域の句数】

- 523 句：東京
- 337 句：常陸
- 300 句：下総
- 255 句：阿波
- 171 句：羽後
- 152 句：相模(相州)
- 151 句：武蔵(武州)
- 147 句：伊予
- 96 句：備前
- 93 句：信州
- 91 句：三河
- 90 句：磐城
- 85 句：讃岐(讃州)
- 72 句：越後
- 57 句：駿河(駿州)、遠州
- 54 句：伊勢、豊前
- 45 句：因州
- 36 句：筑前
- 35 句：越中
- 34 句：陸中
- 33 句：下京、下野
- 32 句：甲斐(甲州)
- 31 句：備後、長門

・29 句：秋田、大坂
・27 句：下毛
・26 句：陸奥
・23 句：陸前、尾張(尾州)
・22 句：西京、土州
・20 句：肥前、肥後
・18 句：豊後
・17 句：上毛
・16 句：志摩(志州)
・15 句：備中
・11 句：北海道
・10 句：岩代、伯耆
・9 句：横浜、伊豆
・8 句：美濃
・7 句：淡路、上総
・6 句：安芸、上野
・5 句：丹後
・4 句：佐渡、美作、越前、羽前、出雲、播州
・3 句：近江
・2 句：後志、静岡、能登、大和
・360 句：その他
    ・53 句：下総埴生郡成田人今在上総
    ・9 句：在咸鏡道元山津領事館
    ・8 句：在下総
    ・2 句：在後志
    ・6 句：在福岡、在熊本、西京人漫遊中
    ・5 句：東京人方今漫遊中、土佐ノ人漫遊中
    ・4 句：今在羽後、漫遊生
    ・3 句：下総取手駅今在東京、備後人今在遠州
    ・2 句：在相州、漫遊今在静岡、佐渡国人今在東京、在西京、在韓対馬ノ人
    ・236 句：不明

各地域の俳人数と句数とを比較すると、おおむねその俳人数に比例して、句数も多くなっている。ただ、秋田や長門のように 1 人で 29 句、31 句詠んでいる地域も見受けられた。

2.10. 発行書林に掲載された書店数

『題詠俳諧明治千五百題』では、奥付の次頁から「東京幷ニ各地発行書林」として、本書を取り扱った書店の地域名、その下に書店の代表者名が記載されている。

書店数を集計すると、掲載総数は 250 店舗であった。各地域の店舗数を集計し、降順に並べ替えた

ものを以下に記載する。発行書林には、越中と岩代がそれぞれ一か所に纏めて掲載されていなかったため、店舗数を合計して記載した。遠江と遠州、周防と防劔に関しても、それぞれ同じ国を表すため、店舗数を合計して記載した。

【各地域の店舗数】

・34 店舗：東京
・19 店舗：下総
・15 店舗：信濃、越後
・10 店舗：上総、常陸、羽前
・9 店舗：遠江(遠州)、武蔵
・7 店舗：尾張、伊勢、駿河、上野、下野、越中
・6 店舗：大坂、岩代、陸前
・5 店舗：美濃、相模
・4 店舗：陸奥
・3 店舗：西京、三州、伊豆、安房、加賀
・2 店舗：甲斐、飛弾、磐城、渡島、後志、周防(防劔)、筑前、豊前、肥前、肥後
・1 店舗：陸中、羽後、越前、雲州、播磨、備前、長州、筑後、豊後、薩摩

調査を行った結果、全店舗数、各地域の店舗数が、鈴木円花・綿抜豊昭両氏の「『古今俳諧明治五百題』ついて」[29]、吉澤駿裕氏の「『明治新五百題』について」[30]、山下泰史氏の「『明治新々五百題』について」[31]で取り上げられている発行書林と同じであることが分かった。ここから、発行書林について、同じ版木を使用している可能性が高いことが推測されたため、代表者名等細かな部分にまで違いは生じているのかについて調査した。その結果、明らかになった異同を『古今俳諧明治五百題』を起点として、以下に記載する。

【記載事項の変化】

『古今俳諧明治五百題』(明治 12 年(1879))
↓
『明治新五百題』(明治 14 年(1881))
・1 丁目(右)下段 1 行目
「長野亀七」から「河邉雅助」に変更
・5 丁目(右)下段 6 行目
「同柳川」から「筑後柳川」に変更
(「同」とあるが、前行に「筑前」とあることから、「筑前柳川」を指す)
↓

29 鈴木円花，綿抜豊昭.『古今俳諧明治五百題』ついて．図書館情報メディア研究．2009，vol．7，no．1，p．27-33.
30 吉澤駿裕.『明治新五百題』について．筑波大学，2014，30p．卒業論文.
31 山下泰史.『明治新々五百題』について．筑波大学，2014，96p．卒業論文.

『題詠俳諧明治千五百題』（明治 15 年(1882)）

・1 丁目(右)上段 4 行目

「稲田源吉」から「江島喜兵衛」に変更

・1 丁目(右)下段 1 行目

「河邉雅助」から「長野亀七」に変更

↓

『明治新々五百題』（明治 17 年(1884)）

・1 丁目(右)上段 3 行目

「山中市兵衛」から「叢書閣」に変更

・1 丁目(右)上段 4 行目

「江島喜兵衛」から「小林新造」に変更

・1 丁目(右)下段 1 行目

「長野亀七」から「東生鐵五郎」に変更

『明治新五百題』では「同柳川」から「筑後柳川」に変更されているが、その後、『題詠俳諧明治千五百題』、『明治新々五百題』においても変更点がそのままになっているため、『古今俳諧明治五百題』の「同柳川」（「筑前柳川」）は誤刻であったと考えられる。

また、『題詠俳諧明治千五百題』では、「稲田源吉」から「江島喜兵衛」に代表者名が変更されているが、これについては稲田が『題詠俳諧明治千五百題』で出版人を務め、奥付に名前の記載があるため、変更されたと思われる。『明治新々五百題』においても、「山中市兵衛」から「叢書閣」に、「江島喜兵衛」から「小林新造」に代表者名が変更されているが、これについても『明治新々五百題』において山中が発兌人を、江島が出版人を務め、両者とも奥付に名前が記載されていることから変更されたと考えられる。

以上のように、奥付に出版人、発兌人として名前が載っている場合には、発行書林に名前を掲載しないよう、代表者名を変更していることが分かった。ただ、朝野利兵衛に関しては、奥付にも発行書林にも名前が掲載されていた。

上記を纏めると、代表者名については 2、3 点の異同があるものの、『古今俳諧明治五百題』、『明治新五百題』、『題詠俳諧明治千五百題』、『明治新々五百題』の発行書林にはほぼ同じ内容が記載されていることが分かった。それではなぜ、ほぼ同じ内容の発行書林が使用されることになったのか、その点について考察する。上記 4 点には、それぞれ以下の人物が出版に関わっている。

『古今俳諧明治五百題』

・出版人：江島喜兵衛

発売人：朝野利兵衛

『明治新五百題』

・『古今俳諧明治五百題』と同じ

『題詠俳諧明治千五百題』

・出版人：稲田源吉

（一部諸本奥付には、発兌人に朝野利兵衛の名前が記載されている）

『明治新々五百題』

・出版人：朝野利兵衛、江島喜兵衛

・発兌人：山中市兵衛、稲田源吉

『題詠俳諧明治千五百題』を編集した聴松が、編集長として刊行に携わった俳誌「俳諧新報」第 1 号の p.2 には、売捌所として江島喜兵衛や正文堂利兵衛の名前が記載されている。ここから推測すると、聴松はもともと江島や朝野とつながりがあったと考えられる。

また、前掲『正文堂物語　第一巻　「北総州佐原と正文堂書舗」　朝野氏蔵版』を参照すると[32]、『題詠俳諧明治千五百題』が刊行された当時、正文堂は四代目、正文堂利兵衛泰尚の頃と推測される。四代目は、11 歳のときに江戸の玉山堂稲田佐兵衛のもとに奉公へ出されるが、この玉山堂は山城屋とも言い、幕末・明治期の江戸(東京)において三本指に入る大きな本屋と言われた。稲田佐兵衛の住所は、明治 17 年(1884)刊行の『俳諧明治六百題』の奥付を参照すると、「日本橋区通二丁目」と記載されている。玉海堂稲田源吉の住所は、『題詠俳諧明治千五百題』の奥付にあるように、「日本橋区通四丁目五番地」である。このように、住所が近く、「玉」が屋号に使用されている点が共通することから、玉海堂稲田源吉は玉山堂の分家なのではないか、だからこそ正文堂朝野利兵衛ともつながりがあったのではないか、ということが推測される。

ただ、編者や出版人が、『古今俳諧明治五百題』や『明治新五百題』に関わった出版人と単につながりがあったことのみが、同じ版木を使用したことの理由にはならないと思われる。この理由だけでなく、人名録に掲載された俳人が全国に分布する点が共通することも、同じ版木を使用することになった理由として考えられる。

2.11. まとめ

成立経緯の調査より、『題詠俳諧明治千五百題』はもともと『今人俳諧題咏』という書名での刊行が企画されていたが、書名を『題詠俳諧明治千五百題』に変更し、出版されるに至った可能性が高い。また、『題詠俳諧明治千五百題』に掲載しきれなかった分を『明治千五百題後集』として刊行する予定であったが、結局その刊行には至らなかった可能性が高いことが明らかになった。

また、『題詠俳諧明治千五百題』の本文は、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼関係の前文が記載された後に、句が掲載される形式を採っている。この形式は、「コハ世ニ有フレタル類題集ニ異リ」という方針のもと、採用されたものである。ここから、編者の「他類題句集との差別化を図る」という意識をうかがうことができる。

諸本調査からは、見返しや奥付の記載情報が複数存在することが明らかになった。このことから、本書が繰り返し版を重ねて刊行されたこと、それだけ需要があったことが推測される。

本文掲載の題数、句数の調査からは、実際の掲載題数と書名で銘打たれた題数との間には、大きなずれがあることが分かった。ただ、本書は「後集」の刊行が予定されており、後集に掲載される題数を見込んで「千五百題」という題数が書名に付けられたことが考えられる。

本書に付されている人名録には俳号だけでなく、詳細な住所、本名が記載されており、俳人間の血縁関係や師弟関係等を読み取ることができる。当時の俳人たちのつながりを垣間見ることができると

---

[32] 朝野雅文．正文堂物語　第一巻　「北総州佐原と正文堂書舗」　朝野氏蔵版．聚海書林，1992，p. 359，695-696.

いう点で、『題詠俳諧明治千五百題』は価値のある資料と言える。

また、人名録に掲載された俳人は、全国に分布している。自身の句が掲載された俳人が本句集を購入したとするならば、人名録に掲載された俳人が全国に分布している『題詠俳諧明治千五百題』は、全国規模で普及した可能性が考えられる。

付録の発行書林に記載されている書店も全国に分布しており、本書が当時、全国で取り扱われた可能性が考えられる。また、発行書林には、『古今俳諧明治五百題』、『明治新五百題』、『明治新々五百題』とほぼ同じ内容が記載されていることも明らかになった。

3. 『俳諧明治七百題』に関する調査

本章では、『俳諧明治七百題』の調査結果について纏める。

3.1. 編者・校正者

『俳諧明治七百題』上巻の見返しには、校正者として香楠居幹雄と春朗舎常磐、編者として大梅居澄江の名が記載されている。

まず、編者澄江について前掲『俳文学大辞典』を参照すると[33]、以下のように記載がある。澄江の通称は秦長四郎といい、別号を大梅居(4 世)と号した。常陸国龍ヶ崎の人であり、東京両国薬研堀に住んだ。誕生年については不明だが、没年については、明治 15 年(1882)12 月 11 日との記載がある。

また、澄江は鈴木月彦門下に属した。『俳文学大辞典』を参照すると[34]、月彦は文政 8 年(1825)に誕生し、明治 25 年(1892)3 月 20 日に 68 歳で没したとされる。江戸の生まれであり、本名を穂積勝重、通称を鉞太郎といった。別号に、東杵庵四世、宝廼屋、紫花園、素学堂、言霊道人、吏登庵がある。明治 7 年(1874)には、『俳諧明治七百題』に校正者として関わった三森幹雄とともに俳諧教導職試験に合格した。俳諧教導職とは、明治 6 年(1873)5 月、教部省が祭政一致・社会教化を目的として設置したものである[35]。

校正者の 1 人、春朗舎常磐については詳細に記述された資料がなく、明らかにできなかったものの、幹雄については、『俳文学大辞典』に三森幹雄の項で記述がある[36]。それを参照すると、幹雄は文政 12 年(1829)12 月 16 日に誕生し、明治 43 年(1910)10 月 17 日に 82 歳で没した。陸奥国中谷の生れであり、通称を寛、幼名を菊治、別号を春秋庵(11 世)、静波、樹下子、笈月山人、不去庵、天寿老人、桐子園、香南居と号した。俳諧教導職制度のもと、明倫講社を設立し、『俳諧新報』にも助力した。明治 13 年(1880)には明倫講社の機関誌として『俳諧明倫雑誌』を創刊し、門弟は 3000 名に及んだ。

3.2. 成立経緯

『俳諧明治七百題』の成立経緯については、序や凡例から読み取ることができる。まず、香楠居幹雄により執筆された序文を以下に記載する。

世に俳諧の集造りて五百題六百題抔号る事古今に渉りて其次々に編出せるハ唯古きにのミなづミて

---

33 尾形仂[ほか]. 俳文学大辞典. 角川書店, 1995, p. 563.
34 尾形仂[ほか]. 俳文学大辞典. 角川書店, 1995, p. 451.
35 尾形仂[ほか]. 俳文学大辞典. 角川書店, 1995, p. 674.
36 尾形仂[ほか]. 俳文学大辞典. 角川書店, 1995, p. 886.

新らしきを知らさる初心輩の為に其時々志しある人のものせるなり此書たるや春朗舎常磐かまめやかに近きにわたりハ其家に往て是を探り遠き境は書を寄て是を索む稿半にして身まかりぬれは大梅居主人に委ねて功なれる日予亦校訂し以て序を加ふるハ道の一助たらむ事を悦へる也

上記から、始めは春朗舎常磐が句を集めていたが、途中で亡くなってしまったため、大梅居主人、すなわち澄江にその後の作業が委ねられたとのことである。春朗舎常磐に関しては、『俳文学大辞典』等の辞典に記載がなく、常磐が澄江とどのような関係にあったのかについて、明らかにできなかった。

また、澄江が執筆した凡例には、以下の文章が記載されている。

俳諧の集世に多しといへとも時移り世変して新古の境ひなきにあらす故に初学の人にしらしめんとて春朗舎主今人の発句を集め明治七百題と題号をものせしか稿なかはにして身まかりぬれは其侭紙魚の栖とせんも本意なしとて書肆集予に編集せん事を索むされハ遺稿の発句は春朗舎主か乞集めたるものなれハ稿成て後古人となりたるゟあれと其まゝにかへ尚足らさるを補て上下二巻となし刊行する事となしぬ

上記から、本書の性格として今人の発句を集め、俳諧初心者に向けて作られたものであることが分かる。また、常磐が亡くなった後に書肆が澄江に編集作業を依頼したこと、編集にあたり古人の句はそのままにし、不足分を補充して刊行したことが分かる。

また、「俳諧明倫雑誌」第 23 号(明治 15 年 9 月)表紙裏の広告には以下のような記載がある。「俳諧明倫雑誌」とは、前節でも述べたが、三森幹雄を社長とする明倫講社の機関誌として明治 13 年 12 月に創刊された俳誌である。

俳諧明治七百題　上下二冊　大梅居澄江　編輯
　　定價金三拾八銭　香楠居幹雄　校正
右七百題ハ春朗舎常磐編集のちらしにて集句致候處同人功半にして死去候
間大梅居大人に委託し書肆小林氏刻費を償ひて編集相成候間此假廣告候也
明倫社執事

上記によると、春朗舎常磐はちらしを使用して句を募集していたことが分かる。ちらしについてはその所在が確認できておらず、どのような配布のされ方をしたかについては定かでない。しかし、このちらしは、「俳諧明倫雑誌」に挟み込まれていた可能性がある。その理由について以下に述べる。

まず、『俳諧明治七百題』と『題詠俳諧明治千五百題』掲載の俳人を比較した結果、『俳諧明治七百題』のみに句が掲載されている俳人は、363 人であることが分かった。その内 150 人が、「俳諧明倫雑誌」第 12 号(明治 14 年 6 月)、第 13 号(明治 14 年 12 月)に掲載されている人名録にも、俳号が掲載されていることが分かった。この 150 人の内、6 人は俳号が同じだが、記載されている国名が異なっており、1 人は国名が同じだが、俳号の 1 文字が異なっている。これらの俳人を除いても、『俳諧明治七百題』のみに掲載されている 363 人の約半数が「俳諧明倫雑誌」の人名録に掲載された俳人と重複している。ちなみに、「俳諧明倫雑誌」第 12、13 号に掲載されている人名録は、「初編より十二編に至る迄続々と句を並へ俳号を接したる江湖の諸君いつれの何人たるを知されハ風雅の因みも薄く文音の便

もあらされハ十二編飛入の風子を除くの外國郡町村通稱を記載して文音交の便となさしむ」ことを意図して掲載された(「俳諧明倫雑誌」第 12 号、p. 4 参照)。つまりこの人名録は、「俳諧明倫雑誌」によく投句していた俳人が掲載されているものと言える。この人名録に掲載されている俳人と、『俳諧明治七百題』に掲載されている俳人で重複する者が多いことの原因を、「俳諧明倫雑誌」の読者に対し、『俳諧明治七百題』に関する募句の告知がなされた結果と考えれば、辻褄が合う。しかし、「俳諧明倫雑誌」第 1〜3、5〜22 号(明治新聞雑誌文庫所蔵本)を確認すると、『俳諧明治七百題』の募句広告は掲載されていない。よって、告知の手段としては、ちらしが「俳諧明倫雑誌」に挟み込まれた可能性が推測される。

以上を纏めると、『俳諧明治七百題』は俳諧初心者のために作られたものであり、始めは春朗舎常磐が句を集めていたが、その途中で亡くなってしまったため、澄江が後を引き継いで完成させたものである。また、ちらしを使用して募句が行われており、そのちらしは「俳諧明倫雑誌」に挟み込まれていた可能性が高いことが推測される。

3. 3. 書誌情報

本節では、『俳諧明治七百題』に関する書誌情報について纏める。以下、国立国会図書館所蔵本を底本とした。書誌情報のみならず、本文の構成、人名録に関する調査においても国立国会図書館所蔵本を使用する。

『俳諧明治七百題』外題には「俳諧明治七百題秦長四郎編上(下)」との記載がある。

見返しには、

香楠居幹雄
春朗舎常磐校正　明治十五年八月廿八日版権
大梅居澄江編輯　免許同年九月　　出板
俳諧明治七百題
東京俳門書肆　仙鶴堂蔵板

奥付には、

明治十五年八月二十八日版権免許
同年十月　　出版　　定價三十八錢
　　編輯人　東京府平民
　　秦長四郎
　　日本橋区薬研堀町廿二番地
　　出版人　同平民
　　小林喜右衛門
　　同区新大坂町十番地
　　発兌　　各府縣ら書肆

との記載がある。見返しでは、出版年の月が九月になっているのに対し、奥付では十月になってい

る。これに関して、どちらが正しい月であるのか特定はできなかった。

『俳諧明治七百題』上巻は、88 丁(序 1 丁、凡例 1.5 丁、ウラ白 0.5 丁、「歳旦之部」52 丁、「夏之部」33 丁)、下巻は 96 丁(「夏之部」続き 12 丁、「秋之部」75.5 丁、ウラ白 0.5 丁、跋 1 丁、付録「人名録」6.5 丁、奥付 0.5 丁)から成る。なお、下巻では 50 丁表、50 丁裏、51 丁表の順で綴じられた後に再び同じ内容で 50 丁裏、51 丁表が綴じられていた。また、本文中には「春之部」、「冬之部」という文言の記載が見られないものの、春の季題は「歳旦之部」に、冬の季題は「秋之部」にそれぞれ収録されている。加えて、「秋之部」では「葉月」や「十月」、「小六月」、「師走」といった季題の前に一行の空白が挿入されていた。「葉月」は旧暦であっても新暦であっても秋の季語、「師走」は旧暦であっても新暦であっても冬の季語に分類されるが、「十月」に関しては、旧暦であれば冬の季語、新暦であれば秋の季語に分類される。「小六月」に関しても、旧暦「十月」の異称である。これらの季題の前に置かれた一行の空白は、季の配置をどうするかで混乱した跡である可能性がある。一行の空白には、「冬之部」という文言が記載される予定だったものの、どこに挿し込むか判断しかね、結局「冬之部」という文言が記載されないまま、刊行されたということが考えられる。

3.4. 本文に掲載された題及び各題の句数

『俳諧明治七百題』の本文は、「歳旦之部」、「夏之部」、「秋之部」から成る。上巻には「歳旦之部」、「夏之部」が、下巻には、「夏之部」の続きと「秋之部」が収録されている。夏の季題は「夏之部」に収録されているものの、新年や春の季題が「歳旦之部」に、秋や冬の季題が「秋之部」に収録されており、新暦に従って季題が分類された句集とは言えない。

「歳旦之部」では、題数の総計が 256 題、句数は 1037 句になる。最も多く詠まれている題は「梅」で 40 句掲載されている。その後、「花」の 37 句、「霞」、「鶯」の 29 句、「柳」、「蝶」の 25 句、「初鴉」、「春風」の 18 句、「蛙」、「櫻」の 17 句と続く。

「夏之部」では、題数が 235 題、句数は 894 句収録されている。最も多く詠まれている題は「時鳥」で 38 句収録されている。その後、「牡丹」の 21 句、「若葉」の 20 句、「袷」の 19 句、「蛍」、「涼」の 17 句、「清水」の 16 句と続く。

「秋之部」では、題数が 356 題、句数は 1485 句収録されている。最も多く詠まれている題は「雪」で 34 句、続いて「時雨」の 29 句、「虫」の 22 句、「露」、「小春」、「枯野」の 21 句、「菊」の 20 句、「秋風」、「紅葉」の 19 句が続く。

以上の句を総計すると、『俳諧明治七百題』の掲載題数は 847 題、掲載句数は 3416 句であった。なお、書名で銘打たれた題と実際の収録題数にずれが生じていることに関しては、凡例において以下のように言及されている。

題名は七百題と號たれと其実ハ百余題の多きに至れとも大は小をかぬるの諺にならひて集名もあらためず

上記から、題名と実際の収録題数に差が生じているが、「大は小を兼ねる」の諺にならって題名を改めないとしていることが分かる。

3.5. 人名録の書式

『俳諧明治七百題』に付されている人名録は、国名毎に俳号が並べられる形式を採っている。国名は、東京、西京、大坂、横濱、摂津、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、安房、上総、下総、近江、美濃、信濃、上野、下野、陸前、陸中、陸奥、岩代、岩城、羽前、羽後、江差、函舘、渡島、後志、若狭、加賀、越中、越後、佐渡、丹後、因幡、伯耆、出雲、播磨、備後、周防、長門、伊豫、土佐、紀伊、淡路、阿波、肥前、豊後、雲水の順に掲載されている。こうして掲載順に国名を並べてみると、東京から摂津までは規則性が見いだせないもののそれ以後は、東海道(上記では伊勢から下総まで)、東山道(近江から羽後まで)、北海道(江差から後志まで)、北陸道(若狭から佐渡まで)、山陰道(丹後から出雲まで)、山陽道(播磨から長門まで)、南海道(伊豫から阿波まで)、西海道(肥前、豊後)の括り毎に国名が纏められていることが分かる。国名が無秩序に並べられておらず、読みやすさを意識して作成されたことが分かる。

3.6. 人名録に掲載された俳人数

『俳諧明治七百題』付録の人名録に掲載されている俳人総数は、454 人である。人名録に掲載されている俳人を国別に集計し、降順に並べ替えたものが以下になる。

【各地域の俳人数】

- 97 人：武蔵
- 64 人：東京
- 46 人：上野
- 42 人：下総
- 26 人：越後
- 23 人：甲斐
- 17 人：上総
- 16 人：羽前
- 10 人：岩城
- 8 人：安房
- 7 人：岩代、伊豆、信濃
- 5 人：西京、尾張、土佐
- 4 人：大阪、横濱、阿波
- 3 人：相模、後志、加賀、因幡
- 2 人：摂津、伊勢、三河、遠江、駿河、美濃、陸前、陸奥、羽後、佐渡、伯耆、淡路、肥前
- 1 人：近江、下野、陸中、江差、函舘、渡島、若狭、越中、丹後、出雲、播磨、備後、周防、長門、伊豫、紀伊、豊後
- その他 2 人：雲水

上記を参照すると、関東圏の俳人が多いこと、越後の俳人が全体の中でも 5 番目に多くなっていることが目に付く。

また、『俳諧明治七百題』の編者、秦澄江の出身地は常陸国とされるが、常陸の俳人は一人も掲載さ

れていない。常陸の俳人が当時一人も存在しなかった訳ではないことは、『題詠俳諧明治千五百題』付録の人名録から明らかである。『俳諧明治七百題』において、常陸国の俳人が一人も掲載されていないという点には、編者の意図が孕んでいるのではないかと考えられるが、明確な根拠となる記述を読み解くことはできなかった。あるいは、常磐か澄江のいずれかが、常陸の俳人に対し芳しくない感情を抱いており、故意に排除したのかもしれない。

3.7. 各俳人の句数

『俳諧明治七百題』の本文中に句が掲載された俳人の俳号を人名録記載の俳号と紐づけ、各俳人の句数を集計した。集計結果については、本稿末の付録に表示した。多く句が掲載された俳人について、上位 20 番目までを抜き出すと以下のとおりである。

【各俳人の句数】

- 191 句：澄江
- 115 句：幹雄
- 105 句：春城（下総）
- 98 句：一理喜（武蔵）
- 97 句：浪兄（東京）
- 96 句：亀遊（下総）
- 82 句：詩竹（東京）
- 65 句：等栽（東京）
- 62 句：富水（東京）
- 46 句：辰風（羽前）
- 43 句：宇山（東京）、秀奇（東京）
- 38 句：完岱（東京）
- 36 句：半海（上野）、鶯窠（武蔵）
- 35 句：曽木（武蔵）
- 34 句：鮮露（武蔵）
- 33 句：月彦（東京）
- 31 句：万樹（武蔵）
- 30 句：角丈（武蔵）

句が多く掲載されている上位 20 番目までに着目すると、羽前の辰風を除き、ほぼ関東圏に集中している。また、当時の有名宗匠である等栽や宇山、月彦、素水等の名前も見受けられる。

3.8. 各地域の句数

本節では、前節で集計した各俳人の句数を地域別に分類した。人名録に掲載されていない者、俳号が解読できなかった者、国名が特定できなかった者は「不明」として集計した。その結果が以下になる。

【各地域の句数】

・930 句：東京
・735 句：武蔵
・380 句：下総
・221 句：上野
・126 句：越後
・100 句：羽前、甲斐
・71 句：上総
・48 句：岩城
・36 句：安房
・35 句：岩代
・24 句：伊豆
・23 句：陸前
・21 句：大阪
・20 句：西京
・18 句：横濱、土佐
・10 句：播磨
・9 句：信濃
・7 句：伊勢、阿波
・6 句：三河、相模
・5 句：加賀、遠江、尾張
・4 句：江差、淡路、後志
・3 句：備後、陸奥、因幡
・2 句：伊豫、紀伊、肥前、摂津、伯耆、美濃、羽後、駿河
・1 句：周防、丹後、佐渡、渡島、若狭、陸中、長門、越中、豊後、出雲、函舘
・402 句：その他
　　・11 句：雲水
　　・391 句：不明

各地域の俳人数と句数とを比較すると、おおむねその俳人数に比例して、句数も多くなっている。また、近江や下野の俳人は人名録に俳号が掲載されていたものの、上記には国名が見られないことから、実際には句が掲載されていないことが分かった。

3.9. まとめ

成立経緯の調査により、『俳諧明治七百題』は俳諧初心者のために作られたものであり、始めは春朗舎常磐が句を集めていたが、道半ばにして亡くなってしまったため、澄江が後を引き継いで完成させたものであることが分かった。また、ちらしを使用して募句が行われており、そのちらしは「俳諧明倫雑誌」に挟み込まれていた可能性が高い。

本文掲載の題数・句数の調査からは、書名で銘打たれた題と実際の収録題数にずれが生じているこ

とが明らかになった。この点については、「大は小を兼ねる」の諺にならって題名を改めないということが凡例に記載されている。

本書に付されている人名録は、国名毎に俳号が並べられる形式を採っている。国の掲載順も無秩序に並べられておらず、東海道、東山道、北海道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道の括り毎に国名が纏められている。このことから、読みやすさを意識して作成されたことが分かる。

また、人名録に掲載されている俳人数の調査から、関東圏の俳人が多くなっているものの、掲載された俳人は全国に分布していることが明らかになった。

4.『題詠俳諧明治千五百題』と『俳諧明治七百題』との比較

本章では、『題詠俳諧明治千五百題』と『俳諧明治七百題』を比較し、『題詠俳諧明治千五百題』独自の特徴について考察する。

4.1.本文に掲載された題に関する比較

「2.5.本文に掲載された題及び各題の句数」において、『題詠俳諧明治千五百題』に収録されている季題について調査した。この収録季題の中に珍しい季題は存在するのか、その点について明らかにするため、『俳諧明治七百題』、『明治新五百題』、『明治新々五百題』を比較対象とし、『題詠俳諧明治千五百題』のみに掲載されている季題を調査した。比較対象に『俳諧明治七百題』だけでなく、『明治新五百題』、『明治新々五百題』も追加したのは、比較を重ねることで比較元である『題詠俳諧明治千五百題』の特徴をより明確化できると考えたためである。なお、『明治新五百題』、『明治新々五百題』のデータとしては、吉澤氏、山下氏の前掲論文を参照した。調査方法としては、部立毎に表を作成し、重複する季題があるか調査した。全く同じ文言が掲載されていなくても、『角川俳句大歳時記』[37]において関連季語として掲載されていた場合には、重複していると見做した。また、以下に調査結果表を掲載するが、表中で、句数は『題詠俳諧明治千五百題』の句数を、(1)は『俳諧明治七百題』を、(2)は『明治新五百題』を、(3)は『明治新々五百題』をそれぞれ示している。

【表 4】歳旦・春の部

題	句数	(1)	(2)	(3)
梅 野梅	66 6	梅(歳旦之部)	梅 白梅(春之部)	梅 白梅(春之部)
花 花明り 花春	56 3 5	花 花雲 花ノ春(歳旦之部)	花 花の雲 花の陰 花の奥(春之部)	花 花の雲 花陰 花山 花奥(春之部)

[37] 以下の 5 冊を参照。
角川学芸出版．角川俳句大歳時記　新年．角川学芸出版，2006，625p.
角川学芸出版．角川俳句大歳時記　春．角川学芸出版，2006，686p.
角川学芸出版．角川俳句大歳時記　夏．角川学芸出版，2006，755p.
角川学芸出版．角川俳句大歳時記　秋．角川学芸出版，2006，719p.
角川学芸出版．角川俳句大歳時記　冬．角川学芸出版，2006，643ｐ.

朗詠	36		春朗詠(春之部)	春朗詠(春之部)
霞	33	霞(歳旦之部)	霞 八重霞 朝霞 遠霞 夕霞(春之部)	霞 八重霞 朝霞 遠霞 夕霞(春之部)
柳	31	柳 青柳(歳旦之部)	柳(春之部)	柳(春之部)
鶯	25	鶯(歳旦之部)	鶯(春之部)	鶯(春之部)
初日	20	初日 初日影(歳旦之部)	初日 初日影(歳旦之部)	初日 初日影(歳旦之部)
春雨	20	春雨(歳旦之部)	春雨(春之部)	春の雨(春之部)
胡蝶	18	蝶(歳旦之部)	蝶(春之部)	蝶(春之部)
月梅	17		月と梅(春之部)	月と梅(春之部)
春風	16	春風(歳旦之部)	春風(春之部)	春風(春之部)
雉子	15	雉子(歳旦之部)	雉子(春之部)	雉子(春之部)
櫻	14	櫻(歳旦之部)	櫻 夕櫻 朝櫻 庭櫻 姥櫻 緋櫻 若木櫻(春之部)	櫻 夕櫻 朝櫻(春之部)
春雑	13			
朧月	13	朧月(歳旦之部)	朧月(春之部)	朧月(春之部)
初烏	12	初鴉(歳旦之部)	初鴉(歳旦之部)	初鴉(歳旦之部)
蛙	11	蛙(歳旦之部)	蛙 初蛙(春之部)	蛙 初蛙(春之部)
初空	10	初空(歳旦之部)	初空(歳旦之部)	初空(歳旦之部)
潮干	10	汐干(歳旦之部)	汐干(春之部)	汐干(春之部)
一日	9	一日(歳旦之部)	一日(歳旦之部)	一日(歳旦之部)
春水	9	春水(歳旦之部)	春水(春之部)	春の水(春之部)
花見	9		花見(春之部)	花見(春之部)
海苔	8	海苔(歳旦之部)	海苔(歳旦之部)	海苔(歳旦之部)
初霞	8	初霞(歳旦之部)	初霞(春之部)	初霞(春之部)
桃花	8	桃(歳旦之部)	桃 白桃(春之部)	

若水	7	若水 井開(歳旦之部)	若水 井開(歳旦之部)	若水 井開(歳旦之部)
雑煮	7	雑煮(歳旦之部)	雑煮(歳旦之部)	雑煮(歳旦之部)
若菜	7	若菜(歳旦之部)	若菜(歳旦之部) 礒菜(春之部)	若菜(歳旦之部)
薺	7	薺(歳旦之部)	薺(歳旦之部)	薺(歳旦之部)
東雲	7			
沫雪	7	沫雪(歳旦之部)	泡雪(春之部)	沫雪(春之部)
猫恋	7	猫恋(歳旦之部)	猫戀 うかれ猫(春之部)	猫恋 浮猫 春猫(春之部)
雲雀	7	雲雀(歳旦之部)	雲雀(春之部)	雲雀(春之部)
月花	7			
山吹	7	山吹(歳旦之部)	山吹(春之部)	山吹(春之部)
菫	7	菫(歳旦之部)	菫(春之部)	菫(春之部)
白魚	7	白魚(歳旦之部)	白魚(春之部)	白魚(春之部)
歳旦	6	日ノ始 元日(歳旦之部)	歳旦 日の始(歳旦之部)	日の始(歳旦之部)
一月	6	一月(歳旦之部)	一月(歳旦之部)	一月(歳旦之部)
初鶏	6	初鶏(歳旦之部)	初鶏(歳旦之部)	初鶏(歳旦之部)
睦月	6	睦月(歳旦之部)	睦月(春之部)	睦月(春之部)
七種	6	七種 薺粥(歳旦之部)	七種(歳旦之部)	七種(歳旦之部)
余寒	6	餘寒(歳旦之部)	余寒(春之部)	余寒(春之部)
春雪	6	春雪(歳旦之部)	春雪(春之部)	春の雪(春之部)
初櫻	6	初櫻(歳旦之部)	初櫻(春之部)	初櫻(春之部)
帰雁	6	帰雁(歳旦之部)	帰雁 雁名残(春之部)	帰雁(春之部)
遅櫻	6	遅櫻(歳旦之部)	遅櫻(春之部)	遅櫻(春之部)
菜花	6	菜ノ花(歳旦之部)	菜花(春之部)	菜花(春之部)
年立	5		年立(歳旦之部)	年立(歳旦之部)
今年	5	今年(歳旦之部)	今年(歳旦之部)	今年(歳旦之部)
門松 飾竹	5 2	門松(歳旦之部)	門松 松餝(歳旦之部)	門松 松餝(歳旦之部)
萬歳	5	万歳(歳旦之部)	万歳(歳旦之部)	萬歳(歳旦之部)
手毬	5	手鞠(歳旦之部)	手毬(歳旦之部)	手毬(歳旦之部)
福寿草	5	福寿草(歳旦之部)	福寿草(歳旦之部)	福寿草(歳旦之部)
人日	5	人日(歳旦之部)	人日(歳旦之部)	人日(歳旦之部)

長閑	5	長閑(歳旦之部)	長閑(春之部)	長閑(春之部)
水温	5	水温(歳旦之部)	水温(春之部)	水温(春之部)
春月	5	春月(歳旦之部)	春月(春之部)	春月(春之部)
山笑	5	山笑(歳旦之部)	山笑(春之部)	山笑(春之部)
若草	5	若草(歳旦之部)	若草(春之部)	若草 初草(春之部)
苗代	5	苗代(歳旦之部)	苗代(春之部)	苗代(春之部)
雀子	5	雀ノ子 親雀(歳旦之部)	雀子 親雀(春之部)	雀子 親雀(春之部)
別霜	5	別霜(歳旦之部)	別霜(春之部)	
茶摘	5	茶摘(歳旦之部)	茶摘(春之部)	茶摘(春之部)
四方拝	4	四方拝(歳旦之部)	四方拝(歳旦之部)	四方拝(歳旦之部)
初明り	4		初明り(歳旦之部)	初明り(歳旦之部)
吉方	4	吉方(歳旦之部)	吉方(歳旦之部)	吉方(歳旦之部)
蓬莱	4	蓬莱(歳旦之部)	蓬莱(歳旦之部)	蓬莱(歳旦之部)
傀儡師	4	傀儡師(歳旦之部)	傀儡師(歳旦之部)	傀儡師(歳旦之部)
年玉	4	年玉(歳旦之部)	年玉(歳旦之部)	年玉(歳旦之部)
初暦	4	初暦(歳旦之部)	初暦(歳旦之部)	初暦(歳旦之部)
初荷	4	初荷(歳旦之部)	初荷(歳旦之部)	初荷(歳旦之部)
雪解	4	雪解(歳旦之部)	雪解(春之部)	雪解(春之部)
陽炎	4	陽炎(歳旦之部)	陽炎(春之部)	陽炎(春之部)
佐保姫	4	佐保姫(歳旦之部)	佐保姫(春之部)	佐保姫(春之部)
出代	4	出代(歳旦之部)	出代(春之部)	出代(春之部)
蕗の薹	4	蕗ノ薹(歳旦之部)	蕗の薹 薹のしうとめ(春之部)	蕗の薹(春之部)
獨活	4		獨活(春之部)	獨活(春之部)
百千鳥	4	百千鳥(歳旦之部)	百千鳥(春之部)	百千鳥(春之部)
鳥囀	4	鳥囀(歳旦之部)	囀(春之部)	囀(春之部)
雛祭	4	雛(歳旦之部)	雛(春之部)	雛(春之部)
蕨	4	蕨(歳旦之部)	蕨 早蕨(春之部)	蕨 早蕨(春之部)
蘆の角	4	蘆ノ角(歳旦之部)	芦角(春之部)	芦角(春之部)
紅梅	4	紅梅(歳旦之部)	紅梅(春之部)	紅梅(春之部)
花御堂	4		花御堂(春之部)	花御堂(春之部)
炉塞	4	炉塞(歳旦之部)	炉塞 炉名残(春之部)	炉塞(春之部)

花吹雪	4	花吹雪(歳旦之部)	花吹雪 散櫻(春之部)	花吹雪 散花 花瀧 散櫻(春之部)
躑躅	4		躑躅(春之部)	躑躅(春之部)
藤花	4	藤(歳旦之部)	藤 白藤(春之部)	藤(春之部)
鳥入雲	4	鳥雲ニ入(歳旦之部)	鳥雲入(春之部)	雲入鳥(春之部)
初手水	3		初手水(歳旦之部)	初手水(歳旦之部)
鏡餅	3	鏡餅(歳旦之部)	鏡餅(歳旦之部)	鏡餅(歳旦之部)
屠蘇	3	屠蘇(歳旦之部)	屠蘇(歳旦之部)	屠蘇(歳旦之部)
年男	3	年男(歳旦之部)	年男(歳旦之部)	年男(歳旦之部)
飾	3	餝(歳旦之部)		
飾臼	3		餝臼(歳旦之部)	飾臼(歳旦之部)
御慶	3	御慶(歳旦之部)	御慶(歳旦之部)	御慶(歳旦之部)
福曳	3		福引(歳旦之部)	福引(歳旦之部)
御降	3	御降(歳旦之部)	御降(歳旦之部)	御降(歳旦之部)
謡初	3		謡初(歳旦之部)	謡初(歳旦之部)
常陸帯	3	常陸帯(歳旦之部)	常陸帯(春之部)	常陸帯(春之部)
懸想文	3	掛想文(歳旦之部)	懸想文(歳旦之部)	懸想文(歳旦之部)
爆竹	3	爆竹(歳旦之部)	爆竹 佐義長(歳旦之部)	爆竹 佐義長(歳旦之部)
藪入	3	養父入(歳旦之部)	養父入(歳旦之部)	養父入(歳旦之部)
氷豆腐	3	氷豆腐(秋之部)		
佛の座	3	佛ノ座(歳旦之部)	佛座(歳旦之部)	佛の座(歳旦之部)
節分	3		節分(春之部)	節分(春之部)
立春	3	立春(歳旦之部)	立春(春之部)	立春(春之部)
風光	3	風光(歳旦之部)	風光(春之部)	風光(春之部)
氷浮	3	氷浮(歳旦之部)		
麗	3	麗(歳旦之部)	麗(春之部)	麗(春之部)
暖	3	暖(歳旦之部)	暖(春之部)	暖(春之部)
鐘霞	3		鐘霞(春之部)	鐘霞(春之部)
糸遊	3		糸遊(春之部)	糸遊(春之部)
春宵	3		春宵(春之部)	春宵(春之部)
春川	3	春川(歳旦之部)	春川(春之部)	春川(春之部)
涅槃	3	涅槃会(歳旦之部)	涅槃(春之部)	涅槃(春之部)
木芽	3	木ノ芽(歳旦之部)	木芽 桐若芽(春之部)	木の芽(春之部)

土筆	3	土筆(歳旦之部)	土筆(春之部)	土筆(春之部)
椿	3	椿(歳旦之部)	椿 落椿 白椿(春之部)	椿 落椿 白椿(春之部)
松の花	3	松ノ花(歳旦之部)		松花(春之部)
芹	3	芹(歳旦之部)	芹(歳旦之部)	芹(歳旦之部)
春の鳥	3	春鳥(歳旦之部)	春鳥(春之部)	春鳥(春之部)
獺祭魚	3	獺祭魚(歳旦之部)	獺祭魚(春之部)	獺祭魚(春之部)
駒鳥	3		駒鳥(春之部)	駒鳥(春之部)
人丸忌	3		人丸忌(春之部)	人丸忌(春之部)※1
草餅	3	草餅(歳旦之部)	草餅(春之部)	草餅(春之部)
鳳巾	3		鳳巾(歳旦之部)	鳳巾(歳旦之部)
種蒔	3	種蒔 種卸(歳旦之部)	種蒔 種卸(春之部)	種卸(春之部)
畑打	3	畑打(歳旦之部)	畑打(春之部)	畑打(春之部)
乙鳥	3	燕(歳旦之部)	乙鳥 初燕(春之部)	燕 初燕(春之部)
引鶴	3		引鶴(春之部)	引鶴(春之部)
亀鳴	3			
すゝ子さす	3	鷹継尾(歳旦之部)	継尾鷹(春之部)	継尾鷹(春之部)
弥生	3	弥生(歳旦之部)	彌生(春之部)	彌生(春之部)
佛生會	3	佛生会(歳旦之部)	佛生會 灌佛(春之部)	佛生會 灌佛(春之部)
鶏合	3		鶏合(春之部)	鶏合(春之部)
梨子花	3	梨ノ花(歳旦之部)	梨子花(春之部)	梨花(春之部)
さくら鯛	3	櫻鯛(歳旦之部)	櫻鯛(春之部)	櫻鯛(春之部)
さくら貝	3	櫻貝(歳旦之部)		
蚕	3	桑子(歳旦之部)	蚕(春之部)	蚕(春之部、夏之部)
夏ちかし	3	夏近 夏隣(歳旦之部)	夏隣(春之部)	夏隣(春之部)
行春	3	行春(歳旦之部)	行春 春名残(春之部)	行春(春之部)
春日	3	春日(歳旦之部)	春日(春之部)	春日(春之部)
初午	3	初午(歳旦之部)	初午(春之部)	初午(春之部)※2
蒲公英	3	蒲公英(歳旦之部)	蒲公英(春之部)	蒲公英(春之部)
二日	2	二日(歳旦之部)	二日(歳旦之部)	二日(歳旦之部)

新年	2	新年 年ノ花 年始 立年(歳旦之部)	新年 年の花 新玉年 年始(歳旦之部)	新年 年の花 新玉年(歳旦之部)
井囲	2			
歯固	2	歯固(歳旦之部)	歯固(歳旦之部)	歯固(歳旦之部)
吉方棚	2		吉方棚(歳旦之部)	吉方棚(歳旦之部)
橙	2		橙(歳旦之部)	橙(歳旦之部)
楪	2		楪葉(歳旦之部)	
芋頭	2		芋頭(歳旦之部)	芋の頭(歳旦之部)
庭竈	2	庭竈(歳旦之部)	庭竈(歳旦之部)	庭竈(歳旦之部)
太箸	2	太箸(歳旦之部)	太箸(歳旦之部)	太箸(歳旦之部)
勝木箸	2			
穂長	2		歯朶 うら白(歳旦之部)	歯朶 裏白(歳旦之部)
山作	2			
小殿原	2	小殿原 田作(歳旦之部)	小殿原 田作(歳旦之部)	小殿原 田作(歳旦之部)
数ノ子	2		數の子(歳旦之部)	數の子(歳旦之部)
掛鯛	2	掛鯛(歳旦之部)	掛鯛(歳旦之部)	掛鯛(歳旦之部)
猿廻し	2	狙公(歳旦之部)	猿引(歳旦之部)	猿引(歳旦之部)
年礼	2	年礼(歳旦之部)		
着衣初	2	着衣初(歳旦之部)	着衣始(歳旦之部)	着衣始(歳旦之部)
掃初	2		掃始(歳旦之部)	掃始(歳旦之部)
稲積	2	稲積(歳旦之部)	寝積 寝揚(歳旦之部)	寝積 寝揚(歳旦之部)
三个日	2	三ヶ日(歳旦之部)	三ヶ日(歳旦之部)	
松の内	2	松ノ内(歳旦之部)	松の内(歳旦之部)	松の内(歳旦之部)
若餅	2			
弓始	2		弓始(歳旦之部)	弓始(歳旦之部)
船乗初	2		舟乗始(歳旦之部)	舟乗始(歳旦之部)
初売	2	初売(歳旦之部)	初売(歳旦之部)	初売(歳旦之部)
初夢	2	初夢(歳旦之部)	初夢(歳旦之部)	初夢(歳旦之部)
書初	2	書初 吉書 筆始(歳旦之部)	吉書始(歳旦之部)	吉書始(歳旦之部)
蔵開	2		蔵開(歳旦之部)	蔵開(歳旦之部)
水祝	2	水祝(歳旦之部)	水祝(歳旦之部)※3	

嫁が君	2	嫁ヶ君(歳旦之部)	嫁ヶ君(歳旦之部)	嫁ヶ君(歳旦之部)
元始祭	2		元始祭(歳旦之部)	元始祭(歳旦之部)
初子日 小松曳	2 3	小松曳(歳旦之部)	子日 小松引(歳旦之部)	子の日 小松引(歳旦之部)
寒入	2	寒ノ入(歳旦之部)	寒入(冬之部)	寒入(冬之部)
畚卸	2	畚卸(歳旦之部)	畚卸(歳旦之部)	畚卸(歳旦之部)
耕初	2			
粥杖	2		粥杖(歳旦之部)※4	粥杖(歳旦之部)※4
削かけ	2	削掛(歳旦之部)	削掛(歳旦之部)	削掛(歳旦之部)
寒梅	2	寒梅(歳旦之部)	寒梅(冬之部)	
寒菊	2	寒菊(秋之部)	寒菊(冬之部)	寒菊(冬之部)
寒椿	2	寒椿(歳旦之部)		
春待	2		春待(歳旦之部)	春待(歳旦之部)
二月	2	二月(歳旦之部)	二月(春之部)	二月(春之部)
厄拂	2		厄拂(冬之部)	厄拂(冬之部)
春寒	2	春寒(歳旦之部)	春寒(春之部)	春寒(春之部)
冴返る	2	冴返(歳旦之部)	冴返る(春之部)	冴返(春之部)
残雪	2	残雪(歳旦之部)	残雪(春之部)	残雪(春之部)
凍解	2		凍解(春之部)	凍解(春之部)
長日	2	永日(歳旦之部)	日永(春之部)	日永(春之部)
暮遅	2	暮遅(歳旦之部)	暮遅(春之部)	暮遅(春之部)
春山	2	春山(歳旦之部)	春山(春之部)	春山(春之部)
春海	2	春海(歳旦之部)	春海(春之部)	春海(春之部)
春人	2			
祈年祭	2			
紀元節	2		紀元節(春之部)	紀元節(春之部)
薪能	2	薪能(歳旦之部)	薪能(春之部)	薪能(春之部)
二月堂	2			
西行忌	2		西行忌(春之部)	西行忌(春之部)
二日灸	2	二日灸(歳旦之部)	二日灸(春之部)	二日灸(春之部)
青饅	2	青饅(歳旦之部)	青饅(歳旦之部、春之部)	青饅(歳旦之部)
鮒鱠	2		鮒鱠(春之部)	鮒鱠(春之部)
蜆	2	蜆(歳旦之部)	蜆(春之部)	蜆(春之部)
鹿尾菜	2			
若芝	2			若芝(春之部)
草萌	2	下萌(歳旦之部)	草萌(春之部)	草萌(春之部)

虎杖	2		乕杖(春之部) さいたつま(春之部)※5	乕杖(春之部) さいたつま(春之部) ※5
梅柳	2	梅柳(歳旦之部)	梅柳(春之部)	
梅椿	2			
鳥巣	2	鳥ノ巣(歳旦之部)	鳥巣(春之部)	巣鳥(春之部)
鷽	2	鷽(歳旦之部)	鷽(春之部)	
彼岸	2	彼岸(歳旦之部)	彼岸(春之部)	彼岸(春之部)
初雷	2	初雷(歳旦之部)	初雷(春之部)	初雷(春之部)
初霓	2	初虹(歳旦之部)	初虹(春之部)	初虹(春之部)
御身拭	2		御身拭(春之部)	御身拭(春之部)
大根花	2			
野山焼	2			
初花	2	初花(歳旦之部)	初花(春之部)	初花(春之部)
接木	2	接穂(歳旦之部)	接木(春之部)	接木(春之部)
連翹	2	連翹(歳旦之部)	連翹(春之部)	
茄子植る	2			
芋植る	2			
菊根分	2	菊根分(歳旦之部)		
落角	2		落角(春之部)	落角(春之部)
田螺	2	田螺(歳旦之部)	田螺(春之部)	田螺(春之部)
鷹化成鳩	2			鷹化成鳩(春之部) ※6
竹秋	2	竹秋(歳旦之部)	竹秋(春之部)	竹秋(春之部)
踏青	2			踏青(春之部)
山櫻	2	山櫻(歳旦之部)	山櫻(春之部)	山櫻(春之部)
海棠	2	海棠(歳旦之部)	海棠(春之部)	海棠(春之部)
石楠花	2		石楠花(春之部)	石楠花(春之部)
櫻草	2	櫻草(歳旦之部)	櫻草(春之部)	櫻草(春之部)
五形	2		五形(歳旦之部)	五形(歳旦之部)
麦鶉	2	麦鶉(歳旦之部)		麦鶉(春之部)
若鮎	2	若鮎(歳旦之部)	若鮎(春之部)	若鮎(春之部)
早梅	1	早咲梅(歳旦之部)		

※1　論文中では人九忌となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると人丸忌とある。

※2　論文中では初牛となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると初午とある。

※3　論文中では水税となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると水祝とある。

※4　論文中では粥枝となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると粥杖とある。

※5　論文中では乕枝、さいさつまとなっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認するとそれぞれ乕杖、さいたつまとなっている。
※6　論文中では鷹化成鶉となっているが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると鷹化成鳩とある。

【表 5】夏の部

題	句数	(1)	(2)	(3)
夏雑	62			
時鳥	43	時鳥		
涼風	40	涼風		
若葉	25	若葉	若葉 藤若葉	若葉
清水	21	清水 苔清水	清水 石清水 苔清水	清水
蛍	19	蛍	螢 初螢	蛍 初蛍
蓮	16	蓮	蓮	蓮
杜若	13	杜若	杜若	杜若
蝉	13	蝉	蟬 初蟬	蝉
蚊遣	12	蚊遣火	蚊遣	蚊遣
皐月雨	12	早月雨		皐月雨
木下闇	11	木下闇	木下闇	木下闇
水雞	11	水鶏	水鶏	水鶏
納涼	11	納涼	納涼 舟納涼 夕納涼	納涼
袷 初袷	10 7	袷 綿抜	袷 初袷 綿貫	袷 初袷 綿貫
卯の花	10	卯の花	夘の花	卯の花
田植	10	田植	田植	田植
閑古鳥	9		閑呼鳥	閑呼鳥
麦秋	8	麦秋	麥秋	麦秋
明易夜	8	明易夜	明易夜	明易夜
新茶	8	新茶	新茶	新茶

鮓	8	鮓	早鮨 一夜鮨	早鮨 一夜ずし 雀鮨
蚊帳	8	蚊帳	蚊帳 蚊帳初	蚊帳 蚊帳初
葉櫻	8	葉櫻	葉櫻	葉櫻
牡丹	8	牡丹	牡丹 白牡丹	牡丹 白牡丹
夏月	8	夏ノ月	夏月	夏月
茂り	7	茂り	茂	茂
百合花	7	百合	百合 鹿子百合 鬼百合 姫百合	百合 鬼百合 姫百合
暑	7	暑	暑	暑
雲の峰	7	雲峰	雲峰	雲峰
短夜	6	短夜	短夜	短夜
更衣	6	更衣	更衣	
団扇	6	団扇	團扇	團扇
日傘	6	日傘	日傘	日傘
筍	6		笋	笋
老鶯	6	老鶯	老鶯	老鶯
蝸牛	6	蝸牛	蝸牛	蝸牛
田植唄	6	田植唄		
早苗	6		早苗 玉苗 余苗	早苗
青梅	6	青梅	青梅	青梅
午睡	6	午睡	午睡	午睡
菖蒲	5		菖蒲 あやめ	菖蒲
夏書	5	夏書	夏書	夏書
扇	5	扇	扇	扇
夏木立	5	夏木立	夏木立	夏木立
茨花	5		茨の花	茨の花
枝蛙	5	枝蛙	枝蛙	枝蛙
初鰹 松魚	5 5	初鰹 松魚	初鰹	初勝魚

蚊 蚊柱	5 4	蚊 蚊柱	蚊 蚊柱	蚊 蚊柱
皐月晴	5	皐月晴		早月晴
祇園會	5	祇園会	祇園會 舟鉾 月鉾	祇園會
御祓	5	御祓	御祓※7	御祓※7
帷子	5	帷子	帷子	帷子
茄子	5	初茄子	初茄子	初茄子
心太	5	心太	心太	心太
夕顔	5	夕顔	夕顔	夕顔
田草取	5	田草取	田艸取 二番艸	田草取
竹酔日	4	竹植	竹植	竹植
筑摩祭	4	筑摩祭(歳旦之部)	鍋祭(春之部)	鍋祭(春之部)
新樹	4	新樹	新樹	新樹
葉柳	4		葉柳	葉柳
若楓	4	若楓	若楓	若楓
柚花	4	花柚	花柚	花柚※8
罌粟花	4	罌粟花	芥子花 白芥子	芥子花 白芥子
行々子 葭原雀	4 2	行々子 葭切	行々子 葭雀	行行子
薄羽折	4	薄羽織	夏羽織	夏羽織
藻花	4		藻花	藻の花
鹿子	4	鹿子	鹿子	鹿子
七夕	4	七夕 星祭	七夕 星祭	七夕 星祭
夕立	4	夕立	夕立	夕立
月涼	4		月涼	月涼
風薫	4	風薫	風薫	風薫
葛水	4	葛水	葛水	葛水
沖鱠	4		沖鱠 背越鱠	沖鱠
川骨	4	河骨	河骨	河骨
簸子花	4	皷子花	晝顔	昼顔
卯花月	3		卯月	卯月
首夏	3	初夏		

薬降	3			
粽	3	粽	粽	粽
葦花	3			
芍薬	3	芍薬	芍薬	芍薬
鴬附子	3	鴬附子		
飛蟻	3	飛蟻	飛蟻	飛蟻
鵜	3	鵜		
蛭	3	蛭	蛭	蛭
青鷺	3	青鷺	青鷺	青鷺
氷室	3	氷室	氷室守	氷室
富士詣	3		不二詣	不二詣
鉾	3		鉾	
辻の花	3	辻ヶ花	辻ヶ花	辻ヶ花
若竹 今年竹	3 11	若竹 今年竹	若竹 今年竹	若竹 今年竹
栗花	3	栗ノ花	栗の花	栗花
山梔子花	3	山梔花		
紫陽花	3	紫陽花	紫陽花	紫陽花
夏菊	3	夏菊	夏菊	夏菊
苔の花	3	苔ノ花	苔の花	苔の花
萍	3	萍	萍	浮草
浮巣	3	浮巣	浮巣	浮巣
水馬	3	水馬	水馬	水馬
炎天	3	炎天	炎天	炎天
貸小袖	3	貸小袖	貸小袖	貸小袖
青嵐	3	青嵐	青嵐	青嵐
雨乞	3	雨祈		雨乞
躍	3	踊	躍	躍
川狩	3		川狩	川狩
青簾	3	青簾	青簾	青簾
簟	3	簟	箪	箪
抱籠	3	竹婦人	抱籠 竹婦人 竹奴	竹婦人
汗	3	汗		汗
水肴	3			
一夜酒	3	一夜酒	一夜酒	一夜酒

打水	3	打水	打水	打水
夏座敷	3		夏坐敷	夏坐敷
毛虫	3	毛虫	毛虫	毛虫
夏朗詠	3			
端午	2		端午	端午
幟	2	幟	幟 初幟	初幟
菖蒲太刀	2		菖蒲太刀	
百草摘	2		薬日	
競馬	2	競馬	競馬	競馬
矢数	2	大矢数		大矢数
印地打	2		印地打	印地打
白重	2		白重	白重
柏餅	2	柏餅	柏餅	柏餅
梅漬	2	梅干	梅干	
紙帳	2	紙帳	紙帳	
余花	2			
椎若葉	2			
草茂る	2			
夏野	2	夏野	夏野	夏野
桐花	2	桐花	桐花	桐の花
蜜柑花	2			
椎の花	2		椎の花(夏之部)※9	椎の花(夏之部)※9
著莪	2		著莪	著莪
一八	2	一八	一八	一八
藺花	2		藺花	
玉巻芭蕉	2		玉巻芭蕉	玉巻芭蕉
青山椒	2	青山椒		青山椒
櫻の実	2	櫻実	實櫻	
根芋	2			
菽植る	2			
翡翠	2	翡翠	翡翠	翡翠
子子	2	子子	子子	子子
蚋	2		蚋	蚋
蝿	2	蝿	蠅	蠅
蝿叩	2			

絡線	2		蛬線(夏之部)とあり	蛬線(夏之部)とあり
蝙蝠 蚊食鳥	2 2	蝙蝠	蝙蝠	蝙蝠
六月	2	六月	六月	六月
皐月闇	2	早月闇		早月闇
梅雨	2	梅雨	梅雨	梅雨
黒はへ	2			黒はい(夏之部)とあり
夏氷	2	夏氷		夏氷
節折	2			
茅輪	2	茅ノ輪	茅の輪	茅輪
形代	2	形代 麻ノ葉流	形代 麻葉流	形代
川社	2			
嘉定	2		嘉定	嘉定
躯狩	2	躯狩		
照射 火串	2 2	照射 火串	照射 火串	火串
単物	2	単物	單物	単物
木平	2			
南天花	2		南天花	
瞿麦	2	撫子	撫子	撫子
石菖	2	石菖	石菖	石菖
橘	2			
つり葱	2	釣葱	釣葱	釣葱
鉄銭花	2			
花菖蒲	2		花菖蒲	花菖蒲
藻刈	2		藻刈	藻刈
李	2			
瓜	2	瓜	瓜	
通し鴨	2	通シ鴨	通鴨	通鴨
七月	2			
日盛	2	日盛	日盛	日盛
願糸	2		願糸	
硯洗	2	硯洗	硯洗	硯洗
梶葉	2		梶葉	
銀河	2	天ノ川	天ノ川	天の川

青東風	2		青東風	
土用	2	土用	土用	土用
曝井	2	瀑井	晒井	晒井
盆	2		盆	盆
魂祭	2	魂棚	霊祭 霊棚 棚經	魂祭 魂棚
送火	2	送火	送火	送火
灯籠	2	燈籠	燈籠	燈籠
施餓鬼	2			
衝突入	2		衝突入	衝突入
土用干	2	土用干 虫干	虫干	
盆月	2	盆の月	盆月	盆月
夏痩	2	夏痩	夏痩	夏痩
水飯	2	水飯	水飯	水飯
冷汁	2		冷汁	冷汁
洗鯉	2	洗鯉	洗鯉	洗鯉
冷瓜	2			冷し瓜
腐草作蛍	2			
百日紅	2	百日紅	百日紅	百日紅
澤瀉	2		澤潟	澤潟
凌霄	2	凌霄花		
錦花	2			
青田	2	青田	青田	青田
麻刈	2	麻苅	麻刈	
練雲雀	2	練雲雀	練雲雀	練雲雀
火取虫	2		火取虫	火取虫
秋近 秋隣	2 2	秋近 秋隣	秋近 秋隣	秋隣
生身玉	1	生身魂	生身魂	生身魂
蕗	1			

※7　論文中では御抜となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると御祓とある。

※8　論文中では花抽となっているが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると花柚とある。

※9　論文中では推の花となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると椎の花とある。

【表 6】秋の部

題	句数	(1)	(2)	(3)
虫	30	虫	虫	虫
露	22	露	露	露
秋風	22	秋風	秋風	秋風
月 秋月	22 13	月 月秋 秋ノ月	月 月夜 秋月	月 月夜 秋乃月
菊花 白菊	20 8	菊	菊 白菊 黄菊	菊 白菊
雁	19	雁 初雁	雁 初雁 天津鳥	雁 初雁 天津鳥
萩花	18	萩	萩	萩
稲妻	16	稲妻	稲妻 稲の殿	稲妻
名月 今日月 月今宵	13 5 3	名月 満月 望月 今日月	今日の月 月今宵	名月 今日月
砧	13	碪	碪 小夜碪	碪 小夜碪
立秋 秋来る 今朝秋	12 2 5	立秋 今朝秋	立秋 今朝秋	立秋 今朝秋
草花	10	草ノ花	草花	草花
稲 稲穂	10 2	稲 稲筵 稲ノ秋 稲穂	稲 稲莚	稲 稲莚 稲秋
鹿	10	鹿	鹿	鹿
紅葉	10	紅葉	紅葉	紅葉
花野	9	花野	花野	花野
初月	9	初月夜	初月	初月夜
月見	9	月見 月ノ友	月見	月見
朝顔	8		朝顔	朝顔

女郎花	8	女郎花	女郎花	女郎花
達磨忌	8	達磨忌	達磨忌(冬之部)	達磨忌(冬之部)
秋雑	8			
秋水	7	秋水	秋水	秋水
桐一葉	7	桐一葉	桐一葉	桐一葉
薄	7	薄	薄	薄
落鮎 渋鮎 鮎	7 2 1	渋鮎	澁鮎	渋鮎
紅葉且散	7	散紅葉	散紅葉(冬之部)	散紅葉(冬之部)
朗詠	7		朗詠	
初秋	6	初秋	初秋	初秋
残暑 秋暑	6 4	残暑	残暑 秋暑	残暑
角觝	6	相撲	角觝	角觝
稲花	6	稲ノ花	稲花	稲花
蚕 蟋蟀	6 2	蟋蟀	蟋蟀	蟋蟀
蜻蛉	6	蜻蛉	蜻蛉	蜻蛉
月雨	6	月ノ雨	雨月	雨月
落水	6	落水	落し水	落水
夜寒	6	夜寒	夜寒	夜寒
神迎	6	神迎	神迎(冬之部)	神迎(冬之部)
遺漏	6			
冷	5		冷	冷
秋夕	5	秋夕 秋暮	秋夕	秋夕
秋色	5		秋色	秋色
花火	5	花火	花火	花火
唐辛	5		唐辛子	
蜩	5	蜩	蜩	蜩
百舌鳥	5	鵙	百舌鳥	百舌鳥
既望	5	既望	既望	既望
竹春	5	竹春	竹春	竹春
新米	5	新米		
荻	5	荻		荻
蓮実	5	蓮実飛	蓮實	
鳥渡	5	渡鳥	渡鳥	渡鳥

長夜	5	長夜	長夜	長夜
後の月	5	後ノ月	後月	後月
神留守	5		神留守(冬之部)	神留守(冬之部)
十夜	5	十夜	十夜(冬之部)	十夜(冬之部)
夷講	5	夷講	夷講	夷講
行秋	5	行秋 秋ノ別 秋果	行秋	行秋
文月	4		文月	文月
霧	4	霧	霧	霧
秋日	4	秋ノ日	秋日	
放生會	4	放鳥	放生會 放鳥	放生會
案山子	4	案山子	案山子	案山子
鳴子 引板	4 2	鳴子	鳴子 引板	鳴子 引板
桔梗	4	桔梗花	桔梗	桔梗
梅嫌	4	梅嫌	梅嫌	梅嫌
木槿	4	木槿 蕣	木槿	木槿
芭蕉	4	芭蕉	芭蕉	芭蕉
鈴虫	4	鈴虫	鈴虫	鈴虫
秋の蝶	4	秋ノ蝶		
初嵐	4	初嵐	初嵐	初嵐
新酒 今年酒	4 2	新酒		今年酒
初紅葉	4	初紅葉	初紅葉	初紅葉
十月	4	十月	十月	十月
崩簗	4	崩簗	崩簗	崩簗
草紅葉	4	草紅葉	艸紅葉	草紅葉
蔦紅葉	4	蔦紅葉	蔦 蔦紅葉	蔦紅葉
野山錦	4	野山錦	野山錦	
色かえぬ松	4	色かえぬ松	色不改松	色不改松
八朔	3		八朔	八朔
秋初涼	3	新涼 秋涼	新涼	新涼

秋雲	3	秋ノ雲	秋雲	
秋聲	3	秋ノ聲	秋聲	秋聲
秋鐘	3	秋ノ鐘	秋鐘	秋鐘
龍田姫	3	龍田姫	龍田姫	龍田姫
駒曳 駒迎	3 2	駒迎	駒引 駒迎	駒引 駒迎
祭	3		祭(夏之部)	祭(夏之部)
後袷	3	後袷		後袷
扇置 団扇置 忘扇	2 3 2	扇置	置扇 捨團扇	置扇 捨團扇
散柳	3	散柳	散柳	散柳
柿	3	柿	柿	柿 渋柿
早稲	3		早稲	早稲
尾花 穂芒 花芒	3 2 2	尾花	尾花	尾花
秋草	3		秋艸	秋草
牛房引	3			
掛稲	3	稲垣	稲垣	掛稲
轡虫	3	轡虫	轡虫	轡虫
茶立虫	3	茶調虫	茶立虫	茶立虫
藻虫鳴	3		藻に鳴むし	藻に鳴虫
鴫 鴫突	3 2	鴫	鴫 鴫突	鴫 鴫突
鳩吹	3	鳩吹	鳩吹	鳩吹
鷹山別	3		鷹山別	
月雲	3	月ノ雲		
待宵	3		待宵	待宵
彼岸	3	彼岸		
登高	3			
御遷宮	3		御迁宮	御迁宮
初汐	3	初汐	初汐	初汐
芋掘	3		芋	芋
野分	3			
芙蓉	3	芙蓉	芙蓉	芙蓉
木犀	3	木犀花	木犀	木犀

刈萱	3			
紫苑	3	紫苑	紫苑	
天瓜	3			
菌	3	菌	菌 天狗茸	菌 天狗茸
茸狩	3	茸狩	茸狩	茸狩
松茸	3		松茸	松茸
小雀	3		小雀	小雀
稲雀	3	稲雀	稲雀	稲雀
鶸	3			
河鹿	3	河鹿鳴	鰍	鰍
そゝろ寒	3			
朝寒	3	朝寒	朝寒	朝寒
玄猪	3		玄猪	玄猪
神送	3		神送(冬之部)	神送(冬之部)
御命講	3	御命講	御命講(冬之部)	御命講(冬之部)
野菊	3	野菊	野菊	
柿紅葉	3	柿紅葉	柿紅葉	柿紅葉
霜踏鹿	3	霜踏鹿		
尾越鴨	3	尾越鴨		尾越鴨
田面	2	絵行器	繪行器	
秋空	2	秋ノ空	秋空	秋空
秋山	2	秋ノ山	秋山	秋山
秋海	2		秋の海	秋海
秋雨	2	秋雨	秋雨	秋雨
秋寂	2			
司召	2			
添水	2	添水	添水	添水
萩芒	2			
秋海棠	2	秋海棠	秋海棠	秋海棠
蘭	2	蘭	蘭	蘭
鼠尾草	2		鼠尾艸	鼠尾草
葡萄	2	葡萄		葡萄
新生姜	2			
梨子	2		梨	梨子
西瓜	2	西瓜	西瓜	西瓜
木綿取	2		木綿取	木綿取
新綿	2	新綿		

真葛	2			
鶏頭花	2	鶏頭花	鶏頭花	鶏頭
雁来紅	2	雁来紅	雁来紅	雁来紅
鳳仙花	2		鳳仙花	鳳仙花
鬼灯	2	鬼灯	鬼燈	鬼灯
絲瓜	2	糸瓜	糸瓜	糸瓜
走り穂	2			
岡穂	2			
落穂	2		落穂	落穂
鹿笛	2	鹿笛		
竈馬	2	竈馬	竈馬	竈馬
螽	2	螽	螽	螽
松虫	2		松むし	松虫
蟷螂	2	蟷螂	蟷螂	蟷螂
蚯蚓鳴	2	蚯蚓啼	蚯蚓鳴	蚯蚓鳴
兜虫	2		甲むし	甲虫
蓑虫鳴	2		蓑虫	簑虫
鶉	2		鶉	鶉
塒出鷹	2			鷹塒出
鯊釣	2		鯊釣	鯊釣
立待	2	立待月		
逆峰入	2			
二百十日	2	二百十日	二百十日	二百十日
後雛	2	後雛	後雛	
升市	2	住吉升市	升市 寶市	桝市
冷麦	2	冷麦	冷麥	
龍膽	2		龍膽	龍胆
藍の花	2		藍の花	藍の花
蕎麦花	2	蕎麦花	蕎麥花	蕎麦花
常山花	2			
柘榴	2		柘榴	柘榴
瓢	2	瓢	瓢	
初茸	2		初茸	
松露	2		松露	松露
燕帰	2		帰燕	燕帰
啄木鳥	2	啄木鳥	木啄鳥	木啄鳥
木兎	2	木兎	木兎(冬之部)	木兎(冬之部)

山雀	2	山雀	山雀	山雀
四十雀	2	四十雀	四十雀	四十雀
五十雀	2		五十雀	
菊頂	2			
目白	2	目白	目白	目白
初鮭	2	初鮭	初鮭	初鮭
太刀魚	2			
蛇入穴	2		蛇穴入	蛇穴入
神無月	2	無神月	神無月(冬之部)	神無月(冬之部)
露霜	2			
秋霜	2		秋霜	秋霜
露寒	2		露寒	露寒
露時雨	2	露時雨	露時雨	露時雨
肌寒	2	肌寒		肌寒
御取越	2		御取越(冬之部)	御取越(冬之部)
新蕎麦	2	新蕎麦	新蕎麥	新蕎麦
網代打	2			
着セ綿	2		菊の着せ綿	
残菊	2		残菊	残菊
梅紅葉	2		梅紅葉	梅紅葉
櫻紅葉	2	櫻紅葉		
敗芭蕉	2	破芭蕉	破芭蕉	破芭蕉
我母香	2	地楡	我木香	我木香
鴨上戸	2			
万年青	2			
栗	2	栗	栗	栗
椎	2			
團栗	2			
柚	2			柚子
蜜柚	2			
末枯	2		末枯	末枯
穂蘆	2			
雀化蛤	2		雀成蛤	雀化成蛤(春之部)
冬近し	2	冬近 冬隣	冬隣	冬隣
螽斯	1			
神旅	1		神旅(冬の部)	神旅(冬の部)

【表 7】冬の部

題	句数	(1)	(2)	(3)
雪 雪明り 雪空	38 4 3	雪(秋之部)	雪 六ツの花	雪 六の花
時雨 夕時雨 松風時雨 小夜時雨 川音しくれ	30 5 3 2 3	時雨	時雨	時雨
寒	17	寒サ	寒 寒内	寒
小春	15	小春 小六月	小春 小六月	小春 小六月
千鳥	15	千鳥	千鳥	千鳥
冬朗詠	15		冬朗詠	
初時雨	14		初時雨	初時雨
霜	12	霜	霜 霜花	霜 霜花
枯野	12	枯野	枯野	枯野
初雪	11	初雪	初雪	初雪
冬月 月氷	11 2	冬ノ月	冬月	冬月
返花	11			
翁忌	10		芭蕉忌	芭蕉忌
冬籠	10	冬籠	冬籠	冬籠
落葉	10	落葉	落葉	落葉
水鳥	10	水鳥	水鳥	水鳥
鴨	10	鴨	鴨	鴨
紙衣	8	紙子	紙衣	
山茶花	8	山茶花	山茶花	山茶花
炭	7	炭	炭 粉炭	炭
麦蒔	7	麦蒔	麥蒔	麦蒔
枯尾花	7	枯尾花	枯尾花	枯尾花
笹鳴	7	笹啼	鶯子鳴	鶯子鳴
鷹	7	鷹	鷹	

煤払	7	煤掃	煤掃	煤掃
初冬	6	初冬	初冬	初冬
雪の人	6			雪見
氷 薄氷	6 3	氷	氷	氷
榾火	6	榾	榾火	榾火
冬木立	6	冬木立	冬木立	冬木立
木葉	6	木ノ葉	木の葉	木の葉
河豚	6	河豚	河豚	河豚
年忘	6	年忘	年忘	年忘
初霜	5	初霜	初霜	初霜
夜雪	5			
冬枯	5		冬枯	冬枯
口切	5	茶口切	口切	口切
卵酒	5		鶏卵酒	鶏卵酒
頭巾	5		頭巾	頭巾
炬燵	5	炬燵	巨燵	巨燵
茶の花	5		茶の花	茶の花
冬梅	5		冬梅	
枇杷花	5	枇杷花	枇杷花	枇杷花
大根引	5	大根引	大根引	大根曳
枯柳	5		枯柳	枯柳
鴛鴦	5	鴛鴦	鴛鴦	鴛鴦
冬至	5	冬至	冬至	冬至
掛乞	5	掛乞	掛乞	掛乞
子燈心	4			子灯心
風呂吹	4	風呂吹	風呂吹	風呂吹大根
炉開	4	炉開	炉開	炉開
火桶	4	火桶	火桶	火桶
石蕗花	4	石蕗花	石蕗花	石蕗花
水仙	4	水仙	水仙	水仙
枯蘆	4	枯芦	枯芦	枯芦
冬の蝿	4	冬蝿	冬蝿	冬蠅
鉢叩	4	鉢敲	鉢叩	鉢叩
寒念仏	4	寒念仏(歳旦之部)	寒念佛	寒念佛
歳暮	4	年ノ暮		歳暮
行年	4	年ノ波	行年 年浪	行年 年の波

霙	3	霙	霙	霙
霰	3	霰	霰 玉霰	
鐘氷	3	鐘冴	鐘氷	
神楽	3		神樂 庭燎	神楽
夜輿引	3	夜輿引	夜興引	夜興引
蒲団	3		蒲団	蒲団
干菜	3	干菜	干菜	干菜
圍爐裏	3		圍炉裏	圍炉裏
網代	3	網代	網代守	網代守
橇	3	橇	橇	橇
冬櫻	3			
枯草	3	枯草	枯艸	
温鳥	3	暖鳥	暖鳥	暖鳥 鷹狩 鳥叫
浮寝鳥	3	浮寝鳥	浮寝鳥	浮寝
師走	3	師走	師走	師走
寒聲	3	寒聲(歳旦之部)	寒聲	寒声
餅搗	3	餅搗	餅搗	
年名残 年尾	3 2		年の暮 年の尾	年暮
大年	3	大年	大年	大年
年惜む	3		年惜	年惜
除夜	3	除夜 年ノ夜	除夜	除夜
大晦日	3	大晦日	大三十日	大三十
霜月	2	霜月		
吹雪	2	雪吹	雪吹	雪吹
雪丸	2		雪丸け 雪達磨	雪丸け 雪達磨
雪佛	2		雪佛	雪佛
初氷	2	初氷	初氷	初氷
氷柱	2	氷柱	氷柱 垂氷	氷柱
冴	2		冴る夜	冴 冴る夜

冬され	2			
冬日	2		冬日	冬日
冬空	2			
冬山	2	冬ノ山	冬山	冬山
冬野	2		冬野	冬野
冬里	2			
冬田	2	冬田	冬田	
山眠	2	山眠	山眠	山眠
寒雨	2	寒ノ雨(歳旦の部)	寒雨	寒雨
酉の市	2	酉ノ市		
髪置	2		髪置	髪置
被初	2			
顔見せ	2		顔見世	顔見世
暦売	2			暦賣
胼	2	胼	胼	胼
納豆	2	納豆	納豆	納豆
薬喰	2	薬喰	藥喰	藥喰
衾	2			衾
切干	2		切干	切干
置炬燵	2		置巨燵	
火鉢	2	火鉢	火鉢	火鉢
埋火	2	埋火	埋火	埋火
柴漬	2		柴漬	柴漬
冬構	2		冬構	冬構
雪車	2	雪車	雪車	雪車
冬牡丹	2	冬牡丹	冬牡丹	
八手花	2		八ツ手花	八ツ手
冬椿	2		冬椿	冬椿
榧花	2			
葱	2	葱	葱	葱
枯薄	2			枯芒※10
枯荻	2		枯荻	
枯芭蕉	2	枯芭蕉		
名木散	2	名ノ木散		名木散(秋之部)
鷦鷯	2	鷦鷯	鷦鷯	鷦鷯
寒苦鳥	2	寒苦鳥	寒苦鳥	寒苦鳥
冬の鳥	2		冬鳥 鳥	冬鳥

生海鼠	2	生海鼠	生海鼠	生海鼠
蛎	2		牡蛎	牡蛎
大祓	2			
和布刈	2	和布刈		
事始	2	事始	事始	事始
衣配	2	衣配	衣配	衣配り
節季候	2		節季候	節季候
寒垢離	2		寒垢離	
年木	2	年木	年木	年木
年市	2	年ノ市	年市	年の市
米洗	2	米洗		
門松建	2		松餝(歳旦之部)	松餝(歳旦之部)
札納	2			札納
年の坂	2	年ノ坂	年の坂	年坂
年の瀬	2	年ノ瀬	年の瀬	年の瀬
凍	1		凍	凍
寒月	1	寒月(歳旦之部)	寒月	寒月
雪垣	1			
寒弾	1			

※10　論文中では桔芒となっていたが、国立国会図書館所蔵本の本文を確認すると枯芒とある。

上記表の中で、他 3 つの句集と重複しておらず、『題詠俳諧明治千五百題』のみに掲載されていた季題を纏めると以下になる。

【歳旦・春の部】

若餅、茄子植る、芋植る、祈年祭、二月堂、鹿尾菜、大根花、亀鳴、春雑、東雲、月花、井囲、勝木箸、山作、耕初、春人、梅椿、野山焼

【夏の部】

葎花、余花、蜜柑花、鉄銭花、錦花、橘、椎若葉、草茂る、根芋、李、蕗、菽植る、蝿叩、節折、川社、施餓鬼、七月、腐草作蛍、薬降、夏雑、夏朗詠、水肴、木平

【秋の部】

刈萱、天瓜、真葛、常山花、岡穂、鵯上戸、團栗、穂蘆、鶸、菊頂、太刀魚、螽斯、牛房引、登髙、司召、網代打、野分、露霜、そゝろ寒、逆峰入、秋雑、遺漏、秋寂、萩芒、新生姜、走り穂、万年青、椎、蜜柚

【冬の部】

返花、冬櫻、榧花、雪垣、寒弾、冬され、冬空、大祓、夜雪、冬里、被初

『明治新五百題』、『明治新々五百題』には「陸軍始」や「海軍始」等、その当時生み出された言葉が季題として詠み込まれていたが、調査の結果、『題詠俳諧明治千五百題』にはそのような季題は確認されなかった。また、『題詠俳諧明治千五百題』全掲載題 858 題の内、『俳諧明治七百題』、『明治新五百題』、『明治新々五百題』と重複しない季題は 81 題であり、これは全体の約 9%に当たる。約 9 割が他の類題句集にも掲載されている季題となっていた。

以上から、『題詠俳諧明治千五百題』の特徴としては、他の句集に掲載されていないような珍しい季題を多く掲載するというよりも、句作の場面でよく扱われる季題を多く掲載した句集と言える。また、『題詠俳諧明治千五百題』の本文中には、俳諧初心者に活用してもらうことを意図して、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼等の前文が掲載されている。この「俳諧初心者に活用してもらう」という方針が、季題を編集する際にも貫かれていると言え、『題詠俳諧明治千五百題』は、いかに俳諧初心者にとって活用しやすい句集を作るか、その点に重きを置いた類題句集と言える。

また、『題詠俳諧明治千五百題』では「夕時雨」や「松風時雨」、「小夜時雨」、「川音しくれ」等、「時雨」の関連季題が多く掲載されていたが、『俳諧明治七百題』、『明治新五百題』、『明治新々五百題』では「時雨」のみ掲載されていた。「時雨」に関連する季題が多く掲載されているという点が、『題詠俳諧明治千五百題』独自の特徴である可能性が高いが、なぜ「時雨」の関連季題が多くなっているのか、この点に関する考察は今後の課題としたい。

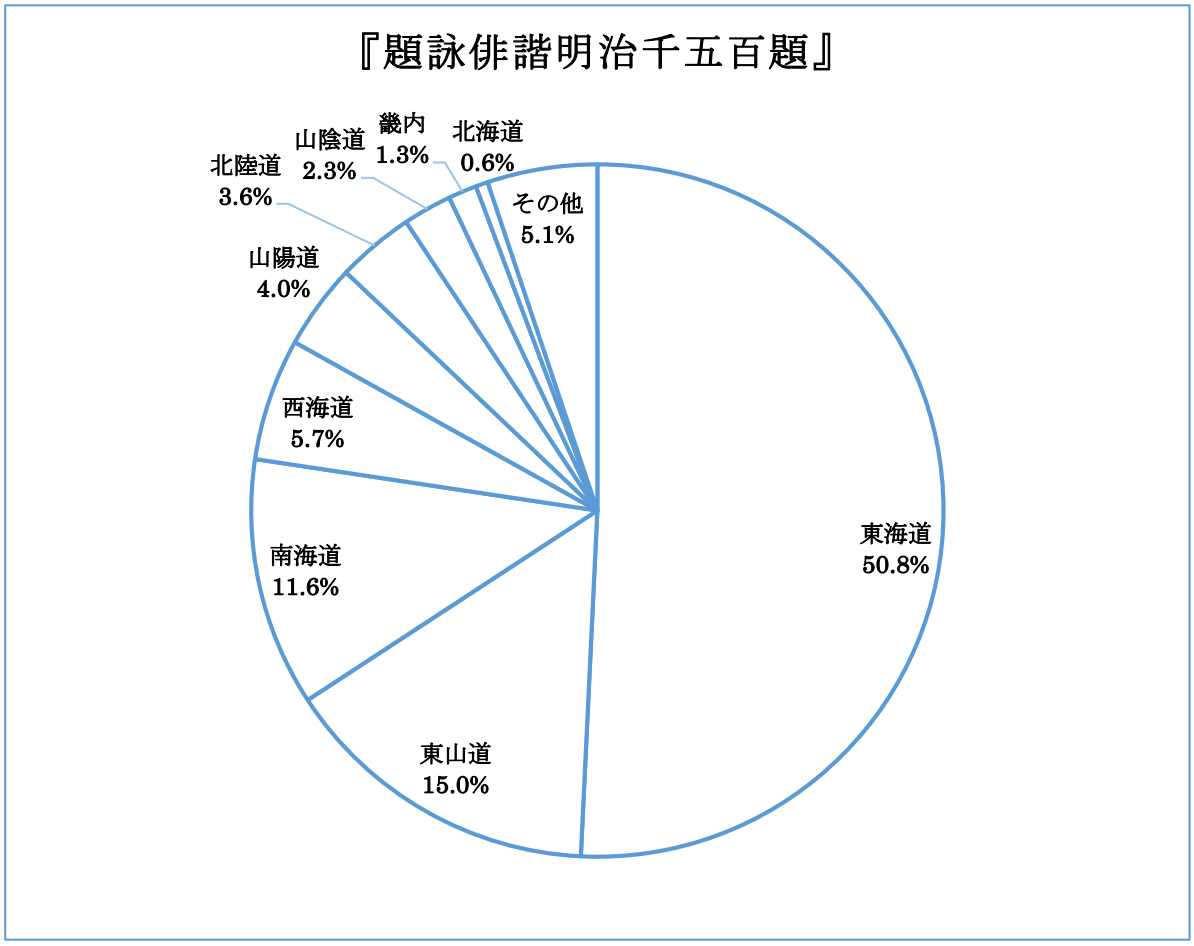
4.2. 人名録の書式に関する比較

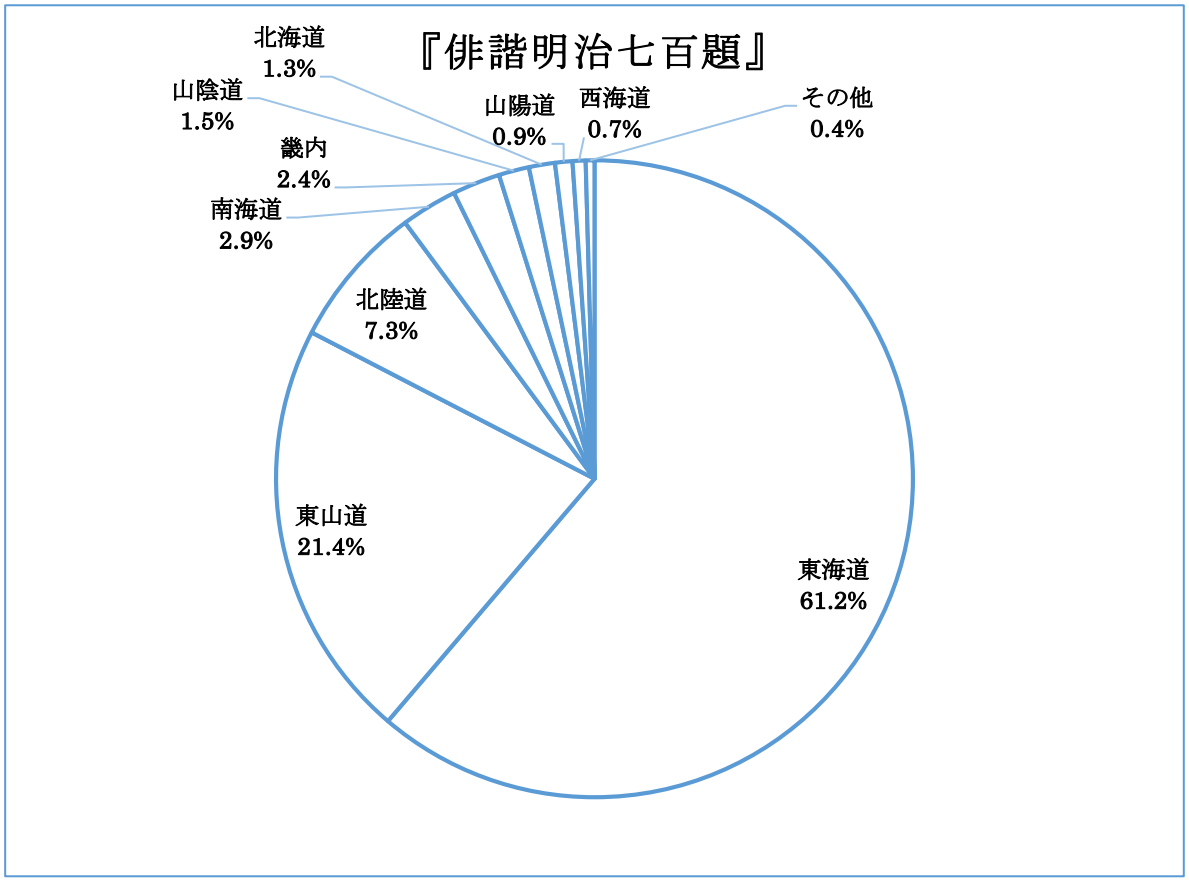
『題詠俳諧明治千五百題』、『俳諧明治七百題』に付されている人名録には、それぞれ異なる形式が採用されている。『題詠俳諧明治千五百題』では、いろは順に俳号が並べられ、各俳号の下に俳人の住所と本名が記載されている。一方、『俳諧明治七百題』では、国別に俳号が並べられる形式を採っている。それぞれの編者はなぜこの形式を採用したのか、その点について考察する。

『題詠俳諧明治千五百題』人名録には、「西京人漫遊中」や「土佐ノ人漫遊中」等のように、諸国を遊学している俳人が掲載されている。また、「下総埴生郡成田人今在上総」や「在後志小樽港」、「今在羽後」のように記載されている俳人も似たような境遇にあるものと考えると、その総計は 21 人になる。このような俳人は、『俳諧明治七百題』においては俳諧修行で諸国を行脚する俳人を表す「雲水」として掲載されている。しかし、その数は 2 人のみであり、『題詠俳諧明治千五百題』程多くはない。この点に、両者人名録の書式が異なる理由があるのではないかと考える。遊学中の俳人が多ければ、国別に俳号を記載するとなると、特定の国に分類できない俳人が多く生じてしまう。その点、いろは順に俳号を掲載した方が、分類できない俳人が生じるのを防ぐことができる。『題詠俳諧明治千五百題』の編者がいろは順に俳号を掲載する形式を選択したのは、俳号が分類しやすかったからではないだろうか。一方、『俳諧明治七百題』の編者が、国別に俳号を纏める形式を選択したのは、遊学中の俳人数が少なかったから、ということが理由として考えられる。また、国別に俳号を纏める形式では、それぞれの国からどのくらいの俳人が掲載されているのかが視覚的に把握しやすい。且つ、地方の括り毎に国名が纏められていると、全国の中でどの地方の俳人が多くなっているのかも把握しやすい。『俳諧明治七百題』の編者は、全国の中でどの地方の、どの国の俳人が多くなっているのかを読者が視覚的に把握しやすいように、国別に俳号を並べる形式を採り、且つ八道の括り毎に国名を纏めたのではないかということが推測される。

4. 3. **人名録の俳人数に関する比較**

『題詠俳諧明治千五百題』、『俳諧明治七百題』、それぞれの人名録に掲載されている俳人を地域別に分類し、五畿八道に準じた 9 つの区分に振り分けたものを、以下に円グラフで示す。





上記を参照すると、東海道の俳人数が全体の半数以上を占めている点、東海道の俳人に次いで、東山道の俳人数が多くなっている点は、『題詠俳諧明治千五百題』、『俳諧明治七百題』に共通する特徴である。

両者において異なる点としては、『題詠俳諧明治千五百題』における東海道、東山道の俳人数を合計すると、全体の約 6 割になっているのに対し、『俳諧明治七百題』では東海道、東山道の俳人数総計が全体の約 8 割になっている。また、『題詠俳諧明治千五百題』では南海道や西海道、山陽道における俳人の割合が『俳諧明治七百題』と比較して多くなっているのに対し、『俳諧明治七百題』では北陸道の俳人の割合が『題詠俳諧明治千五百題』と比較して多くなっている。

以上の比較から、『題詠俳諧明治千五百題』は東海道、東山道における俳人数の偏りが『俳諧明治七百題』と比較して少ない分、西の地域の俳人数も多く収録されており、より全国的に俳人が掲載されていると言える。

4. 4. 各俳人の句数に関する比較

『題詠俳諧明治千五百題』、『俳諧明治七百題』に共通して句が掲載されている俳人は、98 人存在した。重複する俳人について、国名とそれぞれの句集において採録された句数について纏めた表を以下に示す。なお、表中の(1)は『題詠俳諧明治千五百題』で掲載されている句数を、(2)は『俳諧明治七百題』で掲載されている句数を示す。

【表 8】重複して掲載されている俳人

No	俳人	国名	(1)	(2)
1	吟風	羽後	107	1
2	澄江	東京	55	191
3	聴松	東京	46	12
4	露月	越後	32	4
5	春湖	東京	30	16
6	芹舎	『題詠俳諧明治千五百題』 下京とあり 『俳諧明治七百題』 西京とあり	27	11
7	稲處	西京	22	6
8	旭齋	下総	21	1
9	虎遊	下総	20	5
10	ミき雄	東京	17	115
11	等栽	東京	17	65
12	二葉	羽後	14	1
13	蓬宇	三河	13	4
14	盡誠堂	下総	13	4
15	富水	東京	12	62
16	完鴎	『題詠俳諧明治千五百題』 住居欄空欄本文に武蔵とあり 『俳諧明治七百題』 下総とあり	12	27
17	閑窓	『題詠俳諧明治千五百題』 上毛とあり 『俳諧明治七百題』 上野とあり	12	4
18	青暁	『題詠俳諧明治千五百題』 越後とあり 『俳諧明治七百題』 人名録になし	12	1
19	一鼎	『題詠俳諧明治千五百題』 北海道とあり 『俳諧明治七百題』 江差とあり	11	4
20	十湖	遠江	11	3
21	松塘	土佐	11	1

22	松圃	岩代	10	12
23	邑邦	武蔵	10	5
24	臼左	武蔵	10	4
25	呉仙	東京	10	3
26	菊雄	『題詠俳諧明治千五百題』 東京とあり 『俳諧明治七百題』 人名録になし	10	2
27	歩山	下総	10	2
28	鳥牙	因幡	10	1
29	素水	東京	9	29
30	旭扇	越後	9	4
31	宗露	下総	9	4
32	宝亀	岩城	9	3
33	宇雀	阿波	9	1
34	宇山	東京	8	43
35	月彦	東京	8	33
36	鶯笠	東京	8	28
37	文友	『題詠俳諧明治千五百題』 武蔵とあり 『俳諧明治七百題』 武蔵と近江に同じ俳号の俳人が存在。本文中に国名が記載されていないことから、どちらが何句詠んだか明らかでない。	8	12
38	精知	東京	8	10
39	扇可	岩城	8	4
40	永機	東京	8	4
41	壽水	『題詠俳諧明治千五百題』 三河とあり 『俳諧明治七百題』 武蔵とあり	8	2
42	青宜	陸前	8	1
43	竹茁	美濃	8	1
44	詩竹	東京	7	82
45	月杵	東京	7	19
46	山月	東京	7	16

47	鶴翁	『題詠俳諧明治千五百題』 人名録になし、本文に下総とあり 『俳諧明治七百題』 上野とあり	7	5
48	梅年	東京	7	2
49	思風	阿波	7	1
50	完岱	東京	6	38
51	成雅	東京	6	11
52	花朝女	東京	6	7
53	雪堂	『題詠俳諧明治千五百題』 三河とあり 『俳諧明治七百題』 越後とあり	6	4
54	はしめ	『題詠俳諧明治千五百題』 尾張とあり 『俳諧明治七百題』 人名録になし	6	3
55	黙平	東京	6	1
56	有柳	武蔵	5	24
57	連水	伊豆	5	9
58	釣月	『題詠俳諧明治千五百題』 下総とあり 『俳諧明治七百題』 上総とあり	5	4
59	西洲	肥前	5	2
60	應波	因幡	5	1
61	潮水	大阪	4	11
62	山端	播磨	4	10
63	白隣	甲斐	4	6
64	竹良	甲斐	4	6
65	椿年	『題詠俳諧明治千五百題』 志州とあり 『俳諧明治七百題』 甲斐とあり	4	4
66	叟明	下総	4	4
67	隆旭	下総	4	4
68	千畝	東京	4	3

69	芳泉	東京	4	3
70	其戎	伊豫	4	2
71	沙山	『題詠俳諧明治千五百題』 今在羽後とあり 『俳諧明治七百題』 東京とあり	4	1
72	一府	陸前	3	22
73	年山	下総	3	6
74	大喬	東京	3	5
75	涼坪	『題詠俳諧明治千五百題』 東京とあり 『俳諧明治七百題』 下総とあり	3	5
76	春塘	越後	3	4
77	河梁	上総	3	3
78	友昇	横濱	3	2
79	松雄	東京	3	2
80	静処	尾張	3	1
81	松翁	『題詠俳諧明治千五百題』 讃岐とあり 『俳諧明治七百題』 武蔵とあり	3	1
82	乙朗	東京	2	27
83	棄古	上野	2	7
84	五菖	『題詠俳諧明治千五百題』 土佐人漫遊中 『俳諧明治七百題』 土佐とあり	2	5
85	以兄	下総	2	4
86	一琴	上野	2	4
87	竹陰	『題詠俳諧明治千五百題』 東京とあり 『俳諧明治七百題』 越後とあり	2	4
88	楽只	上総	2	4
89	桃壺	岩城	2	4
90	梧桐	伊豆	2	2

91	生水	『題詠俳諧明治千五百題』 備前とあり 『俳諧明治七百題』 東京とあり	2	1
92	太年	東京	2	1
93	醉雨	尾張	2	1
94	壽山	『題詠俳諧明治千五百題』 陸前とあり 『俳諧明治七百題』 人名録になし	2	1
95	曲川	出雲	2	1
96	亀友	『題詠俳諧明治千五百題』 東京とあり 『俳諧明治七百題』 人名録になし	2	1
97	李塘	下総	1	14
98	閑茶	相模	1	1

上記を参照すると、羽後の吟風のように一方では多く掲載され、他方では掲載句数が少ない俳人が見受けられる。なぜこのように差が生じるのか。多く句を投稿した人は、投句料を払ってまで、何を目的に投句していたのか。その理由の一つに、句が多く掲載されている俳人は、編者と日頃から交流があり、編者が類題句集を作ることに対する餞という意味を込めて、句を多く投稿したのではないか、ということが考えられる。

また、「2.8.各俳人の句数」、「3.7.各俳人の句数」の調査結果より、『俳諧明治七百題』で句が多く掲載された上位 20 番目までの俳人は、ほぼ関東圏に集中していたのに対し、『題詠俳諧明治千五百題』で句が多く掲載された上位 20 番目までの俳人は、比較的全国に分布していた。句が多く掲載されている俳人が編者と日頃から交流のあった俳人と仮定するならば、『題詠俳諧明治千五百題』の編者の交友関係も、全国に及んでいたと言える。句が多く掲載されている俳人が編者と日頃から交流のあった俳人であることを裏付けるためには、その俳人が編集した句集に聴松も餞として句を贈っているのか調査が必要であるが、それに関しては今後の課題とする。

4.5.まとめ

掲載された題に関して比較したところ、『題詠俳諧明治千五百題』は、他の句集に掲載されていないような珍しい季題を多く掲載するというよりも、句作の場面でよく扱われるような季題を多く掲載していることが分かった。ここから、いかに俳諧初心者にとって活用しやすい句集を作るか、その点に重きを置いた類題句集と言える。

人名録に掲載された俳人数の比較から、『題詠俳諧明治千五百題』は東海道、東山道における俳人数の偏りが『俳諧明治七百題』と比較して少ない分、西の地域の俳人数も多く収録されていることが明らかになった。このことから『題詠俳諧明治千五百題』は『俳諧明治七百題』と比較して、より全国

的に俳人が掲載されていると言える。

5. おわりに

本調査から明らかになった『題詠俳諧明治千五百題』の特徴を改めて述べると以下のとおりである。

(1)諸本によって、見返しや奥付の記載情報が異なる。このことから、本書が繰り返し版を重ねて刊行されたということ、それだけ需要があったことが推測される。

(2)本文は、神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼関係の前文が記載された後に句が掲載される形式を採る。この形式は、「コハ世ニ有フレタル類題集ニ異リ」という方針のもと採用されたものであり、編者の「他類題句集との差別化を図る」という意識をうかがうことができる。

(3)本文に掲載されている題数と書名で銘打たれた題数との間には大きなずれがあり、実際に掲載されている題数は書名題数の約半分となっている。また、完全に新暦に従って季題が分類された類題句集とは言えない。

(4)付録の人名録には、俳号だけでなく詳細な住所、本名が記載されており、俳人間の血縁関係や師弟関係等を読み取ることができる。加えて、掲載されている俳人は全国に分布している。自身の句が掲載された俳人が本書を購入したと仮定するならば、人名録に掲載された俳人が全国に分布している『題詠俳諧明治千五百題』は、全国規模で普及した可能性が考えられる。

(5)付録の発行書林に記載されている書店は、全国に分布している。このことから、本書が当時、全国で取り扱われた可能性が考えられる。また、『古今俳諧明治五百題』、『明治新五百題』、『明治新々五百題』とほぼ同じ内容が発行書林には記載されている。

また、比較から明らかになった『題詠俳諧明治千五百題』独自の特徴としては、以下の通りである。

(1)他の句集に掲載されていないような珍しい季題を多く掲載するというよりは、句作の場面でよく扱われるような季題を多く掲載している。ここから、いかに俳諧初心者にとって活用しやすい句集を作るか、その点に重きを置いた類題句集と言える。

(2)東海道、東山道における俳人数の偏りが『俳諧明治七百題』と比較して少ない分、西の地域の俳人数も多く収録されており、より全国規模で俳人が掲載されている。

以上を纏めると『題詠俳諧明治千五百題』は、当時全国規模で普及した可能性が高く、需要が高かった類題句集として位置付けられる。また、『俳文学大辞典』等の辞典類に項目として記載するならば、以下のように纏めることができる。

「題詠俳諧明治千五百題　だいえいはいかいめいじせんごひゃくだい　俳諧撰集。聴松編。明治15(1882)・8、玉海堂(稲田源吉)刊。宮崎拾蕊序。俳諧初心者の活用を意図し、本文には神釈・名所・懐旧・詠史・賀章・追悼関係の3885句を収録。また、諸本によって異同が確認され、付録の人名録、発行書林は、掲載俳人、掲載書店ともに全国に分布している。」

今後の課題としては、未調査の類題句集1点1点に対する調査を積み重ね、共通する点、異なる点を明らかにし、より総合的な研究を目指していきたいと考える。

【謝辞】
本稿を執筆するにあたり、貴重なご所蔵本を閲覧、並びに調査させていただきました各機関に厚く御礼申し上げます。また、貴重な資料を提供していただいたことに加え、沢山の御教示を賜りました指導教官の綿抜豊昭先生に対しても、心から感謝の意と御礼を申し上げ、謝辞とさせていただきます。

文献リスト

【参考文献】

・越後敬子．“明治期旧派類題句集概観“．明治開化期と文学．国文学研究資料館編．臨川書店，1998，p．145-187．

・越後敬子．明治の類題句集－旧派と新派を比較して－．国文学研究資料館紀要．1998，no．24，p．323-348．

・河合章男．明治期の俳書・俳誌の研究．筑波大学，2006，180p．博士論文．

・越後敬子．“『俳諧開化集』－教林盟社と改暦“．和歌　俳句　歌謡　音曲集　新　日本古典文学大系　明治編　4．久保田啓一[ほか]．岩波書店，2003，p．461-473．

・鈴木円花，綿抜豊昭．『古今俳諧明治五百題』ついて．図書館情報メディア研究．2009，vol．7，no．1，p．27-33．

・吉澤駿裕．『明治新五百題』について．筑波大学，2014，30p．卒業論文．

・山下泰史．『明治新々五百題』について．筑波大学，2014，96p．卒業論文．

・横松令奈，綿抜豊昭．「明治新撰俳諧姿見集」について．図書館情報メディア研究．2010，vol．8，no．1，p．89-98．

・森曲豆．詠題　明治千五百題　－俳句革新前夜の趨勢－．かびれ．1956，vol．26，p．8-12．

・島本仲道．夢路之記．無可亭，1891，31 丁．

・大塚毅．明治大正俳句史年表大事典．世界文庫，1971，p．109，141-142，543．

・市川一男．近代俳句のあけぼの　第二部　幕末明治の俳人とその作品．三元社，1975，p．220．

・平林鳳二，大西一外．新選俳諧年表．書画珍本雑誌社，1923，p．296，301．

・茨城俳句の会．茨城俳句史(1)　＜史料篇＞．茨城俳句の会，1985，p．3．

・尾形仂[ほか]．俳文学大辞典．角川書店，1995，p．224，451，563，564，674，886，974．

・若歌森善郎．竜ケ崎市史．竜ケ崎郷土史研究会，1959，p．153-156．

・東京経済雑誌社．大日本人名辞書．東京経済雑誌社，1921，p．2074．

・龍ヶ崎市史編さん委員会．龍ケ崎市史　中世史料編．龍ケ崎市教育委員会，1993，p．17．

・臼井勝美[ほか]．日本近現代人名辞典．吉川弘文館，2001，p．519．

・日外アソシエーツ株式会社．明治大正人物事典　Ⅰ　政治・軍事・産業篇．紀伊國屋書店，2011，p．317．

・有山麓園．島本北洲翁　其の略歴と俳句．俳三昧．1924，vol．2，no．4，p．3．

・有吉保．和歌文学辞典．桜木風社，1982，p．142．

・朝野雅文．正文堂物語　第一巻　「北総州佐原と正文堂書舗」　朝野氏蔵版．聚海書林，1992，p．183，359，695-696．

・東京書籍商組合．東京書籍商組合史及組合員概歴．東京書籍商組合，1912，p．176-177．

・角川学芸出版．角川俳句大歳時記　新年．角川学芸出版，2006，625p．

・角川学芸出版．角川俳句大歳時記　春．角川学芸出版，2006，686p．

・角川学芸出版．角川俳句大歳時記　夏．角川学芸出版，2006，755p．

・角川学芸出版．角川俳句大歳時記　秋．角川学芸出版，2006，719p．

・角川学芸出版．角川俳句大歳時記　冬．角川学芸出版，2006，643ｐ．

・東聖子．近世類題発句集・年表稿　－『補訂版国書総目録』『古典籍総合目録』－．俳文芸．1994，no．44，p．72-78．

【引用文献】

・鈴木秀雄．竜ケ崎郷土史．竜ケ崎市，1970，p．139-140．
・市川一男．近代俳句のあけぼの　第一部　幕末明治俳壇史．三元社，1975，p．69．
・東京経済雑誌社．大日本人名辞書．東京経済雑誌社，1921，p．2074．
・有山麓園．島本北洲翁の俳道観．俳三昧．1924，vol．2，no．10，p．2．

付録目次

1. 各題の句数 1
1.1. 『題詠俳諧明治千五百題』歳旦・春の部 1
1.2. 『題詠俳諧明治千五百題』夏の部 4
1.3. 『題詠俳諧明治千五百題』秋の部 6
1.4. 『題詠俳諧明治千五百題』冬の部 9
1.5. 『俳諧明治七百題』歳旦之部 11
1.6. 『俳諧明治七百題』夏之部 14
1.7. 『俳諧明治七百題』秋之部 17
2. 人名録 21
2.1. 『題詠俳諧明治千五百題』人名録 21
2.2. 『俳諧明治七百題』人名録 36
3. 各俳人の句数 41
3.1. 『題詠俳諧明治千五百題』各俳人の句数 41
3.2. 『俳諧明治七百題』各俳人の句数 57
4. 『題詠俳諧明治千五百題』発行書林 70

1. 各題の句数

1. 1. 『題詠俳諧明治千五百題』歳旦・春の部

題	句数
梅	66※1
花	56※2
朗詠	36※3
霞	33
柳	31※4
鶯	25
初日	20
春雨	20
胡蝶	18
月梅	17
春風	16※5
雉子	15
櫻	14
春雑	13
朧月	13※6
初烏	12
蛙	11
初空	10
潮干	10※7
一日	9
春水	9
花見	9
海苔	8
初霞	8
桃花	8
若水	7
雑煮	7
若菜	7
薺	7
東雲	7
沫雪	7
猫恋	7
雲雀	7
月花	7
山吹	7

題	句数
菫	7※8
白魚	7※9
歳旦	6※10
一月	6
初鶏	6
睦月	6
七種	6
余寒	6
春雪	6
野梅	6
初櫻	6
帰雁	6
遅櫻	6
菜花	6※11
年立	5
今年	5
門松	5
萬歳	5
手毬	5
福寿草	5
人日	5
花春	5
長閑	5
水温	5
春月	5
山笑	5
若草	5
苗代	5
雀子	5
別霜	5
茶摘	5
四方拝	4
初明り	4
吉方	4
蓬莱	4

題	句数
傀儡師	4
年玉	4
初暦	4
初荷	4
雪解	4
陽炎	4
佐保姫	4
出代	4
蕗の薹	4
獨活	4
百千鳥	4
鳥囀	4
雛祭	4
蕨	4
蘆の角	4
紅梅	4
花御堂	4
炉塞	4
花吹雪	4
躑躅	4
藤花	4
鳥入雲	4
初手水	3
鏡餅	3
屠蘇	3
年男	3
飾	3
飾臼	3
御慶	3
福曳	3
御降	3
謡初	3
小松曳	3
常陸帯	3
懸想文	3

題	句数
爆竹	3
藪入	3
氷豆腐	3
佛の座	3
節分	3
立春	3
風光	3
氷浮	3
麗	3
暖	3
鐘霞	3
糸遊	3
春宵	3
春川	3
涅槃	3
木芽	3
土筆	3
椿	3
松の花	3
芹	3
春の鳥	3
獺祭魚	3
駒鳥	3
人丸忌	3
草餅	3
鳳巾	3
種蒔	3
畑打	3
乙鳥	3
引鶴	3
亀鳴	3
すゝ子さす	3
弥生	3

題	句数
佛生會	3
鶏合	3
花明り	3
梨子花	3
さくら鯛	3
さくら貝	3
蚕	3
夏ちかし	3
行春	3
春日	3※12
初午	3※13
蒲公英	3※14
二日	2
新年	2
井囲	2
歯固	2
吉方棚	2
飾竹	2
橙	2
楪	2
芋頭	2
庭竈	2
太箸	2
勝木箸	2
穂長	2
山作	2
小殿原	2
数ノ子	2
掛鯛	2
猿廻し	2
年礼	2
着衣初	2
掃初	2

題	句数
稲積	2
三个日	2
松の内	2
若餅	2
弓始	2
船乗初	2
初売	2
初夢	2
書初	2
蔵開	2
水祝	2
嫁が君	2
元始祭	2
初子日	2
寒入	2
畚卸	2
耕初	2
粥杖	2
削かけ	2
寒梅	2
寒菊	2
寒椿	2
春待	2
二月	2
厄拂	2
春寒	2
冴返る	2
残雪	2
凍解	2
長日	2
暮遅	2
春山	2
春海	2

題	句数
春人	2
祈年祭	2
紀元節	2
薪能	2
二月堂	2
西行忌	2
二日灸	2
青饅	2
鮒鱠	2
蜆	2
鹿尾菜	2
若芝	2
草萌	2
虎杖	2
梅柳	2
梅椿	2
鳥巣	2
鶯	2
彼岸	2
初雷	2
初霓	2
御身拭	2
大根花	2
野山焼	2
初花	2
接木	2
連翹	2
茄子植る	2
芋植る	2
菊根分	2
落角	2
田螺	2
鷹化成鳩	2

題	句数
竹秋	2
踏青	2
山櫻	2
海棠	2
石楠花	2
櫻草	2
五形	2
麦鶉	2
若鮎	2
早梅	1

※1　追加の部における「梅」3 句含む
※2　追加の部における「花」5 句含む
※3　追加の部における「春朗詠」10 句含む
※4　追加の部における「柳」2 句含む
※5　追加の部における「春風」1 句含む
※6　追加の部における「朧月」3 句含む
※7　追加の部における「汐干」2 句も含む
※8　追加の部における「菫」1 句含む
※9　追加の部における「白魚」2 句含む
※10　追加の部のおける「歳旦」6 句
※11　追加の部における「菜花」2 句含む
※12　追加の部における「春日」1 句含む
※13　追加の部における「初午」1 句含む
※14　追加の部における「蒲公英」1 句含む

1.2. **『題詠俳諧明治千五百題』夏の部**

題	句数
夏雑	62
時鳥	43
涼風	40
若葉	25
清水	21
蛍	19
蓮	16
杜若	13
蝉	13
蚊遣	12
皐月雨	12
木下闇	11
今年竹	11
水雞	11
納涼	11
袷	10
卯の花	10
田植	10
閑古鳥	9
麦秋	8
明易夜	8
新茶	8
鮓	8
蚊帳	8
葉櫻	8
牡丹	8
夏月	8
初袷	7
茂り	7
百合花	7
暑	7
雲の峰	7
短夜	6
更衣	6
団扇	6

題	句数
日傘	6
筍	6
老鶯	6
蝸牛	6
田植唄	6
早苗	6
青梅	6
午睡	6
菖蒲	5
夏書	5
扇	5
夏木立	5
茨花	5
枝蛙	5
初鰹	5
松魚	5
蚊	5
皐月晴	5
祇園會	5
御祓	5
帷子	5
茄子	5
心太	5
夕顔	5
田草取	5
竹酔日	4
筑摩祭	4
新樹	4
葉柳	4
若楓	4
柚花	4
罌粟花	4
行々子	4
蚊柱	4
薄羽折	4

題	句数
藻花	4
鹿子	4
七夕	4
夕立	4
月涼	4
風薫	4
葛水	4
沖鱠	4
川骨	4
簸子花	4
卯花月	3
首夏	3
薬降	3
粽	3
菰花	3
芍薬	3
鶯附子	3
飛蟻	3
鵜	3
蛭	3
青鷺	3
氷室	3
富士詣	3
鉾	3
辻の花	3
若竹	3
栗花	3
山梔子花	3
紫陽花	3
夏菊	3
苔の花	3
萍	3
浮巣	3
水馬	3
炎天	3

題	句数
貸小袖	3
青嵐	3
雨乞	3
躍	3
川狩	3
青簾	3
簟	3
抱籠	3
汗	3
水肴	3
一夜酒	3
打水	3
夏座敷	3
毛虫	3
夏朗詠	3※1
端午	2
幟	2
菖蒲太刀	2
百草摘	2
競馬	2
矢数	2
印地打	2
白重	2
柏餅	2
梅漬	2
紙帳	2
余花	2
椎若葉	2
草茂る	2
夏野	2
桐花	2
蜜柑花	2
椎の花	2
著莪	2
一八	2
藺花	2
玉巻芭蕉	2

題	句数
青山椒	2
櫻の実	2
根芋	2
菽植る	2
葭原雀	2
翡翠	2
子子	2
蚋	2
蝿	2
蝿叩	2
絡線	2
蝙蝠	2
蚊食鳥	2
六月	2
皐月闇	2
梅雨	2
黒はへ	2
夏氷	2
節折	2
茅輪	2
形代	2
川社	2
嘉定	2
躬狩	2
照射	2
火串	2
単物	2
木平	2
南天花	2
瞿麦	2
石菖	2
橘	2
つり葱	2
鉄銭花	2
花菖蒲	2
藻刈	2
李	2

題	句数
瓜	2
通し鴨	2
七月	2
日盛	2
願糸	2
硯洗	2
梶葉	2
銀河	2
青東風	2
土用	2
曝井	2
盆	2
魂祭	2
送火	2
灯籠	2
施餓鬼	2
衝突入	2
土用干	2
盆月	2
夏痩	2
水飯	2
冷汁	2
洗鯉	2
冷瓜	2
腐草作蛍	2
百日紅	2
澤瀉	2
凌霄	2
錦花	2
青田	2
麻刈	2
練雲雀	2
火取虫	2
秋隣	2
秋近	2
生身玉	1
蕗	1※2

※1　追加の部における「夏朗詠」3 句

※2　追加の部における「蕗」1 句

1.3.『題詠俳諧明治千五百題』秋の部

題	句数
虫	30
露	22
秋風	22
月	22
菊花	20
雁	19
萩花	18
稲妻	16
秋月	13
名月	13
砧	13
立秋	12
草花	10
稲	10
鹿	10
紅葉	10
花野	9
初月	9
月見	9
朝顔	8
女郎花	8
達磨忌	8
白菊	8
秋雑	8
秋水	7
桐一葉	7
薄	7
落鮎	7
紅葉且散	7
朗詠	7※1
初秋	6
残暑	6

題	句数
角觝	6
稲花	6
蚕	6
蜻蛉	6
月雨	6
落水	6
夜寒	6
神迎	6
遺漏	6
今朝秋	5
冷	5
秋夕	5
秋色	5
花火	5
唐辛	5
蜩	5
百舌鳥	5
今日月	5
既望	5
竹春	5
新米	5
荻	5
蓮実	5
鳥渡	5
長夜	5
後の月	5
神留守	5
十夜	5
夷講	5
行秋	5
文月	4
秋暑	4

題	句数
霧	4
秋日	4
放生會	4
案山子	4
鳴子	4
桔梗	4
梅嫌	4
木槿	4
芭蕉	4
鈴虫	4
秋の蝶	4
初嵐	4
新酒	4
初紅葉	4
十月	4
崩簗	4
草紅葉	4
蔦紅葉	4
野山錦	4
色かえぬ松	4
八朔	3
秋初涼	3
秋雲	3
秋聲	3
秋鐘	3
龍田姫	3
駒曳	3
祭	3
後袷	3
団扇置	3
散柳	3
柿	3

題	句数
早稲	3
尾花	3
秋草	3
牛房引	3
掛稲	3
轡虫	3
茶立虫	3
藻虫鳴	3
鴫	3
鳩吹	3
鷹山別	3
月今宵	3
月雲	3
待宵	3
彼岸	3
登高	3
御遷宮	3
初汐	3
芋掘	3
野分	3
芙蓉	3
木犀	3
刈萱	3
紫苑	3
天瓜	3
菌	3
茸狩	3
松茸	3
小雀	3
稲雀	3
鶸	3
河鹿	3
そゝろ寒	3
朝寒	3
玄猪	3
神送	3

題	句数
御命講	3
野菊	3
柿紅葉	3
霜踏鹿	3
尾越鴨	3
田面	2
秋来る	2
秋空	2
秋山	2
秋海	2
秋雨	2
秋寂	2
駒迎	2
司召	2
扇置	2
忘扇	2
添水	2
引板	2
萩芒	2
秋海棠	2
蘭	2
鼠尾草	2
葡萄	2
新生姜	2
梨子	2
西瓜	2
木綿取	2
新綿	2
花芒	2
穂芒	2
真葛	2
鶏頭花	2
雁来紅	2
鳳仙花	2
鬼灯	2
絲瓜	2

題	句数
稲穂	2
走り穂	2
岡穂	2
落穂	2
鹿笛	2
蟋蟀	2
竈馬	2
螽	2
松虫	2
蟷螂	2
蚯蚓鳴	2
兜虫	2
蓑虫鳴	2
鴫突	2
鶉	2
塒出鷹	2
鯊釣	2
立待	2
逆峰入	2
二百十日	2
後雛	2
升市	2
今年酒	2
冷麦	2
龍膽	2
藍の花	2
蕎麦花	2
常山花	2
柘榴	2
瓢	2
初茸	2
松露	2
燕帰	2
啄木鳥	2
木兎	2
山雀	2

題	句数
四十雀	2
五十雀	2
菊頂	2
目白	2
初鮭	2
太刀魚	2
渋鮎	2
蛇入穴	2
神無月	2
露霜	2
秋霜	2
露寒	2
露時雨	2
肌寒	2
御取越	2
新蕎麦	2
網代打	2
着セ綿	2
残菊	2
梅紅葉	2
櫻紅葉	2
敗芭蕉	2
我母香	2
鵯上戸	2
万年青	2
栗	2
椎	2
團栗	2
柚	2
蜜柚	2
末枯	2
穂蘆	2
雀化蛤	2
冬近し	2
螽斯	1
鮎	1
神旅	1

※1　追加の部「秋朗詠」4 句含む

1.4. **『題詠俳諧明治千五百題』冬の部**

題	句数
雪	38
時雨	30
寒	17
小春	15
千鳥	15
冬朗詠	15※1
初時雨	14
霜	12
枯野	12
初雪	11
冬月	11
返花	11
翁忌	10
冬籠	10
落葉	10
水鳥	10
鴨	10
紙衣	8
山茶花	8
炭	7
麦蒔	7
枯尾花	7
笹鳴	7
鷹	7
煤払	7
初冬	6
雪の人	6
氷	6
榾火	6
冬木立	6
木葉	6
河豚	6
年忘	6
初霜	5
夕時雨	5

題	句数
夜雪	5
冬枯	5
口切	5
卵酒	5
頭巾	5
炬燵	5
茶の花	5
冬梅	5
枇杷花	5
大根引	5
枯柳	5
鴛鴦	5
冬至	5
掛乞	5
雪明り	4
子燈心	4
風呂吹	4
炉開	4
火桶	4
石蕗花	4
水仙	4
枯蘆	4
冬の蝿	4
鉢叩	4
寒念仏	4
歳暮	4
行年	4
松風時雨	3
川音しくれ	3
雪空	3
霙	3
霰	3
薄氷	3
鐘氷	3
神楽	3

題	句数
夜輿引	3
蒲団	3
干菜	3
圍爐裏	3
網代	3
橇	3
冬櫻	3
枯草	3
温鳥	3
浮寝鳥	3
師走	3
寒聲	3
餅搗	3
年名残	3
大年	3
年惜む	3
除夜	3
大晦日	3
霜月	2
小夜時雨	2
吹雪	2
雪丸	2
雪佛	2
初氷	2
月氷	2
氷柱	2
冴	2
冬され	2
冬日	2
冬空	2
冬山	2
冬野	2
冬里	2
冬田	2
山眠	2

題	句数
寒雨	2
酉の市	2
髪置	2
被初	2
顔見せ	2
暦売	2
胼	2
納豆	2
薬喰	2
衾	2
切干	2
置炬燵	2
火鉢	2
埋火	2
柴漬	2
冬構	2
雪車	2
冬牡丹	2
八手花	2
冬椿	2
榧花	2
葱	2
枯薄	2
枯荻	2
枯芭蕉	2
名木散	2
鷦鷯	2
寒苦鳥	2
冬の鳥	2
生海鼠	2
蛎	2
大祓	2
和布刈	2
事始	2
衣配	2
節季候	2

題	句数
寒垢離	2
年木	2
年市	2
米洗	2
門松建	2
札納	2
年の坂	2
年の瀬	2
年尾	2
凍	1
寒月	1
雪垣	1
寒弾	1

※1　追加の部のおける「冬朗詠」15 句

1.5.『俳諧明治七百題』歳旦之部

題	句数
梅	40
花	37
霞	29
鶯	29
柳	25
蝶	25
初鴉	18
春風	18
蛙	17
櫻	17
雉子	14
餺	13
福寿草	12
東風	12
春雨	12
雲雀	12
初日	11
春雪	11
永日	11
春	10
陽炎	10
初櫻	10
蓬莱	9
御降	9
雪解	9
朧月	9
餘寒	8
春水	8
長閑	8
菫	8
帰雁	8
年ノ花	7
初空	7
松ノ内	7
椿	7
汐干	7

題	句数
行春	7
雑煮	6
年礼	6
御慶	6
若菜	6
養父入	6
水温	6
猫恋	6
白魚	6
海苔	6
初花	6
燕	6
茶摘	6
屠蘇	5
嫁ヶ君	5
寒月	5
蕗ノ薹	5
沫雪	5
梅柳	5
春草	5
芹	5
雛	5
菜ノ花	5
接穂	5
雀ノ子	5
田螺	5
海棠	5
若鮎	5
一月	4
一日	4
日ノ始	4
立年	4
去年今年	4
今年	4
若水	4
吉方	4

題	句数
手鞠	4
初夢	4
小松曳	4
二日灸	4
出代	4
佐保姫	4
下萌	4
若草	4
土筆	4
獺祭魚	4
青饅	4
親雀	4
別霜	4
花雲	4
藤	4
元日	3
新年	3
初鶏	3
初手洗	3
年男	3
門松	3
鏡餅	3
田作	3
太箸	3
三ヶ日	3
羽子	3
初売	3
薺	3
人日	3
寒ノ入	3
寒梅	3
寒念仏	3
冴返	3
初霞	3
豆打	3
春山	3

題	句数
風光	3
朧夜	3
木ノ芽	3
紅梅	3
蕨	3
野焼	3
畑打	3
鳥囀	3
百千鳥	3
蜂	3
草餅	3
彼岸	3
四月	3
遅櫻	3
苗代	3
二日	2
四方拝	2
庭竈	2
福藁	2
小殿原	2
年玉	2
初暦	2
稲積	2
狙公	2
初荷	2
書初	2
筆始	2
二月	2
春寒	2
柊指	2
春海	2
春川	2
春日	2
春月	2
暖	2
暮遅	2
山笑	2

題	句数
涅槃会	2
初雷	2
紙鳶	2
青柳	2
田打	2
桃花	2
鳥雲ニ入	2
寄居虫	2
蜆	2
治聾酒	2
櫻餅	2
鞦■	2
弥生	2
炉塞	2
春惜	2
花吹雪	2
山櫻	2
梨ノ花	2
種蒔	2
種卸	2
櫻鯛	2
桑子	2
筑摩祭	2
佛生会	2
太郎月	1
正月	1
三ノ朝	1
初日影	1
井開	1
若夷	1
歯固	1
掛鯛	1
薬子	1
大服	1
年始	1
着衣初	1
掛想文	1

題	句数
万歳	1
傀儡師	1
春駒	1
弾初	1
吉書	1
初湯	1
水祝	1
六日年越	1
七種	1
菘	1
佛ノ座	1
薺粥	1
削掛	1
綱曳	1
爆竹	1
畚卸	1
寒聲	1
寒ノ雨	1
早咲梅	1
宝ノ梅	1
寒椿	1
寒竹ノ子	1
常陸帯	1
絵踏	1
縣召	1
国栖笛	1
睦月	1
立春	1
玉ノ春	1
花ノ春	1
君ヶ春	1
残雪	1
氷浮	1
氷流	1
春野	1
麗	1
木地炉縁	1

題	句数
山葵	1
若布	1
初午	1
薪能	1
蒲公英	1
五加木	1
菊根分	1
麻蒔	1
蘆ノ角	1
鷽	1
春鳥	1
鳥ノ巣	1
鳥交	1
鷹継尾	1
虻	1
柳鮠	1
寒食	1
竹秋	1
北窓披	1
初虹	1
夏近	1
春深	1
晩春	1
夏隣	1
花曇	1
花鐘	1
松ノ花	1
木蓮花	1
山吹	1
連翹	1
樒ノ花	1
櫻草	1
薊	1
青麦	1
麦鶉	1
櫻貝	1
孕鹿	1

1.6. **『俳諧明治七百題』夏之部**

題	句数
時鳥	38
牡丹	21
若葉	20
袷	19
蛍	17
涼	17
清水	16
団扇	15
罌粟花	15
布穀	15
青田	15
杜若	14
夕立	14
蝉	13
水鶏	12
蓮	12
蚊帳	11
扇	11
蚊遣火	11
踊	11
夏ノ月	10
早月雨	10
紫陽花	10
蝸牛	9
鹿子	8
百合	8
暑	8
納涼	8
雲峰	7
風薫	7
若楓	6
老鶯	6
行々子	6
蚊	6
青さし	6
田植唄	6

題	句数
萍	6
苔ノ花	6
合歓花	6
短夜	5
明易夜	5
麦秋	5
青簾	5
日傘	5
夏山	5
午睡	5
茂り	5
夏木立	5
蚤	5
子子	5
更衣	5
新茶	5
粽	5
鵜	5
小鰺	5
帷子	5
打水	5
夏痩	5
葛水	5
雨祈	5
新樹	4
初鰹	4
松魚	4
蝙蝠	4
水馬	4
柏餅	4
梅雨	4
田植	4
早乙女	4
釣葱	4
青梅	4
若竹	4

題	句数
御祓	4
天ノ川	4
青嵐	4
秋近	4
燈籠	4
卯月	3
幟	3
夏野	3
卯ノ花	3
薔薇	3
初茄子	3
竹植	3
枝蛙	3
翡翠	3
毛虫	3
蝿	3
夏籠	3
早月闇	3
皐月晴	3
氷室	3
苗	3
樗ノ花	3
木下闇	3
鵜箒	3
夏羽織	3
心太	3
形代	3
炎天	3
虫干	3
百日紅	3
葛ノ花	3
皷子花	3
夕顔	3
瓜	3
練雲雀	3
送火	3

題	句数
薬玉	2
虎ヶ雨	2
紙帳	2
夏夜	2
夏雨	2
夏	2
芍薬	2
葉櫻	2
常磐木落葉	2
桐ノ花	2
花柚	2
柿ノ花	2
櫻実	2
一八	2
麦苅	2
笋	2
葭切	2
浮巣	2
飛蟻	2
蛞蝓	2
綿抜	2
鮓	2
汗巾	2
夏書	2
夏氷	2
河骨	2
撫子	2
夏菊	2
玉簪花	2
羽抜鳥	2
繭	2
辻ヶ花	2
七夕	2
貸小袖	2
星祭	2
硯洗	2

題	句数
土用	2
涼風	2
竹婦人	2
籠枕	2
瀑井	2
田草取	2
水飯	2
振舞水	2
魂棚	2
初夏	1
風炉	1
大矢数	1
夏海	1
汗	1
病葉	1
散松葉	1
梅若葉	1
棕櫚花	1
美人草	1
虎耳草	1
鴨足草	1
胡瓜花	1
麦奴	1
十薬花	1
厚朴花	1
夏枯草	1
青山椒	1
夏草	1
蓼	1
筒鳥	1
鴬附子	1
青鷺	1
通シ鴨	1
夏虫	1
蚊柱	1
蛭	1

題	句数
洗鯉	1
水貝	1
夏衣	1
単物	1
競馬	1
艾虎	1
有無日	1
安居	1
六月	1
皐月	1
紫羅欄花	1
忘草	1
金銀花	1
夏大根	1
石菖	1
紅花	1
榊ノ花	1
栗ノ花	1
山梔花	1
今年竹	1
照射	1
火串	1
躯狩	1
鵜舩	1
鵜縄	1
薄羽織	1
梅干	1
祇園会	1
六所祭	1
麻ノ葉流	1
茅ノ輪	1
日盛	1
苔清水	1
簟	1
土用干	1
雀乱	1

題	句数
生身魂	1
夏果	1
秋隣	1
凌霄花	1
竹皮落	1
太藺	1
麻苅	1
綿ノ花	1
風蘭	1
鷺草	1
眼皮花	1
韮ノ花	1
茗荷花	1
一夜酒	1
麻地酒	1
草市	1
初篭	1
経木流	1
盆の月	1

1.7. 『俳諧明治七百題』秋之部

題	句数
雪	34
時雨	29
虫	22
露	21
小春	21
枯野	21
菊	20
秋風	19
紅葉	19
千鳥	18
萩	17
月	16
雁	16
桐一葉	14
鹿	14
寒サ	14
残暑	13
稲妻	13
蕣	13
復花	13
落葉	13
水鳥	13
薄	12
秋暮	12
冬籠	12
榾	12
今朝秋	11
女郎花	11
炭	11
鷦鷯	11
名月	10
碪	10
霜	10
氷	10
山茶花	10
枯尾花	10

題	句数
相撲	9
蕃椒	9
冬ノ月	9
水仙	9
立秋	8
花火	8
秋ノ山	8
西瓜	8
荻	8
草ノ花	8
案山子	8
鳴子	8
渋鮎	8
煤掃	8
年ノ暮	8
霧	7
秋ノ月	7
鴫	7
蜩	7
蟋蟀	7
暴風	7
夜寒	7※1
落水	7
後ノ月	7
炬燵	7
頭巾	7
蒲団	7
初嵐	6
露時雨	6※2
秋ノ雨	6
稲	6
蜻蛉	6
鵙	6
二百十日	6
菌	6
新米	6

題	句数
網代	6※3
木枯	6
山眠	6
散紅葉	6
笹啼	6
鴛鴦	6
鉢敲	6
師走	6
冬至	6
新涼	5
秋ノ水	5
木槿	5
藤袴	5
鶏頭花	5
柿	5
瓢	5
蟷螂	5
花野	5
蕎麦花	5
渡鳥	5
新酒	5
夷講	5
初冬	5
初霜	5
木ノ葉	5
麦蒔	5
大根引	5
寒菊	5
浮寝鳥	5
鴨	5
河豚	5
紙子	5
足袋	5
冬至梅	5
餅搗	5
年ノ市	5

題	句数
大晦日	5
龍田姫	4
初月夜	4
秋	4
散柳	4
紫苑	4
蓼ノ花	4
蓮実飛	4
尾花	4
秋蝉	4
稲雀	4
秋ノ蝶	4
初紅葉	4
四十雀	4
啄木鳥	4
梅嫌	4
初雪	4
温石	4
皹	4
冬ノ山	4
枯草	4
茶ノ花	4
木兎	4
茶口切	4
薬喰	4
里神楽	4
和布刈	4
年忘	4
初秋	3
蔓珠沙花	3
糸瓜	3
芙蓉	3
鳩吹	3
初鮭	3
螽	3
竈馬	3

題	句数
蚣蝑	3
茶調虫	3
今日月	3
月ノ雨	3
木犀花	3
薬堀	3
葡萄	3
木賊苅	3
破芭蕉	3
無神月	3
長夜	3
暮ノ秋	3
蔦紅葉	3
栗	3
崩簗	3
柚味噌	3
小六月	3
雪吹	3
霰	3
初氷	3
火鉢	3
枯芦	3
暖鳥	3
夜輿引	3
納豆	3
神迎	3
寒苦鳥	3
氷豆腐	3
岡見	3
年ノ坂	3
扇置	2
秋ノ空	2
月秋	2
秋ノ川	2
秋ノ聲	2
秋ノ日	2

題	句数
木通	2
稲穂	2※4
稲ノ花	2
芭蕉	2
秋海棠	2
雁来紅	2
野菊	2
鬼灯	2
稲苅	2
轡虫	2
蚯蚓啼	2
鹿笛	2
添水	2
水鳴子	2
放鳥	2
駒迎	2
葉月	2
竹春	2
雷聲収	2
居待月	2
月見	2
月ノ友	2
月ノ雲	2
間引菜	2
秋積	2
渡雁	2
鶺鴒	2
河鹿鳴	2
酴■■	2
十月	2
朝寒	2
秋深	2
行秋	2
冬隣	2
冬近	2
草紅葉	2

題	句数
色かえぬ松	2
尾越鴨	2
紅葉鮒	2
後袷	2
新蕎麦	2
達磨忌	2
雨忌	2
水涸	2
炉開	2
月冴	2
橇	2
氷柱	2
火桶	2
水俤	2
胼	2
冬ノ雨	2
冬ノ夜	2
冬ノ川	2
冬	2
石蕗花	2
冬木立	2
冬田	2
罧	2
鷹	2
冬蝿	2
鯨	2
干菜	2
干大根	2
河豚汁	2
酉ノ市	2
吹華祭	2
事始	2
節気候	2
米洗	2
除夜	2
年ノ夜	2

題	句数
年ノ瀬	2
年ノ年	2
八月	1
秋涼	1
身ニ入	1
蚊帳別	1
絵行器	1
秋ノ雲	1
秋ノ鐘	1
秋日和	1
一葉舩	1
茶花	1
蘭	1
白粉花	1
桔梗花	1
地楡	1
枝豆	1
若莨	1
零餘子	1
秋田	1
稲筵	1
稲垣	1
竹ノ春	1
荒鷹	1
秋蚊	1
虫棋	1
鈴虫	1
草雲雀	1
田虫送	1
秋ノ蝿	1
かれさせ	1
洲走	1
江鮒	1
鰯	1
焼帛	1
冷麦	1

題	句数
後雛	1
肌寒	1
秋夕	1
初汐	1
満月	1
望月	1
既望	1
立待月	1
月ノ山	1
名ノ木散	1
茸狩	1
稲ノ秋	1
行乙鳥	1
初雁	1
色鳥	1
山雀	1
目白	1
椋鳥	1
新綿	1
彼岸	1
不堪田奏	1
長月	1
漸寒	1
秋ノ別	1
秋果	1
櫻紅葉	1
柿紅葉	1
野山錦	1
漆掻	1
霜踏鹿	1
柚釜	1
熟柿	1
菊酒	1
十夜	1
御命講	1
住吉升市	1

題	句数
北窓塞	1
鐘冴	1
雪車	1
霙	1
懐炉	1
湯婆	1
手焙	1
炭団	1
埋火	1
冬ノ風	1
冬牡丹	1
枯芭蕉	1
枯菊	1
枇杷花	1
葱	1
冬ノ雁	1
生海鼠	1
風呂吹	1
庭大	1
大師講	1
霜月	1
臘入	1
霜柱	1
雪しまき	1
乾鮭	1
年木	1
衣配	1
古暦	1
掛乞	1
年ノ波	1
年ノ関	1
大年	1

※1～※4　それぞれ本文中に 2 回掲載されているが、句数を纏めて集計

2. 人名録

2.1. 『題詠俳諧明治千五百題』人名録

人名録追加　いろは順

俳号	住所	本名	その他
一府	陸前國牡鹿郡渡ノ波町	大久保一府	
治風	東京南葛飾郡治平新田	岩瀬要七	
竹窓	三河國北設楽郡下黒川村	清川隆吉	
荷洲	陸中國紫波郡乙部駅	城戸吉六	
閑茶	相模國髙座郡上溝村	榎本儀兵衛	
可梁	豊後國日田隈町	佐藤嘉平	
棹舟	伊豫國宇摩郡土居村	三宅氏	
棗古	上野國前橋日輪寺村	天野氏	
延子	東京深川猿江町	最上氏室	
鶴朋	武蔵國埼玉郡久喜町	榎本氏	
花好	陸前國牡鹿郡石巻浦町	保原氏	
梧丘	上總國市原郡鶴舞	岩崎重雄	
鴻湖	佐渡國人今在東京	芳野確次	
愛之	近江國伊香郡西阿閉村	手島芳三郎	
柴夫	東京南葛飾砂村	荒井明知	
亀友	同上	十河長蔵	
金松	甲斐國東八代郡錦村	網野晋造	
箕堂	相模國厚木天王町	小島為助	
其流	伊豫國宇摩郡下柏村	加地貢	
己有	後志國岩内郡橘町	佐藤仁左エ門	
嘯々	東京深川猿江町	最上純堂	
嘯山	同南葛飾郡砂村	荒井明良	
松右	同南葛飾毛利村	松岡録之助	
支節	同下谷練塀町	入来庵	
二鼎	尾張國知多郡加木屋村	久野善右エ門	
沙印	後志國岩内郡橘町	小松暢次郎	
生水	備前國邑久郡長船	馬場良助	
水石	大和国十市郡櫻井駅	中島與平	
而嘯	常陸國多賀郡平潟	後藤松丘	

本集所載人名録

いゐ之部

一鼎	北海道檜山郡江差姥神町	関川平四郎	
一和	相州大住郡中原下宿	原四郎兵衛	
一醉	同淘綾郡万田村	真壁米太郎	

一由	伊勢國神社港	喜田真也	
一兄	常陸國河内郡伊佐津	岡野与兵衛	
一鶴	備中浅口郡西小坂	佐藤信隆	
一林	下野國大田原宿	川上利一	
一算	三河國渥美郡赤沢村	大槁荘吉	
一榻	讃岐国丸亀町	佐野文岱	
一由	信州伊那郡鼎村	佐々木荘三郎	
一滴	志摩国鳥羽錦町	前田兼充	
一週	三河国渥美郡伊古部村	田中周平	
一琴	上野国新町駅	久保才七郎	
一舫	常陸国河内郡中島村	中島要助	
一徳	同上大徳村	関口一徳	
一芳	信州更級郡正和村	滝沢平十郎	
一閑	羽後国鹿角郡花輪町	髙瀬盛虬社中	
一眺	同上		本名空欄
一風	磐城国菊多郡関田町	髙木之朝	
一蚯	常陸国多賀郡平潟	根本関平	
一有	越中国富山町		本名黒塗り
一旭	豊前国小倉下曽根	畠中忠三郎	
磐の	伊勢国山田岡本町	山原得水女	
幽香	同宇治五十鈴川	河村洗三	
邑邦	武州入間郡大八木村	村本邑邦	
糸麿	常陸国河内郡狸穴村	油原汀窓	
為麟	羽後秋田郡久保田楢山	薄井健三	
維夕	筑前福岡枡木屋町	上野維夕	
逸素	肥前東彼杵郡上波佐見	山道清兵衛	
有哉	武州秩父郡大宮郷	文輝庵有哉	
幽亭	伊豫国宇和島富沢町	加幡長發	
猗竹	常陸河内郡竜个崎町	岡野利兵衛	
以兄	下総国相馬郡上曽根村	大野永々齋	
有岳	陸奥国津軽黒石町	伊津傳兵衛	
聿水	東京本所相生町三丁目十二番地	久保木聿水	

ろ之部

魯堂	東京府下千住中組八十四番地	髙木市兵衛	
露月	越後国岩船郡村上	八子忠光	
露好	同上	川上幸蔵	
蘆水	豊前國小倉京町	村上徳造	
露英	陸奥國北津カル郡雀田村	山内祐古	

露心	越中上新川郡水槁西大町	篠田宇一郎	
魯雲	阿波國那賀郡和食町	松浦房次郎	
魯周	下総國香取郡神嵜	飯岡魯周	

はほ之部

梅年	東京深川亀住町七番地	雪中庵服部氏	
馬耳	同芝區南久間町二丁目	對竹菴黒木氏	
半醉	同南葛飾猿江村	足立亀の屋	
芳泉	同深川清住町二十五番地	余滴庵沢口氏	
保壽	同日本槁區新右衛門町六番地	青柳文右衛門	
半窓	伊豫國今治中濱町	田頭武三郎	
梅宿	長門國赤間関観音崎町	石田清太郎	
梅理	下総國香取郡上須田村	黒田重右衛門	
梅枝	信州小縣郡下武石村	伏見篤敬	
梅晴	讃岐國髙松新通町	賀雀庵中山氏	
梅節	同小豆郡土荘村	三枝常次	
梅窓	阿波國那賀郡福井村	雲淵戒存	
梅谷	駿州興津驛	大久保利一	
梅糸	陸前仙臺荒町	花沢梅糸	
梅雄	阿波國那賀郡才見村	篠野貫治	
梅塢	佐渡国加茂郡夷町	磯野信吉	
梅可	常陸國河内郡大徳村	小泉孫右衛門	
柏軒	在咸鏡道元山津領事館	吉副喜八郎	
汎翠	下総香取郡押砂村	百月庵髙柳氏	
柏園	同海上郡琴田村	服部柏園	
白隣	甲州勝沼駅	萩原清兵衛	
芳盛	因州邑美郡吉方町	村上慎終	
半山	遠州榛原郡上長尾村	河村半山	
甫	尾州名古屋正万寺町	黒田はしめ	
伯雅	豊前宇佐郡笠松村	筧伯雅	
芳笠	讃州丸亀通町	吉本半右衛門	
芳直	同上	中島惣兵衛	
梅雪	武州榛沢郡新戒村	槁本兼二郎	
破玉	在後志小樽港		本名空欄
八鳩	常陸竜个崎町	真瀬八鳩	
半田	同上	小泉奇峰社中	
芳洲	陸中盛岡新穀町	澤田喜兵衛	
芳齋	越中富山惣曲輪	立花蔭隆	
蓬宇	三河國豊橋駅	呉井園佐野氏	

北洲	上野國新町駅	小林信平	
北海	讃州小豆島	大北新七	
北翠	同大内郡引田村	四宮北翠	
抱清	阿波國小松島	七條抱清	
宝亀	磐城國伊具郡角田	目黒亀五郎	
甫三	陸前仙臺肴町	鎌田甫三	
歩山	下総香取郡飯髙村	平山十兵衛	
北洲		島本氏	住所空欄

へ之部

米珠	丹後國与射郡宮津馬場先	若井傳兵衛	
米年	駿州駿東郡上古城村	勝眼寛志郎	
ノ左	信州更級郡西寺尾村	月院社丸山氏	

と之部

等栽	東京日本橋區通二丁目九番地	佳峰園鳥越氏	
桃李	同深川牡丹町	山本徳行	
得之	同上富川町	河原徳立	
稲處	西京佛光寺御幸町	樗庵岸田氏	
得水	伊勢山田外宮	山原千秋	
董水	武州秩父郡三峯社	廣瀬清人	
冬湖	下毛大田原駅	津久井新一郎	
桃宜	同宇都宮	鐘屋九瓶	
東月	磐城國中村大町	佐藤与八	
桃壺	同田村郡石ノ森村	佐久間九一郎	
道生	信州更級郡西寺尾村	五明元作	
東岸	同上伊那郡美篶村	橋爪房太郎	
徳風	陸奥津軽郡尾上村	西谷徳風	
洞雨	阿波國板野郡川端村	江口黙也	
冬語	伊豫國松山中ノ川筋	髙市冬語	
桃園	肥後國八代郡宮原町	久保貞七	
杜月	肥前國大村上波佐見	川口杜月	

ち之部

澄江	東京両國薬研堀廿二番地	大梅居秦氏	
竹舎	東京愛宕下町一丁目	進藤健造	
竹陰	同南葛飾猿江町	梅村竹陰	
茶因	同不二見町二丁目	神田信吉	
潮水	大坂今橋二丁目	五木庵島津氏	
竹左	阿波國板野郡東貞方村	清水兵次郎	
竹潭	同上	小縣兆平	

竹登	同那賀郡富岡町	保富竹三郎	
竹條	同板野郡奥野村	篠原徳太郎	
竹鴬	伊勢國宇治五十鈴川	中瀬馬三郎	
竹畑	相州淘綾郡万田村	吉川治郎右衛門	
竹華	遠州二俣宿	佐々木竹華	
枕肱	豊前国小倉下曽根	富二本登一	
竹友	同上	竹畠友九郎	
竹良	甲州勝沼駅	萩原栄造	
竹茁	美濃山縣郡髙島	丹羽副治	
竹里	常陸國河内郡入地村	木村金兵衛	
遅水	下毛大田原駅	若林長四郎	
潮宜	同那須郡小川駅	薄井三造	
塵外	相州大住郡今泉村	清水喜太郎	
朝光	三河國北設楽郡富山村	太田朝光	
鳥牙	因州鳥取湯所町	井上正路	
椿年	志州鳥羽錦町	加納善左衛門	
知拙	安藝國廣島立町	藤井善一	
千尋	在熊本鎮臺	守山弘和	
釣月	下フサ行徳堀江	大塚釣月	
澄霞	常陸土浦町	五頭清兵衛	

りれ之部

涼坪	東京府下南葛飾柴又村	鈴木安五郎	
柳湖	同千住南組千二百十三番地	池上幸助	
涼花	武州足立郡鳩个谷	矢作七左衛門	
犂春	西京人漫遊中		本名空欄
涼雨	相州大住郡寺田縄村	竹陰舎涼雨	
李川	三河国渥美郡田原駅	鈴木作吉	
流美	大坂江戸堀上通二丁目	八千房流美	
里蝶	伊豫國今治町	村上房五郎	
柳吹	備前上道郡松嵜村	岸本敏次郎	
里岐雄	羽後秋田郡八田大倉村	石井順治	
里川	陸奥津軽郡尾上村	工藤里川	
凌冬	信州上伊那郡伊那部村	馬場凌冬	
柳絮	常陸多賀郡大津濱	宮崎勝強	
李塘	下総香取郡幡谷村	葛生孝造	
李暁	同北相馬郡須藤堀	渡邉李暁	
隆旭	同海上郡網戸村	伊藤市郎右衛門	

をおあ之部

鴬笠	東京小石川関口	無事庵塩坪氏	
乙朗	同麹町六丁目十一番地	旦暮庵	
乙彦	漫遊今在静岡	對梅宇	
緒依	同日本橋万町	津久井をより	
鴬居	伊豫國温泉郡小栗村	梅滴庵奥平氏	
應波	因州鳥取吉方町	石川基資	
鴬梭	阿波國那賀郡下福井村	内藤雄太郎	
鴬谷	相州大磯宿	鴫立庵社中	
鴬雅	東京府下南葛飾猿江	梅村金牛舎	

わ之部

和親	下総香取郡神崎本宿	木内清蔵	
和仙	上毛山田郡下久方村	小堀禅性	

か之部

閑窓	上毛邑楽郡館林	荒井胤太郎	
河梁	上総武射郡松ケ谷村	河野五郎吉	
歌舌	東京浅草西三筋町	伊藤静齋	
珂水	東京人方今漫遊中		本名空欄
佳大	伊豫國野間郡延喜村	村瀬英親	
霞城	遠州豊田郡羽鳥村	松島格太郎	
可洗	尾州名古屋鶴南社	小島可洗	
可節	甲州勝沼駅	萩原可節	
可良	信州喬木村阿島	市瀬清八	
岸梅	備前上道郡射越村	岡崎與太郎	
可梁	豊後日田隈町	佐藤可梁	
閑水	下総千葉町市場	山内平兵衛	
可夕	同北相馬郡須藤堀	巻長吉	
可中	常陸河内郡大徳村	大徳可中	
可慎	羽後秋田郡保戸野愛宕町	後藤七太郎	
可友	肥後八代郡野澤村	迎東翁	
介々	常陸真壁郡吉間村中町	蜷澤長吉	

よ之部

よし彦	備前國岡山久山町	石井栄次郎	

た之部

太年	東京神田三サキ町	藤庵太年	
大喬	同室町一丁目	九屋源四郎	
玉成	同下谷竜泉町六番地	安川玉成	
岱梅	同五番町三番地	伊藤元助	
湛水	遠州周知郡々役所	足立孫六	

卓水	讃岐國小豆島土荘村	三枝林蔵	
卓山	伊豫國越智郡泊リ村	岡田隆吉	
太雅	武州三峰山	中山茂	
濯園	常陸竜个崎町	石川彦二郎	
岱馬	豊前國小倉	吉本芳笠社中	

れ之部

漣々	東京牛込東五軒町廿五番地	花垣大久保氏	
了逸	武蔵国浦和官邸	加治良一	
連水	伊豆国芦次郡佐野	勝朕猶右衛門	
麗岬	三河宝飯郡大村	中村徳二	
令松	常陸河内郡稲荷村	松田源兵衛	
連甫	伊豫國三津濱三穂町	森栄三郎	

そ之部

素水	東京日本橋呉服町廿八番地	月の本小野氏	
霜村	同本所亀沢町	山口隆栄	
壮央	同新吉原町	奥田壮央	
宗露	下総香取郡船越村	石井宗露	
叟明	同多古島村	宇井又右衛門	
蒼翠	同香取郡鏑木村	塚本治右衛門	
素山	秋田縣下田町	會田多仲	
蔵中	伊勢國津西検校町	細井守敏	
宗亭	同松坂日野町	長井宗亭	
草室	備前邑久郡五明村	近藤有年	
鼡六	阿波國板野郡東貞方村	清水基忠	
素仙	信州飯田箕瀬町	横井素仙	
素問	伊セ國津佐伯町	山本素問	
徂康	尾州名古屋東方町	松浦九右衛門	
素凉	遠州山名郡豊濱村	伊藤政一郎	
草畝	肥前東彼杵郡上波佐見	川口氏	
素逸	駿州駿東郡一色村	湯山唯英	
双竹	播州赤穂郡加里屋町	三宅幸次郎	
草山	陸中鹿角郡花輪町	髙瀬盛虬社中	
掃水	常陸河内郡稲荷村	松田忠兵衛	
爽甫	同大徳村	小山爽甫	
楚山	在下総海上郡網戸村	飯尾楚山	

つ之部

月彦	東京浅草東元町松平社	東杵庵鈴木氏	
月雄	越後國蒲原郡西簑口村	坂井周喜智	

月彦	下総香取郡佐原	伊能彦作	

ね之部

年山	下フサ下埴生郡羽鳥村	石嵜忠兵衛	

な之部

南齢	大坂上本町通八丁目	實相寺黄花庵	
楠枝	信州上伊那郡赤穂村	原喜兵衛	
那美女	同伊那部村	馬場凌冬室	
南棲	備前磐梨郡肩脊村	川崎疇吉	

ら之部

蘭月	豊前小倉室町	松永伊助	
嵐月	淡路國廣石駅	福島忠平	
楽只	上総國山邉郡田間村	喜多村与兵衛	
良志久	下総酒々井駅	鶴岡縫之助	

む之部

無染	阿波國那賀郡才見村	長善寺白蓮社	
夢外	下毛日光鉢石町	観音寺國府濱氏	
無漏	東京南葛飾猿江町	足立行	

う之部

宇山	東京上槙町二番地	栗庵間宮氏	
雨江	同南葛飾猿江二番地	足立翠嵐居	
雲容	相州淘綾郡二宮村	大應寺山口海門	
有柳	武州入間郡毛呂本郷	春秋庵有柳	
雲濤	同栗槁駅	池田鴨平	
雲卧	信州上伊那郡飯島村	吉瀬國治	
宇貢	同飯田池田町	福島與五郎	
雨泊	伊ヨ國松山橘村	永川雨泊	
宇雀	阿波國那賀郡豊田村	森安衛	
羽長	同名東郡佐古村	鳥山章蔵	
雨水	讃岐國金倉村	脇平五郎	
雨節	伯耆國久米郡倉吉東町	寺本平太	
雨丈	下フサ千葉町	鈴木修就	
雨村	同北相馬郡須藤堀	山口雨村	
宇郷	常陸龍个崎町	宇井直七	

く之部

完岱	東京赤坂田町六丁目一番地	不去庵完岱	
花朝	同深川佐賀町二丁目	松本徳蔵室	
華香	同南茅場町十一番地	比留間徳太郎	
禾年	駿河國御厨藤曲村	三井園禾年	

蝸堂	同静岡江川町	松永平七	
花村	三河國渥美郡豊南村	鳥田長造	
花硯	甲州東八代郡竹居村	中村正五郎	
黒樵	伊勢國津成蹊社	田中喜平	
鶴影	備前國岡山元塩見町	本行寺	
鶴皐	相州淘綾郡万田村	吉川又之助	
花角	常陸河内郡下須田村	黒田花角	
華城	武州杉戸宿	石神禎助	
花鸚	筑前國柳川福島町	晴雪庵古池氏	
花庭	同柳川本町	王子幸春	

や之部

楊堂	三河國北設楽郡市原村	大槁亭	
夜牛	遠州榛原郡藤川村	豊田定八	
陽山	羽前米沢銅屋町	髙槁六左衛門	
也壮	羽後大館馬喰町	石田新四郎	

ま之部

松雄	東京日本橋區檜物町	金令舎松雄	
万年	遠州榛原郡	豊田夜牛男	
増女	三河渥美郡赤沢村	某氏	

け之部

月杵	東京蛎売町二丁目	柳兮舎月杵	
元海	伊勢國宇治五鈴川	山中甚作	
惠畝	遠州榛原郡大柳新田	水野良介	
桂花	東京本所亀沢町	山口霜村室	
圭齋	信州飯田十六番町	橘圭齋	
桂雨	備中小田郡笠岡町	吉見平太郎	
玄黙	土佐ノ人漫遊中		本名空欄
月兮	常陸多賀郡平潟	吉田月兮	

ふ之部

富水	東京小石川大塚町九番地	芙蓉庵西谷氏	
文衡	武州秩父郡大宮郷	坂本順泰	
文友	同入間郡毛呂本郷	岡崎増次郎	
文圃	阿波國那賀郡椿泊浦	幹龍哲	
文真	下フサ香取郡庁巻村	篠田文真	
撫松	在韓對馬ノ人		本名空欄
不求	伊豫國桒村郡壬生川村	一色範美	
富水	出雲國能義郡廣瀬中町	野津孫兵衛	
文禮	東京赤坂臺町一番地	岡部長直	

こ之部

呉仙	東京四ツ谷佐門町百四番地	太白堂松平氏	
古笠	同浅草馬道一丁目	時両庵古笠	
交雅	同小名木川通上大島町	渡邉敏通	
護静	同カキカラ町	丸子護静	
五功	武州五日市町	萩原利兵衛	
克明	同秩父郡皆野村	飯野要碩	
晃雄	同上白久村	新井荘右衛門	
孤松	駿州有渡郡上清水村	岩瀬孤松	
胡竹	甲州東八代郡竹居村	落合胡竹	
孤遊	豊前小倉魚町	長尾源右衛門	
午山	同築城郡湊村	井上完治	
黄玉	備前上道郡中野村	小松佐平治	
語外	備後國甲山町	正田良三郎	
吉海	下野國大田原駅	鈴木喜平	
語山	同上	中津川嘉秀	
湖陽	磐城國中村駅	海老原甚兵衛	
湖詠	同上	松本仁右衛門	
五拙	駿州静岡横内町	青木錬三	
梧桐	伊豆國三島市个原町	香雲堂安藤氏	
好山	静岡人	右同社中	
虎遊	下総匝瑳郡長岡村	勝朕治右衛門	
五菖	土佐人漫遊中	尾嵜氏	

て之部

庭甫	東京本銀町	辻惣兵衛	
汀夫	武州五日市町	萩原五功室	
蝶睡	在相州横須賀	河村俊章	
鼎湖	三河國南設楽郡新城村	池本善吉郎	
聴濤	讃州丸亀西平町	小山米蔵	

あ之部

愛竹	美作國津山大通	横山萬竹堂	

さ之部

山月	東京浅草茅町	孤山堂山月	
山端	同内山下町一丁目二番地	中谷秋夜庵	
山光	横濱元町二丁目	鈴木定右衛門	
定一	三河国北設楽郡三沢村	鷹見定一	
採花	信濃人漫遊中	今在小築庵	
西星	磐城中村駅	鈴木要吉	

三喬	同宇多郡藤崎村	吉田栄之助	
定一	越後國魚沼郡塩沢村	盲人定一	
三芝	因州鳥取湯所町	寺島三芝	
西行	備後人今在遠州藤川村	中西行	
三桃	越中富山海老町	大野健蔵	
才水	同上		本名黒塗り
山呼	常陸河内郡大徳村	長塚五出	

き之部

菊雄	東京深川佃町	閑樹園青山氏	
菊之	同神田佐久間町三丁目	小林柳塘	
臼左	武州青梅駅	横川好々居	
玉樹	同浦和宿官邸	澤井環	
芹舎	下京第七組新門前中ノ町	泮水園八木氏	
九成	駿州駿東郡佐野村	岩崎佐十郎	
喜雀	伊豆国加茂郡原保村	土屋真五郎	
蟻城	志州答志郡鳥羽錦町	稲垣銕心齋	
居卜	三河国北設楽郡市原村	宮下兼十郎	
暁雨	備後深津郡福山胡町	小松七左衛門	
祇園	備前邑久郡本荘村	祇園鼎	
旭山	伊ヨ国今治町	髙龍寺	
其戎	同和氣郡三津濱	大原其戎	
吟雪	同松山松前町	堀内織太郎	
寄松	同野間郡神宮村	木原茂	
菊應	阿波国那賀郡才見村	篠野保次郎	
曲川	出雲国松井天神町	山内曲川	
居一	豊前小倉	近藤善六	
其調	在福岡	甲田倭文兄	
亀月	肥後八代郡宮原町	田川理一	
杏庭	同上	中村新八	
吟風	羽後北秋田郡阿仁前田	荘司弄月園	
歸楽	同南秋田郡船越村	太田久治	
掬水	同東大飯三ノ丸町	山口出太郎	
菊蓉	同秋田郡久保田	蕗の家社中	
奇柳	磐城伊具郡角田本郷	市場亀吉	
旭齋	下フサ香取郡多田村	東聲画庵	
喜明	同上須田村	黒田長太郎	
錦谷	同小見川駅	須田錦谷	
季山	同銚子目出度町	信田儀兵衛	

旭旦	常陸國笠間五騎町	山本正芳	
旭山	同上	豊田喬門	
漁村	同多賀郡平潟	武子藤右衛門	
奇峰	同竜个崎町	小泉安兵衛	
旭扇	越後國村上山邉里	中村飛虎八	
芹岱	越中富山平吹町	杏外海	
己有	在後志國小樽港	佐藤仁左衛門	

ゆ之部

友昇	横濱南仲通	森田友昇	
友笑	三河國渥美郡城下町	神藤伊十	

み之部

幹雄	東京蛎売町二丁目明倫社	香楠居三森氏	
未醒	同本所亀沢町一丁目	山口弘	
三千風	同番場町十番地	扶桑庵	
未隆	常陸土浦真鍋町	掛巣源八	
三千雄	豊前國宇佐町	井本和平	
三都雄	筑前福岡東中洲	鬼塚勘吾	
岷水	陸中盛岡大清水小路	江刺家了閑	

し之部

詢蕘齋		藤堂氏	住所空欄
二洲		永井氏	住所空欄
如扇		井上氏	住所空欄
春湖	東京深川佐賀町一丁目	小築庵橘田氏	
守拙	同四ツ谷仲町二丁目八番地	伊藤金治	
詩竹	同深川長堀町	田喜庵詩竹	
二京	同下谷坂本四丁目	竹島二京	
乗化	同浅草亀岡町二丁目	村上清右衛門	
秀葉	同南新川銀町	三槁甚四郎	
子弘	同深川西森下町	日吉市之助	
松青	同本所外手町	染谷恭助	
之引	同両國薬研堀町	秦勝之助	
而洗	武州入間郡毛呂本郷	田島甚右衛門	
譲山	同五日市町	萩原鼎	
十湖	遠州笠井駅	松島吉平	
史泉	同豊田郡笠西村	髙塚史泉	
周湖	同周智郡田河内村	小林多四郎	
如牛	同榛原郡上長尾村	八木又右衛門	
守中	同豊田郡中善地村	松島儀平	

壽仙	駿州興津薩埵村	深沢勝太郎	
松芳	同駿東郡上古城村	髙杉喜六	
昌山	甲州西八代郡九一色村	佐野荘蔵	
枝禮	信州上伊那郡飯島村	小宮枝禮	
司水	同下伊那郡里見村	矢沢善四郎	
如沢	同上	矢沢八右衛門	
蕉月	同飯田町	橘圭齋社中	
壽水	三河国北設楽郡市原村	鈴木能登彌	
壽道	相州大磯宿	鴫立庵	
至哉	同大住郡田村	節庵至哉	
松志	志州鳥羽大里町	長島角太夫	
春甫	同上	稲垣久米之助	
襦鶴	尾州知多郡加木屋村	久能増右衛門	
松翁	讃岐国多度郡中村	乾百内	
真海	同大内郡白鳥	教風社長尾氏	
二江	同丸亀中津	村隅治八	
拾蕊	阿波國那賀郡椿泊浦	玩古庵宮崎氏	
拾英	同上	宮崎拾蕊孫	
拾菓	同上	吉水穏誉	
思風	同徳島髙田中ノ町	髙木思風	
菖溪	同板野郡川端村	安藝熹平	
如林	同名東郡佐古村	池邉覚三郎	
春川	同那賀郡富岡町	祥瑞源三郎	
松月	同上才見村	土居浦三郎	
二春	伊豫国周布郡三津屋村	砂田二春	
松塘	土州髙知大川淵	岡義和	
沙明	備前上道郡西大寺	山口安太郎	
松霧	同岡山上ノ町	吉田松霧	
此桂	備後深津郡福山笠岡町	後藤武兵衛	
市山	豊前下毛郡中津諸町	竹岡順三	
樹雪	同小倉米町	宮崎治兵衛	
指月	同上中曽根	稲垣茂喜三郎	
春蒼	伯耆會見郡法勝寺宿		本名空欄
二松	同上		本名空欄
蕉影	越後岩船郡村上	前田弘太郎	
春塘	同上飯野町	後藤常英	
松星	磐城国中村宇多川町	佐藤與兵衛	
松枝	同上	槁本利助	

松露	同上	佐藤松星男	
如風	同上	佐藤卯太郎	
松圃	岩代国耶麻郡塩川駅	豊島松圃	
二葉	羽後国久保田表銕砲町	石川和助	
壽山	陸前仙臺国分町	中村直三郎	
沙山	今在羽後	梅の本	
守朴	能登国輪島町	久保喜平	
十水	漫遊生	四時庵	
舜岱	在西京		本名空欄
仁里	下総埴生郡成田人今在上総	髙安主計	
謝孫	同香取郡多田村	東銀治	
如木	同上虫幡村	清水寺	
盡誠堂	同下埴生郡松嵜	湯淺尽誠堂	
若楓	同取手駅今在東京	富塚清三	
祥雨	同北相馬郡須藤堀	渡邉太郎左衛門	
神霞	常陸多賀郡大津濱	印東氏羕	
耳洗	同上平潟	篠田本庵	
脩竹	同東茨城郡上飯沼村	白田脩竹	
只山	同河内郡柴崎村	吉田只山	
蕉雪	同上	生板蕉雪	
四清	同上大徳村	関口惣左衛門	
絲風女	同上龍个崎町	小泉奇峰母	
松濤	同上	杉野六三郎	

ゑ之部

畑雨		本荘氏	住所空欄
永機	東京向島三囲社内	其角堂晋氏	
永年	同浅艸壽町二十三番地	真實庵鈴木氏	

ひ之部

氷齋	肥後八代郡宮原町	濱田陸三	
百嶺	三河渥美郡田原町	糟谷真助	
美静	下総小見川八軒町	須田利兵衛	

も之部

黙平	京槇區霊岸島髙島町九番地	前田藤蔵	
木尾	因州鳥取湯所町	山川木尾	
木雞	土州髙知小髙仮寺町	島崎凉平	
木甫	信州飯田町	不争庵	

せ之部

精知	東京日本槇區呉服町廿番地	語石庵精知	

千畝	同牛込肴町三十番地	大夢庵千畝	
成雅	同下谷金杉上町六番地	三素庵恭道	
精之	同赤坂溜池榎坂町四番地	隻雀庵精之	
雪詠	武州比企郡熊井村	髙木宇一郎	
成之	同青梅駅西分	髙野傳吉	
清進	同秩父郡白久村	木村玄泰	
静處	尾州西枇杷島	大木重次郎	
青左	伊勢度會郡田丸	岡本寛次郎	
雪柴	駿州静岡研屋町	山口半次郎	
仙夫	越中富山泉町	相羽文一郎	
雪主	越前國	永平寺	
青暁	越後国岩船郡葛篭山	齋藤清右衛門	
雪野	阿波国板野郡奥野村	奥村廣助	
雪外	同上徳命村	猪子強哉	
節水	讃岐小豆島土荘村	三枝重太郎	
碩齋	伊豫東宇和郡髙野子村	佐三川好忠	
石友	豊後大分郡松岡村	安藤石友	
静水	伯耆會見郡法勝寺村	前田平太郎	
西洲	肥前有田泉山町	古賀文哉	
西立	信州更級郡百和村		本名黒塗り
雪堂	三河国設楽郡髙山村	田邉逸二	
仙民	陸前仙臺南師村	鈴木吉兵衛	
青宜	同国分町虎屋横町	島本半七	
盛虬	陸中鹿角郡花輪町	髙瀬宗兵衛	
扇可	磐城田村郡角田本郷	廣岡嘉七	
仙哥	常陸筑波郡矢田部町	渡邉総左衛門	
仙壺	同河内郡	大徳仙壺	
誠齋		仙壺男	住所空欄
成田	同上竜个崎町	小泉奇峰社中	
清志	下総香取郡	根本清志	
静荷	同匝瑳郡東谷村	角田権兵衛	

す之部

粹白	下京區第十九組植松町	勝村治右衛門	
醉雨	尾州名古屋長島町通島田町	吉原醉雨	
翠嵐	越後国魚沼郡塩沢駅	黒田玄琢	
翠河	東京府下千住宿	中伊勢屋翠河	
水芝	播州赤穂郡加里屋町	隻竹社中	

此外一二句入捨ノ君又ハ初心少年輩ノ如キハ姓氏ヲ記セサルモノ多々アリ候ハ又後集フ待テ悉ス可シ

2.2. **『俳諧明治七百題』人名録**

国名	俳号
東京	月彦
	等栽
	春湖
	宇山
	素水
	精知
	呉仙
	尋香
	梅年
	詩竹
	きく雄
	千畝
	五雀
	芳泉
	山月
	花朝女
	完岱
	金羅
	予雲
	鶯笠
	素石
	永機
	謝徳
	成雅
	大喬
	富水
	茂翠
	菊焉
	秀奇
	浪兄
	万子
	華旭女
	乙朗

国名	俳号
東京	竹葉
	翠葉
	菊外
	馬勇
	柳栽
	亀山
	一葉
	五風
	詩葉
	えひら女
	雀遊
	■香
	李仙
	益渓
	柳叟
	生水
	柳泉
	桂花
	沙山
	愛海
	五休
	太年
	黙平
	松雄
	月杵
	石丈
	蓮所
	聴松
	三千守
	鴎邨
	俊賀
西京	芹舎
	稲処

国名	俳号
西京	拾山
	百可
	漁藻
大阪	素屋
	潮水
	月■
	連梅
横濱	友昇
	左助坊
	嵐松
	奇水
摂津	卓志
	其隣
伊勢	梅有
	閑美
尾張	甫
	羽海
	醉雨
	静処
	三楓
三河	蓬宇
	石芝
遠江	十湖
	木潤
駿河	かつら女
	末成
甲斐	香芸
	稲守
	基雄
	椿年
	杉夕
	友思
	園守

国名	俳号
甲斐	柳子
	竹良
	白隣
	道雄
	惺地
	田彦
	雷石
	為川
	仙輅
	稀遊
	喜連川
	花翫
	斗月
	九江
	清香
	亀■
伊豆	士敬
	梧桐
	連水
	里柏
	愛山
	椎吟
	始耕
相模	蔦雄
	故崕
	閑茶
武蔵	有柳
	車悦
	有隣
	梅輪
	花詠
	好鴬
	可尊
	角丈
	友甫
	柳佳
	臼左

国名	俳号
武蔵	佳翠
	恵布
	松翁
	初来
	杜鳥
	まきの
	志成
	初霞
	桃子
	八鴬
	喜山
	幽井
	對鵞
	一昌
	一畷
	越鶏
	不扁
	雀眠
	素瓢
	鶴侶
	真水
	友蛙
	きくミ
	菊丸
	菊月
	茂里
	志津歌
	稲州
	住田
	千山
	桃々
	桐井
	梅里
	桃川
	薫
	不争
	よしミ

国名	俳号
武蔵	麦友
	万樹
	山鳥
	花篤
	寿水
	愛山
	鴬窠
	柏英
	利貞
	美知太
	歌扇
	菊英
	皎山
	義邨
	雅鶴
	魯山
	雄山
	静湖
	英雉
	沢雉
	遊春
	青吏
	如菊
	閑嶺
	和可奈
	喜外
	■宜
	玉山
	里松
	むつミ
	智秋
	文友
	桃蕾
	三栄
	吉東
	而耕
	素竹

国名	俳号
武蔵	邑邦
	海月
	初来
	鮮露
	愈喜丸
	一理喜
	一井
	皆如
	梅巣
	俄友
	曽木
	夢覚
安房	寿白
	思昔
	一嘯
	梅学
	碩学
	花源
	雪山
	雨辰
上総	他山
	露光
	山楽
	可都良
	霞樵
	蓮蕊
	竹節
	釣月
	雪香
	楽只
	柳蛙
	史雄
	河梁
	素齋
	耕雲
	景文
	蘭哉

国名	俳号
下総	英雅
	樗風
	雲石
	旭齋
	好風
	唯一
	黙雷
	年山
	春城
	林風
	亀遊
	勝古
	金月
	盡誠堂
	曙雪
	可嘯
	月汀
	青海
	乙年女
	兎臼
	世外
	馬谷
	一川
	汎翠
	左太
	英雅
	歩山
	虎遊
	宗露
	叟明
	子彦
	里節
	泉渓
	隆旭
	露松
	豊旭
	湖心

国名	俳号
下総	以兄
	尚之
	李塘
	完鴎
	涼坪
近江	文友
美濃	藍庭
	竹茁
信濃	雪麿呂
	雲老
	金石
	楽二
	採花女
	月窓
	堆山
上野	牧雄
	文河
	栞古
	菫崕
	松轡
	半海
	青我
	風来
	鶴翁
	子峯
	清容
	花雄
	半校
	琴正
	玉晴
	阿丸
	半
	可京
	卓堂
	勝里
	閑窓
	菊崕

国名	俳号
上野	笠野
	豊湖
	柳圃
	万古
	かつミ
	為流
	恭洲
	一静
	一琴
	更河
	佳香
	巴静
	耕圃
	高湖
	卯兮
	些知
	梅里
	竹立
	乙瓢
	紫原
	可三
	月叟
	光同
	繁弘
下野	茶逸
陸前	青宜
	一府
陸中	此一
陸奥	素更
	有川
岩代	壮山
	松圃
	袋蜘
	文起
	丈平
	菜史
	露守

国名	俳号
岩城	對知
	方雄
	岱岳
	扇可
	寄柳
	宝亀
	春潦
	見二
	桃壺
	芳塢
羽前	西湖
	鶴樹
	一艨
	辰風
	五風
	古朴
	梅丘
	梅閣
	梅里
	梅舘
	未学
	風鵞
	幹月
	翫月
	市耕
	也■
羽後	吟風
	二葉
江差	一鼎
函舘	無外
渡島	紫山
後志	北鯤
	對九
	濤月
若狭	樵路
加賀	柏葉
	有海

国名	俳号
加賀	文器
越中	其諺
越後	春旭
	柳鳥
	蘭圃
	雨蛙
	枕石
	梅山
	雪潮
	雪江
	雪洋
	菊遊
	百汲
	露月
	春塘
	旭扇
	晴雲
	栞丸
	竹陰
	亀石
	夢得
	思常
	夏吉
	雪堂
	鳫齋
	雪兆
	小伶
	白化
佐渡	暮堂
	斧刪
丹後	青柿
因幡	鳥牙
	一樹
	應波
伯耆	誰也
	春里
出雲	曲川

国名	俳号
播磨	山端
備後	犁春
周防	春阿
長門	五粒
伊豫	其戒
土佐	木鶏
	松塘
	梅左
	五菖
	半林
紀伊	芹丈
淡路	周策
	晩香
阿波	宇雀
	思風
	芳桂
	■年
肥前	西洲
	山畝
豊後	乙人
雲水	弘湖
	淡水

3. 各俳人の句数

3.1. 『題詠俳諧明治千五百題』各俳人の句数

俳号	句数	人名録住居	備考
吟風	107	羽後	
澄江	55	東京	
仁里	53	下総埴生郡成田人今在上総	
聴松	46		編者だが、人名録には記載なし
竹左	44	阿波	
半窓	44	伊予	
壽道	37	相州	
而嘯	35	常陸	本文の国名に磐城とあり →人名録の住居と不一致
露月	32	越後	
みとり	32		人名録になし 本文の国名に常陸とあり
梅宿	31	長門	
春湖	30	東京	
沙明	29	備前	
拾蕊	29	阿波	
素山	29	秋田	
芹舎	27	下京	本文の国名に西京とあり
可夕	23	下総	
魯堂	23	東京	
雨江	23	東京	
旭旦	22	常陸	
菖溪	22	阿波	
梅理	22	下総	
仙夫	22	越中	
稲處	22	西京	
旭齋	21	下総	
雲容	21	相州	
楠枝	21	信州	
涼雨	21	相州	
桃李	20	東京	
虎遊	20	下総	
良志久	20	下総	

汀夫女	19		人名録になし 人名録に汀夫は存在(武州の人)
雪野	19	阿波	
禾年	19	駿河	
節水	19	讃岐	
鶴皐	19	相州	
文真	19	下総	
南齢	19	大坂	「南令」も同一人物とみなして集計
竹里	18	常陸	
無漏	18	東京	
畑雨	18		人名録の住居空欄 本文の国名に丹後とあり
山呼	18	常陸	本文の国名に東京とあり →人名録の住居と不一致
暁雨	17	備後	
令松	17	常陸	
梅可	17	常陸	
鴬居	17	伊予	
等栽	17	東京	
如林	17	阿波	
幹雄	17	東京	「ミき雄」も同一人物とみなして集計
岷水	15	陸中	
祥雨	15	下総	
三都雄	15	筑前	
吉海	15	下野	
二葉	14	羽後	
有哉	14	武州	
松霧	14	備前	
真海	14	讃岐	
春川	14	阿波	
草室	14	備前	
奇峰	14	常陸	
雨村	13	下総	
介々	13	常陸	
糸麿	13	常陸	
神霞	13	常陸	
里蝶	13	伊予	
可中	13	常陸	

庚午	13		人名録になし 本文の国名に東京とあり
盡誠堂	13	下総	
佳大	13	伊予	本文の国名に「伊予」とあるが、一部「讃岐」と記載あり
枝礼	13	信州	
東月	13	磐城	
蓬宇	13	三河	
掃水	12	常陸	
富水	12	東京	
謝孫	12	下総	
完鴎	12		人名録になし 本文の国名に武蔵とあり
涼花	12	武州	
得水	12	伊勢	
一林	12	下野	
楊堂	12	三河	
盛虬	12	陸中	
閑窓	12	上毛	
青暁	12	越後	
露英	12	陸奥	
濯園	12	常陸	
北洲	12		人名録住居空欄 本文の国名に「東京」と記載された句が2句。それ以外は空欄。
旭山	11	常陸	
未醒	11	東京	
碩斉	11	伊予	
一鼎	11	北海道	
洞雨	11	阿波	
十湖	11	遠州	
柏園	11	下総	
此桂	11	備後	
松塘	11	土州	
松青	11	東京	
逸素	11	肥前	
克明	11	武州	
一和	11	相州	

李川	11	三河	
李暁	11	下総	
一兄	11	常陸	
木尾	11	因州	
蒼翠	11	下総	
竹條	11	阿波	
鶴影	11	備前	
湖陽	11	磐城	
玉成	11	東京	
木雞	11	土州	
帰楽	11	羽後	
五功	11	武州	
呉仙	10	東京	
守中	10	遠州	
鳥牙	10	因州	
詢蕘斉	10		人名録の住所空欄 本文の国名に東京とあり
至哉	10	相州	
歩山	10	下総	
雪柴	10	駿州	
黒樵	10	伊勢	
臼左	10	武州	
里岐雄	10	羽後	
竹炟	10	相州	
菊雄	10	東京	
邑邦	10	武州	
松星	10	磐城	
遅水	10	下毛	
雪外	10	阿波	
維夕	10	筑前	
芳盛	10	因州	
松圃	10	岩代	
可梁	10	豊後	人名録に2人いるが、いずれも豊後日田隈町 どちらの人物を指すのか区別つかず
旭山	9	伊予	
月彦	9	下総	
為麟	9	羽後	

譲山	9	武州	
胡竹	9	甲州	
四清	9	常陸	
宇雀	9	阿波	
無染	9	阿波	
一鶴	9	備中	
三芝	9	因州	
柏軒	9	在咸鏡道元山津領事館	
一醉	9	相州	
奇柳	9	磐城	
旭扇	9	越後	
宝亀	9	磐城	
塵外	9	相州	
宗露	9	下総	
素水	9	東京	
宇郷	9	常陸	
月彦	8	東京	
鶯笠	8	東京	
永機	8	東京	
雲濤	8	武州	
宇山	8	東京	
柳湖	8	東京	
氿翠	8	下総	
楚山	8	在下総	
花庭	8	筑前	本文の国名に筑後とあり →人名録の住居と不一致
文友	8	武州	
蔵中	8	伊勢	
精知	8	東京	
木甫	8	信州	
未隆	8	常陸	
扇可	8	磐城	
青宜	8	陸前	
石友	8	豊後	
素仙	8	信州	
卓山	8	伊予	
壽水	8	三河	

三千雄	8	豊前	
竹茁	8	美濃	
掬水	8	羽後	
山月	7	東京	
了逸	7	武蔵	
芳笠	7	讃州	
嵐月	7	淡路	
鴬梭	7	阿波	
思風	7	阿波	
如風	7	磐城	
梅雄	7	阿波	
麗岬	7	三河	
居卜	7	三河	
月杵	7	東京	
松枝	7	磐城	
梅年	7	東京	
詩竹	7	東京	
鶴翁	7		人名録になし 本文の国名に下総とあり
董水	7	武州	
黙平	6	京橋	
語山	6	下野	
成雅	6	東京	
梅谷	6	駿州	
桂雨	6	備中	
花朝女	6		人名録になし 人名録に花朝は存在(東京の人)
多久園	6		人名録になし
岸梅	6	備前	
犂春	6	西京人漫遊中	
鼡六	6	阿波	
只山	6	常陸	
梅雪	6	武州	
樹雪	6	豊前	
知拙	6	安芸	
聴濤	6	讃州	
玉樹	6	武州	
其調	6	在福岡	

粹白	6	下京	本文の国名に西京とあり
潮宜	6	下毛	
徳風	6	陸奥	
柳吹	6	備前	
脩竹	6	常陸	
はしめ	6	尾州	人名録本名に黒田はしめとあり(俳号は甫) この人物を指すと思われる
孤遊	6	豊前	
蘭月	6	豊前	
文禮	6	東京	
得之	6	東京	
梅晴	6	讃岐	
南棲	6	備前	
山光	6	横浜	本文の国名に「横浜」とあるが、一部「武蔵」と記載あり
完岱	6	東京	夏の部 32 丁目「宗岱」とあるが、人名録に存在せず 人名録に存在し、国名が一致する「完岱」の書き損じだと思われる
北海	6	讃州	
千尋	6	在熊本	本文の国名に「信濃」とあったり、「在琉球」と書かれていたりする →人名録の住居と不一致
道生	6	信州	
流美	6	大坂	
雪堂	6	三河	
定一	5	越後	
冬湖	5	下毛	
翠河	5	東京	
雪詠	5	武州	
古笠	5	東京	
一由	5	伊勢	
徂康	5	尾州	
珂水	5	東京人方今漫遊中	
花硯	5	甲州	
雨泊	5	伊予	
西洲	5	肥前	

連水	5	伊豆	
雲卧	5	信州	
鶴遊	5		人名録になし 本文の国名に「武蔵」、「東京」
湖詠	5	磐城	
素問	5	伊勢	
保壽	5	東京	
三千風	5	東京	
聿水	5	東京	
和仙	5	上毛	
澄霞	5	常陸	
精之	5	東京	
米年	5	駿州	
一榻	5	讃岐	
半山	5	遠州	
應波	5	因州	
朝光	5	三河	
米珠	5	丹後	
有柳	5	武州	
一蚯	5	常陸	
己有	5		人名録に 2 人いる(後志、在後志) 国名は後志と記載された句が 4 句、空欄が 1 句
凌冬	5	信州	
釣月	5	下総	
可友	5	肥後	
二洲	4		人名録住居空欄 本文の国名に東京とあり
採花女	4		人名録になし 人名録に採花は存在(信濃の人)
桂花女	4		人名録になし 人名録に桂花は存在(東京の人)
潮水	4	大坂	
十水	4	漫遊生	本文の国名に西京とあり
其戎	4	伊予	
蟻城	4	志州	
芳泉	4	東京	
沙山	4	今在羽後	

和親	4	下総	
清志	4	下総	
里川	4	陸奥	
叟明	4	下総	
二京	4	東京	
黄玉	4	備前	
愛竹	4	美作	
雨節	4	伯耆	
蘆水	4	豊前	本文の国名に「豊前」とあるが、一部「常陸」とあり
史泉	4	遠州	
閑水	4	下総	
抱清	4	阿波	
壮央	4	東京	
湛水	4	遠州	
梅塢	4	佐渡	
松暁	4		人名録になし 本文の国名に伊予とあり
乗化	4	東京	
雨水	4	讃岐	
岱梅	4	東京	
一滴	4	志摩	
有岳	4	陸奥	本文の国名に後志とあり →人名録の住居と不一致
文衡	4	武州	
ノ左	4	信州	
白隣	4	甲州	
伯雅	4	豊前	
拾菓	4	阿波	
雨丈	4	下総	
雪主	4	越前	
冬語	4	伊予	
竹友	4	豊前	
椿年	4	志州	
竹良	4	甲州	
竹潭	4	阿波	
菊應	4	阿波	
陽山	4	羽前	

耳洗	4	常陸	
山端	4	東京	
可節	4	甲州	
圭齋	4	信州	
糸風女	4	常陸	
仙哥	4	常陸	
馬耳	4	東京	
杏庭	4	肥後	
幽亭	4	伊予	
九成	4	駿州	
亀月	4	肥後	
二江	4	讃岐	
季山	4	下総	
八鳩	4	常陸	
仙壺	4	常陸	
千畝	4	東京	
華香	4	東京	
氷斉	4	肥後	
隆旭	4	下総	
之引	4	東京	
万年	4	遠州	
太雅	4	武州	
甫三	3	陸前	
夢外	3	下毛	
可慎	3	羽後	
梅窓	3	阿波	
如牛	3	遠州	
若楓	3	下総取手駅今在東京	
壽仙	3	駿州	
静処	3	尾州	
如扇	3		人名録の住居空欄 本文の国名に東京とあり
文圃	3	阿波	
西立	3	信州	
大喬	3	東京	
語外	3	備後	
友昇	3	横浜	

花鸚	3	筑前	本文の国名に筑後とあり →人名録の住居と不一致
一眺	3	羽後	
漣々	3	東京	
松雄	3	東京	
岱馬	3	豊前	
仙民	3	陸前	
奇雲	3		人名録になし 本文の国名に上総とあり
子弘	3	東京	
一舫	3	常陸	
菊之	3	東京	
美静	3	下総	
夜牛	3	遠州	
草山	3	陸中	
花角	3	常陸	
月雄	3	越後	
一閑	3	羽後	
鶯雅	3	東京	
玄黙	3	土佐ノ人漫遊中	
松濤	3	常陸	
松月	3	阿波	
竹舎	3	東京	
芳齋	3	越中	
翠嵐	3	越後	
露好	3	越後	
昌山	3	甲州	
北翠	3	讃州	
華城	3	武州	
元海	3	伊勢	
松翁	3	讃岐	
百嶺	3	三河	
竹鶯	3	伊勢	
桃宜	3	下毛	
竹華	3	遠州	
卓水	3	讃岐	
春塘	3	越後	
霞城	3	遠州	

芳洲	3	陸中	
襦鶴	3	尾州	
涼坪	3	東京	
河梁	3	上総	
一風	3	磐城	
成之	3	武州	
也壮	3	羽後	
芳直	3	讃州	
漁村	3	常陸	
喜明	3	下総	
月兮	3	常陸	
幽香	3	伊勢	
五拙	3	駿州	
桃園	3	肥後	
永年	3	東京	
惠畝	3	遠州	
年山	3	下総	
寄松	3	伊予	
羽長	3	阿波	
西行	3	備後人今在遠州	
花村	3	三河	
那美女	3	信州	
午山	3	豊前	
愛之	3	近江	
柴夫	3	東京	
一府	3	陸前	
嘯々	3	東京	
金松	3	甲斐	
嘯山	3	東京	
竹窓	3	三河	
松露	3	磐城	
増女	3	三河	「ますめ」も同一人物とみなして集計
歌舌	3	東京	
富水	2	出雲	
北洲	2	上野	
定一	2	三河	
守朴	2	能登	
清進	2	武州	

以兄	2	下総	
司水	2	信州	
一芳	2	信州	
秀葉	2	東京	
交雅	2	東京	
竹陰	2	東京	
魯周	2	下総	
草畝	2	肥前	
杜月	2	肥前	
拾英	2	阿波	
梅糸	2	陸前	
誠斉	2		人名録の住居空欄 本文の国名に常陸とあり
桃壺	2	磐城	
護静	2	東京	
兼雄	2		人名録になし 本文の国名に下総とあり
一算	2	三河	
二春	2	伊予	
一有	2	越中	
三桃	2	越中	
梅節	2	讃岐	
曲川	2	出雲	
指月	2	豊前	
如木	2	下総	
春甫	2	志州	
西星	2	磐城	
周湖	2	遠州	
鼎湖	2	三河	
春蒼	2	伯耆	
吟雪	2	伊予	
好山	2	静岡	
乙彦	2	漫遊今在静岡	
庭甫	2	東京	
爽甫	2	常陸	
連甫	2	伊予	
一旭	2	豊前	
磐の	2	伊勢	

半田	2	常陸	
露心	2	越中	
蕉影	2	越後	
枕肱	2	豊前	
一週	2	三河	
成田	2	常陸	
静水	2	伯耆	
松志	2	志州	
猗竹	2	常陸	
秀笠	2		人名録になし 本文の国名に東京とあり
芹岱	2	越中	
一琴	2	上野	
舜岱	2	在西京	
双竹	2	播州	
素凉	2	遠州	
醉雨	2	尾州	
才水	2	越中	
鴬谷	2	相州	
祇園	2	備前	
水芝	2	播州	
蝶睡	2	在相州	
而洗	2	武州	
よし彦	2	備前	
可洗	2	尾州	
美山	2		人名録になし 本文の国名も空欄
孤松	2	駿州	
松芳	2	駿州	
柳絮	2	常陸	本文の国名に磐城とあり →人名録の住居と不一致
梅暁	2		人名録になし 本文の国名に磐城とあり
破玉	2	在後志	
撫松	2	在韓対馬ノ人	
太年	2	東京	
壽山	2	陸前	本文の国名に「陸前」とあるが、一部「陸奥」とあり

五菖	2	土佐人漫遊中	
二松	2	伯耆	
梅枝	2	信州	
青左	2	伊勢	
静荷	2	下総	
梧桐	2	伊豆	
菊蓉	2	羽後	
竹登	2	阿波	
市山	2	豊前	
喜雀	2	伊豆	
不求	2	伊予	
錦谷	2	下総	
東岸	2	信州	
蝸堂	2	駿河	
半醉	2	東京	
可良	2	信州	
居一	2	豊前	
茶因	2	東京	
楽只	2	上総	
晃雄	2	武州	
蕉雪	2	常陸	
■風	2		聴風(人名録になし)か徳風(人名録に存在)かと思われる
乙朗	2	東京	
友笑	2	三河	
蕉月	2	信州	
松右	2	東京	
水石	2	大和	
二鼎	2	尾張	
亀友	2	東京	
鶴朋	2	武蔵	
治風	2	東京	
生水	2	備前	
延子	2	東京	
棹舟	2	伊予	
箕堂	2	相模	
柔古	2	上野	
其流	2	伊予	

支節	2	東京	
沙印	2	後志	
鴻湖	2	佐渡国人今在東京	
梧丘	2	上総	
花好	2	陸前	
旭山	1		人名録にあるのは伊予と常陸の人だが、 本文の国名に阿波とあり
富水	1		本文の国名が記載されておらず、東京、 出雲どちらに属するのか特定できず
守拙	1	東京	
三喬	1	磐城	
魯雲	1	阿波	
緒依	1	東京	
李塘	1	下総	
霜村	1	東京	
宗亭	1	伊勢	
千賀女	1		人名録になし 本文の国名に豊前とあり
一徳	1	常陸	
如沢	1	信州	
蝶二	1		人名録になし 本文の国名も空欄
栄松	1		人名録になし 本文の国名に常陸とあり
素逸	1	駿州	
玉揃	1		人名録になし 本文の国名も空欄
草露	1		人名録になし 本文の国名に下総とあり
鶴一	1		人名録になし 本文の国名も空欄
山木	1		人名録になし 本文の国名も空欄
煙雨	1		人名録になし 本文の国名も空欄
■■	1		未解読
荷洲	1	陸中	
閑茶	1	相模	

3.2. **『俳諧明治七百題』各俳人の句数**

俳人	句数	国名	備考
澄江	191		編者だが、人名録に記載なし
ミき雄	115		校正者だが、人名録に記載なし
春城	105	下総	椿城 1 句含む
一理喜	98	武蔵	
浪兄	97	東京	
亀遊	96	下総	
詩竹	82	東京	
等栽	65	東京	
富水	62	東京	
辰風	46	羽前	
宇山	43	東京	
秀奇	43	東京	
完岱	38	東京	
半海	36	上野	
鴬窠	36	武蔵	
曽木	35	武蔵	
鮮露	34	武蔵	
月彦	33	東京	
万樹	31	武蔵	
角丈	30	武蔵	
素水	29	東京	
鴬笠	28	東京	
愛山	28		伊豆と武蔵どちらであるか特定できず
乙朗	27	東京	
柳叟	27	東京	
完鴎	27	下総	
閑嶺	26	武蔵	
有柳	24	武蔵	
鴎邨	24	東京	
一府	22	陸前	
茂翠	21	東京	
月杵	19	東京	
馬勇	19	東京	
菊焉	19	東京	
義邨	19	武蔵	義村 1 句も含む

静湖	18	武蔵	
喜山	18	武蔵	
春湖	16	東京	
山月	16	東京	
而耕	16	武蔵	
素竹	16	武蔵	
寿白	15	安房	
雨蛙	14	越後	
李塘	14	下総	
奇水	13	横濱	
玉山	13	武蔵	
青我	13	上野	
春旭	13	越後	
予雲	12	東京	
松圃	12	岩代	
俄友	12	武蔵	
聴松	12	東京	
香芸	12	甲斐	
文友	12		武蔵と近江どちらであるか特定できず
菊外	12	東京	
潮水	11	大阪	
芹舎	11	西京	
成雅	11	東京	
千山	11	武蔵	
三千守	10	東京	
精知	10	東京	
竹葉	10	東京	
柳泉	10	東京	
梅丘	10	羽前	
金月	10	下総	
山端	10	播磨	
繁弘	10	上野	
雪潮	9	越後	
五風	9	東京	
英雅	9	下総	下総に 2 人存在 どちらが何句詠んだが分からず
智秋	9	武蔵	
素石	9	東京	

梅里	9		人名録では武蔵、上野、羽前に存在 本文中に国名が記載されていないため、句数を特定できず
他山	9	上総	
連水	9	伊豆	
弘湖	9	雲水	
梅舘	9	羽前	
海月	8	武蔵	
歌扇	8	武蔵	
えひら女	8	東京	
菊英	8	武蔵	
一井	8	武蔵	
雅鶴	8	武蔵	
よしミ	8	武蔵	
子峯	8	上野	
里柏	8	伊豆	
古朴	8	羽前	
岱岳	8	岩城	岱丘 1 句含む
金羅	7	東京	
五雀	7	東京	
牧雄	7	上野	
花朝女	7	東京	
桒古	7	上野	
黙雷	7	下総	
里松	7	武蔵	
喜外	7	武蔵	
風来	7	上野	
亀山	7	東京	
万子	7	東京	
可朝良	7	上総	
亀石	7	越後	
方雄	7	岩城	
柳佳	7	武蔵	
稲処	6	西京	
白隣	6	甲斐	
年山	6	下総	
梅有	6	伊勢	
九江	6	甲斐	

梅閣	6	羽前	
素屋	6	大阪	
菫崕	6	上野	
石丈	6	東京	
對知	6	岩城	
竹良	6	甲斐	
唯一	6	下総	
桃蕾	6	武蔵	
惺地	6	甲斐	
友思	6	甲斐	
鳫齋	6	越後	
邑邦	5	武蔵	
大喬	5	東京	
鶴翁	5	上野	
菊遊	5	越後	
蘭圃	5	越後	
桃々	5	武蔵	
茂里	5	武蔵	
壮山	5	岩代	
幽井	5	武蔵	
華旭女	5	東京	
田彦	5	甲斐	
虎遊	5	下総	
涼坪	5	下総	
五菖	5	土佐	
景文	5	上総	
未学	5	羽前	
半林	5	土佐	
園守	5	甲斐	
幹月	5	羽前	
光同	5	上野	
薫	5	武蔵	
文河	5	上野	
花篤	5	武蔵	
花源	5	安房	
杜鳥	5	武蔵	
基雄	5	甲斐	
不争	5	武蔵	

風鵞	5	羽前	
釣月	4	上総	
百汲	4	越後	
青吏	4	武蔵	
道雄	4	甲斐	
一葉	4	東京	
露守	4	岩代	
以兄	4	下総	
住田	4	武蔵	
雪兆	4	越後	
蓬宇	4	三河	
春潦	4	岩城	
桃川	4	武蔵	
雪堂	4	越後	
笠野	4	上野	
魯山	4	武蔵	
勝古	4	下総	
遊春	4	武蔵	
露光	4	上総	
椎吟	4	伊豆	
可三	4	上野	
巴静	4	上野	
世外	4	下総	
素齋	4	上総	
詩葉	4	東京	
素瓢	4	武蔵	
臼左	4	武蔵	
益渓	4	東京	
沢雉	4	武蔵	
琴正	4	上野	
勝里	4	上野	
盡誠堂	4	下総	
佳香	4	上野	
白化	4	越後	
雪香	4	上総	
春塘	4	越後	
晈山	4	武蔵	
友蛙	4	武蔵	

亀■	4	甲斐	
柏英	4	武蔵	
如菊	4	武蔵	
三栄	4	武蔵	
為流	4	上野	
一鼎	4	江差	
蓮所	4	東京	
椿年	4	甲斐	
寄柳	4	岩城	
菊崕	4	上野	
卓堂	4	上野	
一琴	4	上野	
旭扇	4	越後	
豊旭	4	下総	
耕雲	4	上総	
碩学	4	安房	
志津歌	4	武蔵	
山楽	4	上総	
雄山	4	武蔵	
閑窓	4	上野	
乙瓢	4	上野	
豊湖	4	上野	
可京	4	上野	
松轡	4	上野	
露松	4	下総	
真水	4	武蔵	
柳子	4	甲斐	
卯兮	4	上野	
花雄	4	上野	
玉晴	4	上野	
扇可	4	岩城	
一嘯	4	安房	
英雉	4	武蔵	
吉東	4	武蔵	
鶴侶	4	武蔵	
李仙	4	東京	
乙年女	4	下総	
阿丸	4	上野	

耕圃	4	上野	
初来	4	武蔵	武蔵に 2 人存在 どちらが何句詠んだが分からず
初霞	4	武蔵	
梅学	4	安房	
菊丸	4	武蔵	
叟明	4	下総	
稲守	4	甲斐	
竹立	4	上野	
桃子	4	武蔵	
芳桂	4	阿波	
芳塢	4	岩城	
柳鳥	4	越後	
夏吉	4	越後	
史雄	4	上総	
梅左	4	土佐	
竹陰	4	越後	
見二	4	岩城	
愈喜丸	4	武蔵	
柳圃	4	上野	
楽只	4	上総	
和歌菜	4	武蔵	和可奈と同一と見做すと国は武蔵
桃壺	4	岩城	
露月	4	越後	
兎臼	4	下総	
栞丸	4	越後	
宗露	4	下総	
雪江	4	越後	
柳栽	4	東京	
隆旭	4	下総	
山鳥	4	武蔵	
麦友	4	武蔵	
枕石	4	越後	
むつミ	4	武蔵	
八鶯	4	武蔵	
永機	4	東京	
菊月	4	武蔵	
志成	4	武蔵	

翠葉	4	東京	
一畷	4	武蔵	
一昌	4	武蔵	
湖心	4	下総	
半校	4	上野	
杉夕	4	甲斐	
まきの	4	武蔵	
袋蜘	4	岩代	
晴雲	4	越後	
菜史	4	岩代	
雪洋	4	越後	
越鶏	4	武蔵	
呉仙	3	東京	
万古	3	上野	
高湖	3	上野	
故崕	3	相模	
對鵞	3	武蔵	
文器	3	加賀	
紫原	3	上野	
犁春	3	備後	
丈平	3	岩代	
柳蛙	3	上総	
晩香	3	淡路	
竹節	3	上総	
曙雪	3	下総	
千畝	3	東京	
里節	3	下総	
為川	3	甲斐	
恭洲	3	上野	
林風	3	下総	
佳翠	3	武蔵	
泉渓	3	下総	
仙輅	3	甲斐	
月汀	3	下総	
尚之	3	下総	
きくミ	3	武蔵	
些知	3	上野	
蓮蕊	3	上総	

友■	3		特定できず
馬谷	3	下総	
小岱	3	越後	
霞樵	3	上総	
汎翠	3	下総	
宝亀	3	岩城	
稀遊	3	甲斐	
はしめ	3		人名録になし
十湖	3	遠江	
芳泉	3	東京	
蘭哉	3	上総	
青海	3	下総	
文起	3	岩代	
木鶏	3	土佐	
雀眠	3	武蔵	
斗月	3	甲斐	
河梁	3	上総	
清香	2	甲斐	
愛海	2	東京	
桂花	2	東京	
淡水	2	雲水	
木潤	2	遠江	
左太	2	下総	
梅輪	2	武蔵	
月叟	2	上野	
石芝	2	三河	
梅年	2	東京	
好風	2	下総	
楽二	2	信濃	
花詠	2	武蔵	
有川	2	陸奥	
連梅	2	大阪	
子彦	2	下総	
一静	2	上野	
羽海	2	尾張	
菊雄	2		人名録になし
左助坊	2	横濱	佐助坊も含む
千秋	2		人名録になし

金石	2	信濃	
夢覚	2	武蔵	
尋香	2	東京	
利貞	2	武蔵	
寿水	2	武蔵	
其戒	2	伊豫	
思常	2	越後	
思昔	2	安房	
芹丈	2	紀伊	
對九	2	後志	
雲石	2	下総	
可尊	2	武蔵	
雷石	2	甲斐	
梅■	2		特定できず
一聲	2		人名録になし
歩山	2	下総	
■■	2		特定できず
花翫	2	甲斐	
西洲	2	肥前	
月■	2	大阪	
友昇	2	横濱	
松雄	2	東京	
梧桐	2	伊豆	
蔦雄	2	相模	
車悦	2	武蔵	
一川	2	下総	
旭齋	1	下総	
士敬	1	伊豆	
閑美	1	伊勢	
南市	1		人名録になし
美知太	1	武蔵	
三楓	1	尾張	
素更	1	陸奥	
謝徳	1	東京	
沙山	1	東京	
嵐松	1	横濱	
宇雀	1	阿波	
春阿	1	周防	

喜連川	1	甲斐	
雪麿	1	信濃	
かつら	1		人名録にかつら女はあり
一樹	1	因幡	
山外	1		人名録になし
周策	1	淡路	
可嘯	1	下総	
梅山	1	越後	
北鯤	1	後志	
卓志	1	摂津	
翫月	1	羽前	
百可	1	西京	
静処	1	尾張	
五田	1		人名録になし
誰也	1	伯耆	
■年	1	阿波	
青柿	1	丹後	
俊賀	1	東京	
青宜	1	陸前	
斧刪	1	佐渡	
竹茁	1	美濃	
市耕	1	羽前	
友甫	1	武蔵	
紫山	1	渡島	
夢得	1	越後	
思風	1	阿波	
柏葉	1	加賀	
西湖	1	羽前	
應波	1	因幡	
春暁	1		人名録になし
樗風	1	下総	
月窓	1	信濃	
有海	1	加賀	
不扁	1	武蔵	
雪山	1	安房	
雲老	1	信濃	
吟風	1	羽後	
樵路	1	若狭	

鳥牙	1	因幡	
松塘	1	土佐	
茂精	1		人名録になし
生水	1	東京	
鴎人	1		人名録になし
採花	1	信濃	
春里	1	伯耆	
漁藻	1	西京	
末成	1	駿河	
此一	1	陸中	
太年	1	東京	
青暁	1		人名録になし
閑茶	1	相模	
雨之	1		人名録になし
其隣	1	摂津	
清光	1		人名録になし
松翁	1	武蔵	
好鴬	1	武蔵	
五休	1	東京	
藍庭	1	美濃	
かつら女	1	駿河	
■堂	1		特定できず
半	1	上野	
二葉	1	羽後	
也■	1	羽前	
醉雨	1	尾張	
黙平	1	東京	
五粒	1	長門	
林■	1		特定できず
寿山	1		人名録になし
有■	1		特定できず
里■	1		特定できず
其諺	1	越中	
乙人	1	豊後	
鶴樹	1	羽前	
斗年	1		人名録になし
一山	1		人名録になし
濤月	1	後志	

雨辰	1	安房	
薫山	1		人名録になし
拾山	1	西京	
梅巣	1	武蔵	
■風	1		特定できず
曲川	1	出雲	
無外	1	函舘	
皆如	1	武蔵	
亀友	1		人名録になし
一艨	1	羽前	
恵布	1	武蔵	
堆山	1	信濃	

4.『題詠俳諧明治千五百題』発行書林

東京	北畠茂兵衛
同	稲田佐兵衛
同	山中市兵衛
同	江島喜兵衛
同	丸屋善七
同	水野慶次郎
同	内藤泰次郎
同	出雲寺萬治郎
同	石川治兵エ
同	荒川藤兵エ
同	品川登羅
同	北澤伊八
同	小林喜右エ門
東京	長野亀七
同	吉川半七
同	中村佐助
同	穴山篤太郎
同	博聞社
同	山中孝之助
同	稲田政吉
同	山中喜太郎
同	牧野善兵エ
同	牧野吉兵エ
同	鈴木忠蔵
同	福田仙蔵
同	別所平七
東京	柳川梅治郎
同	岡村庄助
同	福田勝蔵
同	朝倉久兵エ
同	青山清吉
同	東生亀治郎
同	岡田文助
同	江嶌伊兵エ
大坂	前川善兵エ
同	前川源七郎
同	柳原喜兵エ

同	吉岡平助
同	梅原亀七
同	赤志忠七
西京	大谷仁兵エ
同	田中治兵エ
同	川勝徳次郎
尾張名古屋	片野東四郎
同	矢田藤兵エ
同	三輪文治郎
同	栗田東平
同	梶田源助
同半田	小栗太郎兵エ
同大野	伊藤真蔵
伊勢四日市	伊藤善太郎
同	中島冨三郎
同桑名	大塚茂兵エ
同津	篠田伊十郎
伊勢松坂	本屋嘉助
同	山本亀太郎
同山田	藤原長平
美濃大垣	岡安啓助
同	平野利兵エ
同岐阜	三浦源助
同	水谷善七
同笠松	玉井忠造
三州岡崎	伊藤文吉
同豊橋	髙須又八
同新城	村田英吉
遠江濱松	齋藤源三郎
同	落合清七
同	白木健次郎
遠州濱松	三盟社支店
同見附	古澤良作
同	酒井忠造
同二俣	天井金蔵
同掛川	大塚好五郎
同相良	大坂屋弥平

駿河藤枝	遠州安兵エ
同	塩川健三郎
同静岡	佐藤俊平
同	廣瀬市蔵
同沼津	吉成壽三郎
同	小松浦吉
同	荒川源助
甲斐山梨	内藤傳右エ門
甲斐山梨	弁達會社
伊豆三島	關谷利右エ門
同	小西又三郎
同下田	平野屋久七
相模小田原	米屋忠兵エ
同	曽比屋平七
同	大島治郎兵エ
同伊セ原	山田浅次郎
同横須賀	金田金次郎
武蔵横濱	吉川伊兵エ
同深谷	酒井省吾
同	小野脩三
同本庄	酢屋安兵エ
同鴻巣	長島爲一郎
武蔵熊谷	松枝悦三郎
同川越	岸田屋文次郎
同秩父	井上伊三郎
同浦和	藤屋源作
安房那古	山崎屋長兵エ
同北條	山下安民
同吉濱	安喜良新四郎
上總木更津	和田屋弥兵エ
同鶴舞	石割一三
同佐貫	小松屋長七
同奉田	木屋吉左エ門
同茂田	杁田屋清吉
同木納	和國屋茂一
同東金	多田屋嘉左エ門
上總東金在	木屋和市
同松尾	嶋田成之

同大細	清鑑堂
下総野田	茂木林蔵
同千葉	藤屋錠次郎
同	伊藤周太郎
同	乙亥舎
同	博文社支店
同舟橋	品川金十郎
同永橋	大和屋佐兵エ
同佐倉	中井藤右エ門
同	吉田傳左エ門
同水海道	江戸屋伊左エ門
同布佐	榎本治郎左エ門
下總佐原	正文堂利兵エ
同	山月堂勇助
同小見川	髙寺清兵エ
同	佐野屋新次郎
同	小文堂太助
同八日市場	吉田屋儀三
同多古	江戸屋小吉
同銚子	飯田屋今治
常陸水戸	北澤安次郎
同太田	宮田雲城
同	沼尻茂兵エ
同石岡	近江屋清助
同龍ケ崎	大坂屋重兵エ
同長竿	菊地儀助
常陸土浦	伊沼弥助
同	間原子右エ門
同湖来※	叶屋榮助
同	清見屋孫四郎
飛弾髙山	桝屋重兵エ
同	坂田嘉造
信濃長野	西澤喜太郎
同	松木豊平
同松本	藤松屋楨十郎
同	髙見甚左エ門
同松代	炭屋勇太
同上田	伊藤甲造

同小諸	相場七左エ門
同	油屋礒右エ門
信濃飯田	十一屋半四郎
同上諏訪	袴屋茂吉
同	藤屋機右エ門
同	藤森平五郎
同須坂	山下八右エ門
同佐久	浅井増太
同髙遠	矢島金八
上野髙崎	崇文堂輝吉
同	文心堂源作
同藤岡	松野屋貞吉
同冨岡	治田文次郎
同太田	長岡屋鷄三郎
同桐生	竹内藤吉
同伊勢崎	川木屋平吉
岩代舘林	糸屋太吉
下野栃木	管谷甚平
同	山中八郎
同宇都宮	篠崎新左エ門
同	田野邉忠兵エ
同足利	和洋商社
同	新井金太郎
同	相場廣四郎
磐城平	清水甚三郎
同棚倉	松屋健之助
岩代福島	齋藤彦太郎
同	近江屋周吉
同若松	森万助
同	齋藤八四郎
岩代郡山	小野屋茂助
陸前仙臺	管原安兵エ
同	伊勢安左エ門
同	益友社
同	渡邊兵吉
同石ノ巻	山口啓之助
同佐沼	近江屋源左エ門
陸中一ノ関	佳芳園

陸奥青森	池田吉助
同八戸	浦山吉朗兵エ
同弘前	石井利兵エ
同	武田荘吉
越中髙岡	國本吉右エ門
同	車平次郎
羽前山形	市村五郎兵エ
同	平田弥平治
同	荒井太四郎
同	八文字屋太右エ門
同	中川久助
同谷地	田宮五郎
同鶴岡	地主文蔵
同	小池藤次郎
同上ノ山	萬屋利七
同米澤	加藤伊七
羽後秋田	本間金之助
渡島箱舘	魁文社
同	中村與七郎
後志六條	竹岡勇造
後志小樽	田附新九郎
越前福井	若代正
加賀金澤	近八郎左エ門
同	近岡屋太平
同	中村喜平
越中福光	清水清右エ門
同冨山	山野清兵エ
同	土井宇三郎
同	大橋甚吾
同	守川吉兵エ
越後新潟	堀治作
同髙田	小方長吉
同	本田勝太郎
同	藤屋直三郎
越後葛塚	三條屋七十郎
同	大坂屋榮左エ門
同長岡	二田屋治八
同	中村作平

同水原	島屋六平
同岡野	村田大三郎
同地蔵堂	伊丹屋藤吉
同小千谷	小村屋定吉
同四ツ谷濱村	佐藤友吉
同四ケ所村	竹田健
同柏崎四ツ谷	下條弥三郎
雲州松江	園山喜三右エ門
播磨姫路	小野長平
備前岡山	中島屋益太郎
周防岩國	米谷助右エ門
長州萩	山城屋彦八
防劦山口	阿部準助
筑前福岡	林斧助
同	古野徳三郎
筑後柳川	宮本宇三郎
豊前中津	梅澤壽平
同	野依暦三
豊後佐伯	東圓作
肥前佐賀	河内荘助
同長崎	以文會社
肥後熊本	長崎二郎
同	水島貫之
薩摩鹿児島	吉田甚兵エ

※「湖来」と記載されているが、「潮来」の誤記と思われる